v. 19:9

海外 ｛ 日本の野心と支那問題 ／ 戰爭の繼續と列國の態度 ｝ 新潮

中央公論

第十九年第九號

内容

THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
毎月一回一日發行　明治卅七年十月一日

反省社編輯

空文年表

菊版約三百頁紙質上等　價金三十五錢　郵税四錢
（十月下旬發刊）

本書は世人の常に必要を感じて未だ出版せられざりしものなり、その世に行はるる年表類と異る點は年號紀元等の外には史上の事件を擧る事なく餘白として存したり且つ前後通して十箇年一頁としたれば充分なる餘白を供し得ると共に參照捜索に便利なり

本書は博く世人の需用に應ぜん爲め便利と實用とを主眼とし、なるべく普通年表の陷り易き亂雜の弊を避け其配列には我社は特に意匠を凝し斬新なる方法を用ゐたれば緊要なる事項はすべて漏さず記入したるに係らず極めて簡短に且つ明瞭ならしめたり又各年號に對して索引を設け支那歷代中に於ける小覇王の年號は別表として之を卷末に附したり

各種學校にありて歷史を練習しつゝある人又は專門的に歷史を研究しつゝある人は此書の出版に由りて今後各自に年表の原本を作製するの勞を省き得へし歷史的研究の旺盛なる今日學者須らく之を座右に備へらるべし

年表は攻學者に限らす世上實務に從事する人にも必要あり我國の舊時に於てすら尚各家庭には必ず一部の年代記を藏したり本書は我新時代の要求に應すべき文明式の年代記なり、敢て之を江湖に薦む

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地　**反省社**　（電話下谷九百十九番）

東洋銅鐵雜誌

毎月一回(十五日發行)　定價一冊八錢郵稅一錢

第三號内容の概略

本誌は銅鐵に關する商工業雜誌なり

本誌は銅鐵を中心とせる社會雜誌なり

發行所　東京市神田區和泉町一番地　東洋銅鐵社

早稲田大

本大學か學問普及の一手段として率先通信教授の制を設けてより茲に二十週年滿ま帝國の地歩大に進張せんとするの機に際し國民文化の源泉を涵養するの要愈〻切實なるを感ず乃ち內容の改善は勿論諸般改良の方案を畫し面目一新更に江湖に見えんとす

政治經濟科

帝國憲法	法學博士	美濃部達吉
國家學原理	法學博士	高田早苗
國法學	法學博士	有賀長雄
經濟原論	法學博士	天野爲之
貨幣論	法學士	河津暹
財政學	法學博士	松崎藏之助
	法學士	神戸正雄
農政學	法學士	柳田國男
商業史	文學士	平沼淑郎
公債論	法學士	小林丑三郎
銀行論	ドクトル	宇都宮鼎
商業政策	法學士	井上辰九郎
外國爲替論	法學博士	天野爲之
工業政策	法學士	河津暹
西洋上古史	講師	浮田和民
西洋中世史	講師	浮田和民
	講師	村田勤
西洋近世史	講師	松平康國
政治學史	講師	浮田和民
最近時政治史	法學博士	有賀長雄
行政法汎論	法學博士	美濃部達吉
行政法各論	法學士	清水澄
殖民論	法學博士	高田早苗
地理學	農學士	志賀重昂
極東政治及商業地理	農學士	志賀重昂
社會學	文學博士	建部遯吾
法學通論	法學博士	中村進午
民法要論	法學士	鈴木喜三郎
商法論	法學士	和仁貞吉
平時國際公法	法學博士	中村進午
戰時國際公法	法學博士	有賀長雄

法律科

法學通論	法學博士	中村進午
帝國憲法	法學博士	美濃部達吉
民法總則	法學士	平沼騏一郎
物權法（壹部）	法學博士	仁井田益太郎
物權法（貳部）	法學士	牧野菊之助
債權法總則	法學士	平沼騏一郎
債權法各論	法學士	鈴木喜三郎
親族法	法學博士	中村進午
相續法	法學士	宮田四八
商法總則	法學士	岩田一郎
會社法	法學士	原嘉道
商行爲法	法學士	青山衆司
保險法	法學士	粟津清亮
手形法	法學博士	松波仁一郎
海商法	法學博士	加藤正治
刑法汎論	法學博士	岡田朝太郎
刑法各論	法學博士	岡田朝太郎
刑法問答錄	法學博士	岡田朝太郎
民事訴訟法	法學博士	仁井田益太郎
全（三篇以下）	法學士	齋藤十一郎
全（六篇以下）	法學士	岩田一郎
刑事訴訟法	法學士	豐島直通
破産法	法學士	松岡義正
行政法汎論	法學博士	美濃部達吉
行政法各論	法學士	清水澄
平時國際公法	法學博士	中村進午
戰時國際公法	法學博士	有賀長雄
國際私法	法學博士	山田三良
羅馬法	法學博士	戸水寛人

行政科

法學通論	法學博士	中村進午
帝國憲法	法學博士	美濃部達吉
民法總則	法學士	平沼騏一郎
物權法（壹部）	法學博士	仁井田益太郎
物權法（貳部）	法學士	牧野菊之助
債權法總則	法學士	平沼騏一郎
債權法各論	法學士	鈴木喜三郎
親族法	法學博士	中村進午
相續法	法學士	宮田四八
商法總則	法學士	岩田一郎
會社法	法學士	原嘉道
商行爲法	法學士	青山衆司
保險法	法學士	粟津清亮
手形法	法學博士	松波仁一郎
海商法	法學博士	加藤正治
刑法汎論	法學博士	岡田朝太郎
民事訴訟法	法學博士	仁井田益太郎
全（三編以下）	法學士	齋藤十一郎
破産法	法學士	松岡義正
行政法汎論	法學博士	美濃部達吉
行政法各論	法學士	清水澄
平時國際公法	法學博士	中村進午
戰時國際公法	法學博士	有賀長雄
國際私法	法學博士	山田三良
經濟原論	法學博士	天野爲之
財政學	法學博士	松崎藏之助
	法學士	神戸正雄
商業政策	法學士	井上辰九郎
銀行論	ドクトル	宇都宮鼎
公債論	法學士	小林丑三郎

學講義録

文學教育科

哲學綱要 文學博士 桑木嚴翼
日本倫理學史 文學士 有馬祐政
東西倫理思想史 講師 綱島榮一郎
支那哲學史 文學博士 松本文三郎
普通心理學 文學士 雀部顯宜
日本教育史 文學士 中野禮四郎
西洋教育史 講師 中島半次郎
兒童學 講師 五十嵐力

言語學 文學士 保科孝一
日本文典 文學博士 金澤庄三郎
支那文典 講師 廣池千九郎
萬葉集講義續釋 文學博士 木村正辭
駿臺雜話選釋 文學士 高木尙介
萬葉集山常百首講義 文學博士 木村正辭
源氏物語選釋 文學士 長連恒
謡物評釋 文學士 千秋季隆
漢詩評釋 講師 桂五十郎 / 文學士 鈴木虎雄

戲曲小說文選釋 講師 宮崎繁吉
支那詩文評釋 講師 青柳篤恒
日本文學史 文學士 武島又次郎
本邦漢文學史 文學士 久保得二
支那文學史 文學士 久保得二
國家學原理 法學博士 高田早苗
十九世紀佛
國文學思潮 文學博士 坪內雄藏
有職故實講義 文學博士 小杉榲邨
作文修辭法 文學士 武島又次郎
文學書解題 講師 永井一孝

歷史地理科

日本古代史 講師 久米邦武
奈良朝史 講師 久米邦武
平安朝史 講師 池田晃淵
南北朝時代史 講師 久米邦武
鎌倉時代史 講師 三浦周行
室町時代史 文學士 渡邊世祐
安土桃山時代史 文學士 渡邊世祐
德川幕府時代史 講師 池田晃淵

幕末史 講師 福地源一郎
西洋上古史 講師 浮田和民
西洋中世史 講師 村田勤
西洋近世史 講師 水口鹿太郎
西洋最近史 講師 浮田和民
露西亞史 文學士 坂本健一
バルカン半島史 講師 長田忠一
殖民史 文學士 三輪德三
淸國史 文學士 矢野仁一
近世朝鮮史 講師 林泰輔
中央亞細亞史 文學士 高桑駒吉
蒙古史 文學士 河野元三
印度史 文學士 高桑駒吉

日本地理 講師 矢津昌永
萬國地理 講師 野口保興
外國地理 講師 野口保興 / 理學士 山崎直方
地文學 理學士 石川成章
地圖學 理學士 山上萬次郎
地史學 理學博士 橫山又次郎
極東政治商業地理學 農學士 志賀重昂
歷史地理學 文學博士 坪井九馬三
日本宗教史 講師 土屋詮教
日本產業史 文學博士 橫井時冬
古文書學 講師 久米邦武
人類學 理學博士 坪井正五郎

本講義録の特色 **一ヶ年卒業の制度**にして其講義は簡明懇切、殊に文章は平易明瞭、毎號の紙數を多くして優に他の三ヶ年制以上の効果を收めしむるに在り ●正課の外**受驗欄**を置き高等文官、外交官、判檢事、辯護士及教員檢定等の試驗問題を收めて解説を與へ**雜録欄**を設けて各科專門の學術を研究する順序方法を示し參考書の案內及新刊書籍の紹介も此例、時事問題の解説を載す ●校外生には廣く**質疑**を許し又本大學圖書館に就て圖書閲覽の便を得せしめ卒業者は**准校友**として校內上級に編入する等種々の特典あり

二十週年紀念出版

戰後經營

振古未曾有の大難を凌きて平和の克復を見たるの後、我帝國々民は如何にして世界に濶歩すべきやとは刻下大に本大學は出版部創設二十週年の紀念として本大學關係の碩學大家二十有餘氏が政治、經濟、法律、文學、美術、商工業等各種方面より此大問題に向つて説示せる論策數百頁を收めたる『戰後經營』と題する書を出版し之を本學校外生に**無代配附**す

◎**月謝** ●政治、法律及行政科は一科五拾錢三ヶ月前納壹圓四拾錢、半ヶ年貳圓七拾五錢 ●文學教育及歷史地理科は一科六拾錢、三ヶ月前納壹圓七拾錢、半ヶ年參圓參拾錢兼修は減額あり

●來十月初旬各科**第一號**を發行す有志の士速に申込あるべし詳細の事項規則書に在り尚規則には本大學出版圖書の**紀念割引券**を添付せり希望者は通知あれ次第送致す

明治三十七年九月

東京牛込 **早稻田大學出版部**（電話番町三七四番）

第廿七卷第壹號

文庫

九月十五日發行

定價 一冊金拾五錢……六冊前金郵税共九十錢……十二冊前金郵税共壹圓六十八錢……一ヶ年（定期增刊四回共十六冊）前金郵税共貳圓貳拾四錢

內容の主なる者

吾感謝と苦痛（高須梅溪）是れ眞文章也是れ熱情の文字也而して是れ豈單り作者の感謝と苦痛を言ふ者ならんや今時の青年皆一讀せよ **凡魔哲學**（凡魔の弟子）凡魔子何者ぞ必ずしも彼の善魔子の後塵を拜する者ならざるに似たり這個哲學今後の誌上に續出せむ **雜觀錄**（ZXY）文學藝術人事自然觀るに隨つて自家藥籠中の物と爲す而して其富殆んど無限なり **芻蕘言**（丘の人）丘の人は文科大學の一秀才なり『明星』の『蒲鞭』事件に横槍を入れて所謂芻蕘言風霜を挾む知らず山の人友を得たりと言ふや否や **砲聲日記**（藤花）長門の一嶋に在りて露艦襲來の影響を側寫す嶋民恐慌の狀目睹するが如し是の如きの珍品毎に求めずして到るは●本誌の特色 **京都の夏秋**（松原至文）之を彼の名勝案內的文字と同一視する勿れ書家的眼孔を以て舊帝都の山水を觀月旦斬新ならずとせず **ウルフ將軍の最期**（神代蓬日）譯文の上乘なる者 **談話家 魚市場**（家城民造）寫生文の尤物特に前半談話家の傍に居る時に於て世相史の數頁を讀むの感あり **西花餘香**（蘆風）蘆風子曩に『粉紅集』を著はしてシルレル・ケーテ等諸詩聖の作を飜す今此篇に迨つて原韻幾んど完し **雛鷄守**（內海信之）可憐の雛鷄可憐の雛守之を材として詩品清新作者亦詩壇新俊髦の一なり **葭のひとよ**（ちぬを）詩人の隨筆阪人を評す力めずして自ら透徹の言あり而も着眼の點は素より世俗と同じからず **葛天氏の民**（UK生）飛驒國白川村の家族制度を叙し且論ぜるもの事已に異聞なり文豈異彩なからむや **浪人日記**（早野勘平）前號本誌所載『鰥日記』は一種變體の小說にして斯壇近來の佳作なりき此篇亦同一人の手に成る奇才の縱橫に迸る所を見よ

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 內外出版協會

中央公論 第十九年第九號 目次



スコットランドの秋色

中央公論



第十九年
第九號

移民事業の危機

（墨西哥移民送還事件に就て）

一

我國民の視線は、只管日露戰役の一事に集注して、他の有らゆる問題を忘却せるが如しと雖、多忙なる日本の社會は、絕え間なく、吾人の痛心すべき重要問題を提供しつゝ有り、彼の東洋移民會社に拘はる墨西哥移民送還事件の如き、即ち是なり。

『最も多くの殖民を有する國は、世界に於て最も大なる强國なり、例令今日は然らずとするも、明日は必らず斯くなるべし』とは、レロイ、ボリユー氏の言なり、之を實際に徵せば、今日最も富强を以て稱せらるゝ我同盟國英吉利の如き、若くは日露戰役を中心とせる外交場裡、世界の注目を集めて一種の怪腕を示せる獨逸の如き、何れも皆殖民政策に意を置かざるはなし、我國の如きも、近年殖民問題を論ずる者增加し、移民會社の如きも、明治三十一二年頃は、僅に十一二の少數なりしに、三十四年に入りて、俄に其の數を加へ、今や四十餘の多數に上れるのみならず、國民其れ自身も、鎖國の陋習を蟬脫して、爭うて海外移住の氣風を致せり、世人は武器を以て爭へる日露戰役の大捷を占むるに雀躍すと雖も、吾人は國民其れ自身の間に、年一年と斯くの如き風習を示し來れるに、無限の快怡を感ずる者也。

然るに爰に突として、墨西哥移民送還の事あり、世人の多くは僅に一移民會社に拘はる一小事なりとし

て、輕々に附せるが如しと雖も、吾人は我國が今後取るべき民族發展――移民政策の前途に、幾多の妨害を與ふべきを思うて、深く同事件の發生に遺憾を懷く者也、左に同事件の發生顛末を究るも、蓋し無用にあらざるべし。

二

世人は如何に墨西哥移民送還事件を見つゝある乎、昨月來、府下の各新聞紙は、其の消息を掲げたるを以て、爰に詳細を擧げずして、單に概略を擧ぐるに止むべし、移民の言條に依れば、東洋移民會社が契約せる墨西哥ボレオ銅山處在地は、移民應募心得には「夏季は寒暖計の最も高き時にても華氏九十五度位に過ぎず、冬季は平均七十度乃至七十二度」とあれ共、實地到着して之を見れば、華氏百二十五度の熱度にして、到底生住し得べからず、と言ふを以て第一の理由とし、次は銅山內の構造は

詰り私の見込では、人間としては決して這入られない、猫か、犬でも、丁寧にするならば入られない、併し十日でも三十日でも、這つて見ろと言ふならば、這つて見ぬでもないが。此の支柱の構造を仕直さなければいかぬ、到底斯ういふ支柱の處に入ることは出來ぬ（移民總代、山內平治の陳述）

といふの故を以て、歸國の理由に加へつゝあり、而して最も移民をして、墨西哥の地に嫌厭の情を催ふさしめたるは「瓦斯といふものか、何といふものか、ドーンと鳴つて來たが、一號室の者二人倒れた、音の種類は大砲の音のやう、、、、、一同が散々に叫ぶので、何だへ、と言つて、行つて見た、爾うして其處へ行つて煙草を吸はうとすると、まだ火のつけない中に、うわーつと叫び出した、矢張火の玉が出たといふのですが、私は見ませぬ、音はする、臭ひはする、併し私は見ない」と稱する怪異に襲はれたる一種の感情に動されて、附和、雷同、遂に東洋移民會社代理人小林氏をして

廿八日午前五時、小生は監督の力を藉り送還すべき移民十七名を集め之を阜頭に引連れ參り候處、、、、偶と後方を顧みたるに四百餘名の移民は一團と爲りて阜頭上に集り來らんとせしかば小生は之を見るや否や速かに阜頭を立ち去らしむる樣安田監督に命じたるも監督は小生との間の距離遠くして其言達せざりしかば小生は、、、大聲說きて曰く我國の名聲にも關するとなれば斯くの如き不穩の擧

動を愼み更に角靜聽にして我が說かんとする所を聽聞すべく然る上は吾は移民諸君の側よりの正當なる申出を聽き取る可し何れにしても吾が生きてあらん限りは斷じて歸國叶ひ難し若し強て歸國せんとせば先づ防禦なき余を殺すべし然れ共諸君は秋毫もホレオ會社の財物に損害を加ふるとなかれと述べ了るや終らざるに群集は罵つて曰く殺して仕舞へ、彼奴を殺せ、彼奴のがすな等の盲を叫びつゝ忽ち移民は小生の手を取り足を捕り阜頭の方へと曳きずり行き其間或は蹴る者あり棍棒と拳骨は驟雨の如く絕間なく小生の身体に注ぎ下り帽子は飛び衣裳は裂け破れ候、、、斯くて暴漢の手より免れたる時は全身の疲勞を感ずると甚敷ミショー氏及警官に助けられて辛うじて旅宿に歸着し得たるものに御座候(代理人小林直太郎報告)

の危難に就かしめ、斯くて出帆せんとする明保野丸を留めて歸國の途に就けるなり、船中、監督者安田愉逸氏の悶死せるが如きは、蓋し一場の悲劇にして、氏が嘗てニューカレドニヤ行の殖民、一千人を送りて、其の職を全うせるにも拘らず、今回初めて開かれたる墨西哥移民に進んで監督の任に當り、移民事業の上には燃ゆるが如き思想を懷いて、不幸、中途にして斃れたるは、移民事業に幾多の趣味と同情を有する吾人の深く氣の毒に堪へざる所、然かも同氏の悶死も、渠等移民の感情を和ぐるに由なく、歸來、却て幾多の紛擾を釀せるぞ是非なき。

以上、移民送還の顚末を概記せり、即ち移民は、鑛山附近の氣候酷熱にして、瘴氣人を襲ひ、坑内の設備不整頓にして、生命に危險ありと稱し、會社は在墨國代理人小林氏、及監督安田氏の報告を證として、其の事實を否定せんとす、曰く、此の移民は、今より十七年以前、墨國政府の紹介ありし者、今日に至る迄、遲延せるは賃銀の點に折合はさりしが故にして、昨年に至りて、漸やく調査の上に契約したる者なれは、人命危險の地に、移民を送るが如きことなしと 併し乍ら小林代理人は遠く墨國に在り、監督安田氏は死して在らざれは、双方共に所謂片言にして、充分の信を置き難きを如何せん、而して其の後の經過如何なりし乎、

野宿するとか、お寺に行くとか、何とかしなければ、迚も喰ふ譯に行かない、私の方では實に困つてをるのです、尙損害の事を仰らせれたが、それは成程貴下方の方では、何萬圓か何十萬圓かの損害はありましやうが、私共移民の苦勞艱難、生命に懸る場合は、如何いふ處置をつけてくださるのであらうか、、、、、尙是まで借用した金は返へさぬてもよいとか、どうとか、國に歸る旅費をやらうとか、どういふ處置があればよいか、唯是までゞ宜いと仰しやれば、私共

の身體は實に困つてなる

とは、同會社々長佐久間氏と移民總代と會見せる席上、各新聞記者の前に於て、移民總代が、其の希望を陳述せるものにして、然かも會社は、斷々然として『横濱に上陸すれは、其の後の世話は出來ない』と確答して、移民の希望を拒絶せり、今其の理由を聞けは

移民保護法第三條に、救助歸國の事が出て居ります、此の第三條の精神は如何いふものてある乎、辯護士等にも相談しました、所が此の救助といふものは、法律の精神から考へて見ると、即ち各國に於て困難に遭遇した時、其の外國に於ては習慣に通せず言語も通せず、稼ぐ仕事があつても、稼くとは出來ない、氣の毒てあるから、保證人の一たる會社が救助するといふ解釋、又救助の方法として、歸國といふのは、唯國へ歸せは、歸國の精神は達して居るか、船は横濱へ着けは、保證人たる移民會社が、救助手續は、盡したものてある乎、如何乎、第三條の此の手續は、法律家の間には、隨分むづかしい問題と爲つてをります、そこて兎に角も、外務省が監督官廳てあるから、之は外務省に意見を質すとが必要と思ひますから、取敢へず、外務省に參つて其の意見を問ひ合せました、併し外務省は監督官てはありまするが、立法者てはありませんから、果して外務省の言つた所が法律の精神と信ずるとは出來ませぬが、併し神戸は移民が始めて日本を離れた場所てある、それ故に神戸迄送還したならは保證人たる移民會社は、先づ完全に送還の義務を行つたものと見ても宜しい、然るに横濱から電話に接しました所によると、神戸まて連れて行くといふなれは、身を投じても、横濱へ上陸する、斯ふいふとてありますから、、、

讀者の中には、屢〻他の文を引用せるを以て、或は厭倦を來たせる者あるべし、然れども右に引用せるが如きは、是れ移民保護問題上の緊要事實に屬するを以て、強て之を摘要せるのみ、斯くて移民は其の情實を訴へ、會社は法理を說いて互に讓らざりしが、横濱に滯在せる福岡移民、和歌山移民は、該縣撰出の代議士、某々の二人中間に入り、福岡移民は先づ會社より門司着の船舶を得、横濱滯在の宿料は代議士の保證に依り、毎月月賦を以て還附するとし、昨月二十日を以て鄉里に歸り、和歌山移民も目下福岡移民と同樣の請求を會社に望みつゝありと言へは、其の終局を告ぐるも、恐くは近日に在らん歟。（以上記する所、東洋移民會社出版の移民總代會見顛末に依りしと雖も、尚記者自身が親しく會社役員及移民總代に會して聽ける所を參酌せる者多し、敢て特書す。）

三

我讀者諸君は、該墨西哥移民送還事件を如何に見つゝある乎、渠等移民は渠等に取りては少額ならざる若

干の資金を擲ち、父母と別れ、妻子と離れて、斷然意を決して遠征の途に上りたるに、目的地に到着するや、匇々、意を飜へし、其の目的を棄てゝ、本國に歸りたるは、抑ゝ渠等が揚言せるが如く、怪異の事ありしに依りて然る乎、或は其の主張するが如く、其の豫想に反して、百二十度以上の酷熱なりしに依る乎、吾人は移民の言ふ所を以て、悉く眞實なりと信ずる能はざると共に、又一概に渠等の言ふ所を拒否する能はず、幾分歟豫想よりも熱かりしならん、或は例令愚蒙なりしが爲めなりとは言へ、幾分歟渠等の眼前に怪異と覺ぼしき事もありしならん、又坑内の構造も、豫想よりも不完全なりしならん、雖然、斯くの如きは、程度に大小の差ありとは言へ、移民事業には多く有り勝の例にして、單に豫想に反せるの一事を以て、歸國せる者と爲す能はず、吾人は寧ろ他に理由を求めんことを欲す。

然かも親しく移民總代に會して聞ける所を以てするに、前揭の理由を外にしては、他に大なる理由はなきが如し、故に吾人は今後他に新事實の生せざる限りは先づ半ば移民の言ふ所に信を置くも、半ば移民の通有性なる附和雷同、輕擧妄動の罪に在りと斷ずるを以て穩當なりと信ず。

他に言ふ者あり、移民中北米合衆國を目的とせる者にして、其の陸續きなるを機として、墨西哥行の募集に應ぜる者も、二三に在らずと、或は然らん、今日の如く勞働者の北米渡航は全く禁ぜられある狀態に在りては、かゝる徒輩の加れるも、固より其の所、墨西哥に着して、合衆國に脫奔することの容易ならざるを知り、爰に歸國せんと思ひ立てる者も、或は多かるべし、或は又其の應募移民は、概ね農業勞働者たりしを以て、親しく鑛窟を見、其の勞働の激甚なるに驚き、爰に歸國を思ひ立てるも在るべし、若くは墨西哥到着の前、既に船中に於て監督者其他と感情の衝突せる者も在りしなる可し、以是吾人は世間に發表せられたる移民の言條をのみ信ずる能はず、故に吾人は、墨西哥移民の歸國せるは、其の責、幾分は移民自身に在りと爲す者也、否か。

四

讀者諸君、吾人を以て、一に移民をのみ責むる者と爲す勿れ、吾人は移民の輕擧を認むると共に、又東洋移民會社たる者も、率先して新移民地を撰べるに拘らず、移民募集其他の點に於て、充分の用意と覺悟とを缺けるは、之を認むるに躊躇せざるなり、試に吾人の見る所を擧げん乎。

●一、初めて移民を送るべき新天地に、一時に四百幾十人の多數を送れるが如きは、今日の結果を來せる第一の原因にあらざる乎、固より會社自身に於ては幾多の理窟あるべしと雖も、未だ何等の經驗なき地に、一時に四百幾十人の多數を送るが如きは、決して移民取扱の方法を得たる者にあらざるなり、明治元年、米人ベンリユ氏が、横濱商人木村某の手を經て、三年間の契約日限を以て、布哇に移民を送りし時の如きは、其の人數百五十名なりき、故佐久間貞一氏が濠洲移民を開ける時の如きも、最初は僅に百名内外なりしと記憶す、然るに佐久間氏の繼嗣たる現東洋移民會社長は、一時に五百人に近き多數の移民を未經驗の地に送りたるなり、今日の事ある、寧ろ當然の事なりと言ふべき歟。

●二は、東洋移民會社は、賃銀低くき移民を募集するに、移民のスレツカラシを以て名ある和歌山、廣島、福岡等を撰べるは、今日を致せる理由にはあらざる歟、鹿兒島縣を撰べるは可なり、宮崎縣も亦或は不可なしと雖も、和歌山、廣島等の如き土地を撰べるもの、東洋移民會社の失策也、彼の森岡商會が、初めて白露移民を開ける時の如きは、餘り移民を出たさゞる新潟縣に先づ眼を着けたり、然かも其の結果に於て、幾多の紛擾を醸せるは讀者の知る所ならん。

●三に數ふべきは、會社代理員に使役せらるゝ募集者の弊是なり、東洋移民會社は特に注意し、其の應募心得を配布する等の上に、十二分の注意を置けるの形跡あり、之を以て東洋移民會社を責むるは、頗る失當の嫌ありて、東洋移民會社を責むるは甚だ氣の毒の感ありと雖、兎に角墨西哥の地は、移民自身が本國に在りて豫想せると相違ありしは爭ふ可らざる事實なるを以て見

れば、其の責の幾分は、會社は之を負擔するの義務あり。

因に、募集者の弊は、一般移民取扱業者の弊竇にして、渠等募集者は、徒らに人數を集むるにのみ意を置き、勝手次第、出鱈目放題の言を吐きて、移民を募集しつゝあるを今日の實狀と爲す、東洋移民會社は、常に募集者を撰ぶに注意するを以て名あり、他の移民會社の如きは殆ど名狀す可らず。

以上、論ぜる所、吾人の想像を根據とせる者にして、確固たる事實を得たる者にあらず、然れ共移民事情に通ぜる者は、必らずや吾人の言に首肯せん。東洋移民會社(解釋上吉佐移民會社と同視す)は他の職々たる移民會社と趣を異にし、我國の移民會社中、創立最も舊く、信用最も厚き會社を以て知られつゝあり、吾人は布哇移民を扱ひ、其の預金其の他歸國旅費等を瞞着して、榮華を縦にせる會社にして、今日の事ある、敢て甚しく意を置かずと雖、移民事業には、幾多の功勞あり、歴史ある吉佐移民會社の同躰なる東洋移民會社にして、今日の如きとあるは、吾人の甚だ心外に堪へざる所、況んや之れ有りしが爲めに、折角勃興し初めたる移民事業に頓挫を與ふるの傾向あるに於てをや、又、布哇以外、濠洲以外、白露以外、新に天地を拓ける墨西哥移民を挫折するの憂慮あるに於てをや。

嗟呼、墨西哥移民送還事件の解決如何は、繋りて今後我國の國是たるべき移民政策の消長に影響あると甚だ大也。

五

啻に一移民會社のみ責むるを以て滿足すべからず、其の監督官廳たる外務當局者も、亦必然の結果として其の責を分つべき義務ありと謂ふべし、吾人は寧ろ移民會社を責むるよりも、寧ろ其の監督官廳を責むるを以て穩當なりと信ず。

我外務省は、露西亞と戰端を開くに、多少の勇氣を示せり、又通商貿易には、常に若干の注意と親切とあり、然れども移民政策に就ては、常に甚だ有耶無邪にして、時に甚だ干渉に過ぎ、時に甚だ冷淡にして、局外者をして、其の眞意を解するに苦ましむるは何ぞ。

墨西哥移民送還事件の如きは、甚だ其の眞相を捕捉

四

讀者諸君、吾人を以て、一に移民をのみ責むる者と爲す勿れ、吾人は移民の輕擧を認むると共に、又東洋移民會社たる者も、率先して新移民地を撰べるに拘らず、移民募集其他の點に於て、充分の用意と覺悟とを缺けるは、之を認むるに躊躇せざるなり、試に吾人の見る所を擧げん乎。

一、初めて移民を送るべき新天地に、一時に四百幾十人の多數を送れるが如きは、今日の結果を來せる第一の原因にあらざる乎、固より會社自身に於ては幾多の理窟あるべしと雖も、未だ何等の經驗なき地に、一時に四百幾十人の多數を送るが如きは、決して移民取扱の方法を得たる者にあらざるなり、明治元年、米人ベンリユ氏が、横濱商人木村某の手を經て、三年間の契約日限を以て、布哇に移民を送りし時の如きは、其の人數百五十名なりき、故佐久間貞一氏が濠洲移民を開ける時の如きも、最初は僅に百名內外なりしと記憶す、然るに佐久間氏の繼嗣たる現東洋移民會社長は、一時に五百人に近き多數の移民を未經驗の地に送りたるなり、今日の事ある、寧ろ當然の事なりと言ふべき歟。

二は、東洋移民會社は、賃銀低くき移民を募集するに、移民のスレッカラシを以て名ある和歌山、廣島、福岡等を撰べるは、今日を致せる理由にはあらざる歟、鹿兒島縣を撰べるは可なり、宮崎縣も亦或は不可なしと雖も、和歌山、廣島等の如き土地を撰べるもの、東洋移民會社の失策也、彼の森岡商會が、初めて白露移民を開ける時の如きは、餘り移民を出ださゞる新潟縣に先づ眼を着けたり、然かも其の結果に於て、幾多の紛擾を釀せるは讀者の知る所ならん。

三に數ふべきは、會社代理員に使役せらるゝ募集者の弊是なり、東洋移民會社は特に注意し、其の應募心得を配布する等の上に、十二分の注意を置けるの形跡あり、之を以て東洋移民會社を責むるは、頗る失當の嫌ありて、東洋移民會社を責むるは甚だ氣の毒の感ありと雖、兎に角墨西哥の地は、移民自身が本國に在りて豫想せると相違ありしは爭ふ可らざる事實なるを以て見

れば、其の責の幾分は、會社は之を負擔するの義務あり。

因に、募集者の弊は、一般移民取扱業者の弊實にして、渠等募集者は、徒らに人數を集むるにのみ意を置き、勝手次第、出鱈目放題の言を吐きて、移民を募集しつゝあるを今日の實狀と爲す、東洋移民會社は、常に募集者を撰ぶに注意するを以て名あり、他の移民會社の如きは殆ど名狀す可らず。

以上、論ぜる所、吾人の想像を根據とせる者にして、確固たる事實を得たる者にあらず、然れ共移民事情に通ぜる者は、必らずや吾人の言に首肯せん。東洋移民會社(解釋上吉佐移民會社と同視す)は他の瞶々たる移民會社と轡を異にし、我國の移民會社中、創立最も舊く、信用最も厚き會社を以て知られつゝあり、吾人は布哇移民を扱ひ、其の預金其の他歸國旅費等を瞞着して、榮華を縱にせる會社にして、今日の事ある、敢て甚しく意を置かずと雖、移民事業には、幾多の功勞あり、歴史ある吉佐移民會社の同躰なる東洋移民會社にして、今日の如きとあるは、吾人の甚だ心外に堪へざる所、況んや之れ有りしが爲めに、折角勃興し初めたる移民事業に頓挫を與ふるの傾向あるに於てをや、又、布哇以外、濠洲以外、白露以外、新に天地を拓ける墨西哥移民を挫折するの憂慮あるに於てをや。

嗟呼、墨西哥移民送還事件の解決如何は、繋りて今後我國の國是たるべき移民政策の消長に影響あると甚だ大也。

五

啻に一移民會社のみ責むるを以て滿足すべからず、其の監督官廳たる外務當局者も、亦必然の結果として其の責を分つべき義務ありと謂ふべし、吾人は寧ろ移民會社を責むるよりも、寧ろ其の監督官廳を責むるを以て穩當なりと信ず。

我外務省は、露西亞と戰端を開くに、多少の勇氣を示せり、又通商貿易には、常に若干の注意と親切とあり、然れども移民政策に就ては、常に甚だ有耶無邪にして、時に甚だ干渉に過ぎ、時に甚だ冷淡にして、局外者をして、其の眞意を解するに苦ましむるは何ぞ。

墨西哥移民送還事件の如きは、甚だ其の眞相を捕捉

四

讀者諸君、吾人を以て、一に移民をのみ責むる者と爲す勿れ、吾人は移民の輕擧を認むると共に、又東洋移民會社たる者も、率先して新移民地を撰べるに拘らず、移民募集其他の點に於て、充分の用意と覺悟とを缺けるは、之を認むるに躊躇せざるなり、試に吾人の見る所を擧げん乎。

●一、初めて移民を送るべき新天地に、一時に四百幾十人の多數を送れるが如きは、今日の結果を來せる第一の原因にあらざる乎、固より會社自身に於ては幾多の理窟あるべしと雖も、未だ何等の經驗なき地に、一時に四百幾十人の多數を送るが如きは、決して移民取扱の方法を得たる者にあらざるなり、明治元年、米人ベンリユ氏が、横濱商人木村某の手を經て、三年間の契約日限を以て、布哇に移民を送りし時の如きは、其の人數百五十名なりき、故佐久間貞一氏が濠洲移民を開ける時の如きも、最初は僅に百名内外なりしと記憶す、然るに佐久間氏の繼嗣たる現東洋移民會社長は、一時に五百人に近き多數の移民を未經驗の地に送りたるなり、今日の事ある、寧ろ當然の事なりと言ふべき歟。

●二は、東洋移民會社は、賃銀低くき移民を募集するに、移民のスレツカラシを以て名ある和歌山、廣島、福岡等を撰べるは、今日を致せる理由にはあらざる歟、鹿兒島縣を撰べるは可なり、宮崎縣も亦或は不可なしと雖も、和歌山、廣島等の如き土地を撰べるもの、東洋移民會社の失策也、彼の森岡商會が、初めて白露移民を開ける時の如きは、餘り移民を出さゞる新潟縣に先づ眼を着けたり、然かも其の結果に於て、幾多の紛擾を醸せるは讀者の知る所ならん。

●三に數ふべきは、會社代理員に使役せらるゝ募集者の弊是なり、東洋移民會社は特に注意し、其の應募心得を配布する等の上に、十二分の注意を置けるの形跡あり、之を以て東洋移民會社を責むるは、頗る失當の嫌ありて、東洋移民會社を責むるは甚だ氣の毒の感ありと雖、兎に角墨西哥の地は、移民自身が本國に在りて豫想せると相違ありしは爭ふ可らざる事實なるを以て見

れば、其の責の幾分は、會社は之を負擔するの義務あり。

因に、募集者の弊は、一般移民取扱業者の弊竇にして、渠等募集者は、徒らに人數を集むるにのみ意を置き、勝手次第、出鱈目放題の言を吐きて、移民を募集しつゝあるを今日の實狀と爲す、東洋移民會社は、常に募集者を撰ぶに注意するを以て名あり、他の移民會社の如きは殆ど名狀す可らず。

以上、論ぜる所、吾人の想像を根據とせる者にして、確固たる事實を得たる者にあらず、然れ共移民事情に通ぜる者は、必らずや吾人の言に首肯せん。東洋移民會社(解釋上吉佐移民會社と同視す)は他の贈々たる移民會社と轍を異にし、我國の移民會社中、創立最も舊く、信用最も厚き會社を以て知られつゝあり、吾人は布哇移民を扱ひ、其の預金其の他歸國旅費等を瞞着して、榮華を縦にせる會社にして、今日の事ある、敢て甚しく意を置かずと雖、移民事業には、幾多の功勞あり、歴史ある吉佐移民會社の同躰なる東洋移民會社にして、今日の如きとあるは、吾人の甚だ心外に堪へざる所、況んやこれ有りしが爲めに、折角勃興し初めたる移民事業に頓挫を與ふるの傾向あるに於てをや、又、布哇以外、濠洲以外、白露以外、新に天地を拓ける墨西哥移民を挫折するの憂慮あるに於てをや。

嗟呼、墨西哥移民送還事件の解決如何は、繋りて今後我國の國是たるべき移民政策の消長に影響あると甚だ大也。

五

啻に一移民會社のみ責むるを以て滿足すべからず、其の監督官廳たる外務當局者も、亦必然の結果として其の責を分つべき義務ありと謂ふべし、吾人は寧ろ移民會社を責むるよりも、寧ろ其の監督官廳を責むるを以て穩當なりと信ず。

我外務省は、露西亞と戰端を開くに、多少の勇氣を示せり、又通商貿易には、常に若干の注意と親切とあり、然れども移民政策に就ては、常に甚だ有耶無邪にして、時に甚だ干渉に過ぎ、時に甚だ冷淡にして、局外者をして、其の眞意を解するに苦ましむるは何ぞ。

墨西哥移民送還事件の如きは、甚だ其の眞相を捕捉

四

讀者諸君、吾人を以て、一に移民をのみ責むる者と爲す勿れ、吾人は移民の輕擧を認むると共に、又東洋移民會社たる者も、率先して新移民地を撰べるに拘らず、移民募集其他の點に於て、充分の用意と覺悟とを缺けるは、之を認むるに躊躇せざるなり、試に吾人の見る所を擧げん乎。

●一、初めて移民を送るべき新天地に、一時に四百幾十人の多數を送れるが如きは、今日の結果を來せる第一の原因にあらざる乎、固より會社自身に於ては幾多の理窟あるべしと雖も、未だ何等の經驗なき地に、一時に四百幾十人の多數を送るが如きは、決して移民取扱の方法を得たる者にあらざるなり、明治元年、米人ベンリユ氏が、横濱商人木村某の手を經て、三年間の契約日限を以て、布哇に移民を送りし時の如きは、其の人數百五十名なりき、故佐久間貞一氏が濠洲移民を開ける時の如きも、最初は僅に百名内外なりしと記憶す、然るに佐久間氏の繼嗣たる現東洋移民會社長は、一時に五百人に近き多數の移民を未經驗の地に送りたるなり、今日の事ある、寧ろ當然の事なりと言ふべき歟。

●二は、東洋移民會社は、賃銀低くき移民を募集するに、移民のスレッカラシを以て名ある和歌山、廣島、福岡等を撰べるは、今日を致せる理由にはあらざる歟、鹿兒島縣を撰べるは可なり、宮崎縣も亦或は不可なしと雖も、和歌山、廣島等の如き土地を撰べるもの、東洋移民會社の失策也、彼の森岡商會が、初めて白露移民を開ける時の如きは、餘り移民を出たさゝる新潟縣に先づ眼を着けたり、然かも其の結果に於て、幾多の紛擾を醸せるは讀者の知る所ならん。

●三に數ふべきは、會社代理員に使役せらるゝ募集者の弊是なり、東洋移民會社は特に注意し、其の應募心得を配布する等の上に、十二分の注意を置けるの形跡あり、之を以て東洋移民會社を責むるは、頗る失當の嫌ありて、東洋移民會社を責むるは甚だ氣の毒の感ありと雖、兎に角墨西哥の地は、移民自身が本國に在りて豫想せると相違ありしは爭ふ可らざる事實なるを以て見

れば、其の責の幾分は、會社は之を負擔するの義務あり。

因に、募集者の弊は、一般移民取扱業者の弊實にして、此等募集者は、徒らに人數を集むるにのみ意を置き、勝手次第、出鱈目放題の言を吐きて、移民を募集しつゝあるを今日の實狀と爲す、東洋移民會社は、常に募集者を撰ぶに注意するを以て名あり、他の移民會社の如きは殆ど名狀す可らず。

以上、論ぜる所、吾人の想像を根據とせる者にして、確固たる事實を得たる者にあらず、然れ共移民事情に通ぜる者は、必らずや吾人の言に首肯せん。東洋移民會社(解釋上吉佐移民會社と同視す)は他の聵々たる移民會社と趣を異にし、我國の移民會社中、創立最も舊く、信用最も厚き會社を以て知られつゝあり、吾人は布哇移民を扱ひ、其の預金其の他歸國旅費等を瞞着して、榮華を縱にせる會社にして、今日の事ある、敢て甚しく意を置かずと雖、移民事業には、幾多の功勞あり、歷史ある吉佐移民會社の同躰なる東洋移民會社にして、今日の如きとあるは、吾人の甚だ心外に堪へざる所、況んや之れ有りしが爲めに、折角勃興し初めたる移民事業に頓挫を與ふるの傾向あるに於てをや、又、布哇以外、濠洲以外、白露以外、新に天地を拓ける墨西哥移民を挫折するの憂慮あるに於てをや。

嗟呼、墨西哥移民送還事件の解決如何は、繋りて今後我國の國是たるべき移民政策の消長に影響あると甚だ大也。

五

啻に一移民會社のみ責むるを以て滿足すべからず、其の監督官廳たる外務當局者も、亦必然の結果として其の責を分つべき義務ありと謂ふべし、吾人は寧ろ移民會社を責むるよりも、寧ろ其の監督官廳を責むるを以て穩當なりと信ず。

我外務省は、露西亞と戰端を開くに、多少の勇氣を示せり、又通商貿易には、常に若干の注意と親切とあり、然れども移民政策に就ては、常に甚だ有耶無耶にして、時に甚だ干涉に過ぎ、時に甚だ冷淡にして、局外者をして、其の眞意を解するに苦ましむるは何ぞ。

墨西哥移民送還事件の如きは、甚だ其の眞相を捕捉

四

讀者諸君、吾人を以て、一に移民をのみ責むる者と爲す勿れ、吾人は移民の輕擧を認むると共に、又東洋移民會社たる者も、率先して新移民地を撰べるに拘らず、移民募集其他の點に於て、充分の用意と覺悟とを缺けるは、之を認むるに躊躇せざるなり、試に吾人の見る所を擧げん乎。

●一、初めて移民を送るべき新天地に、一時に四百幾十人の多數を送れるが如きは、今日の結果を來せる第一の原因にあらざる乎、固より會社自身に於ては幾多の理窟あるべしと雖も、未だ何等の經驗なき地に、一時に四百幾十人の多數を送るが如きは、決して移民取扱の方法を得たる者にあらざるなり、明治元年、米人ベンリユ氏が、横濱商人木村某の手を經て、三年間の契約日限を以て、布哇に移民を送りし時の如きは、其の人數百五十名なりき、故佐久間貞一氏が濠洲移民を開ける時の如きも、最初は僅に百名内外なりしと記憶す、然るに佐久間氏の繼嗣たる現東洋移民會社長は、一時に五百人に近き多數の移民を未經驗の地に送りたるなり、今日の事ある、寧ろ當然の事なりと言ふべき歟。

●二は、東洋移民會社は、賃銀低くき移民を募集するに、移民のスレツカラシを以て名ある和歌山、廣島、福岡等を撰べるは、今日を致せる理由にはあらざる歟、鹿兒島縣を撰べるは可なり、宮崎縣も亦或は不可なしと雖も、和歌山、廣島等の如き土地を撰べるもの、東洋移民會社の失策也、彼の森岡商會が、初めて白露移民を開ける時の如きは、餘り移民を出さゞる新潟縣に先づ眼を着けたり、然かも其の結果に於て、幾多の紛擾を醸せるは讀者の知る所ならん。

●三に數ふべきは、會社代理員に使役せらるゝ募集者の弊是なり、東洋移民會社は特に注意し、其の應募心得を配布する等の上に、十二分の注意を置けるの形跡あり、之を以て東洋移民會社を責むるは、頗る失當の嫌ありて、東洋移民會社を責むるは甚だ氣の毒の感ありと雖、兎に角墨西哥の地は、移民自身が本國に在りて豫想せると相違ありしは爭ふ可らざる事實なるを以て見

れば、其の責の幾分は、會社は之を負擔するの義務あり。

因に、募集者の弊は、一般移民取扱業者の弊實にして、渠等募集者は、徒らに人數を集むるにのみ意を置き、勝手次第、出鱈目放題の言を吐きて、移民を募集しつゝあるを今日の實狀と爲す、東洋移民會社は、常に募集者を撰ぶに注意するを以て名あり、他の移民會社の如きは殆ど名狀す可らず。

以上、論ぜる所、吾人の想像を根據とせる者にして、確固たる事實を得たる者にあらず、然れ共移民事情に通ぜる者は、必らずや吾人の言に首肯せん。東洋移民會社(解釋上吉佐移民會社と同視す)は他の贓々たる移民會社と鑿を異にし、我國の移民會社中、創立最も舊く、信用最も厚き會社を以て知られつゝあり、吾人は布哇移民を扱ひ、其の預金其の他歸國旅費等を瞞着して、榮華を縱にせる會社にして、今日の事ある、敢て甚しく意を置かずと雖、移民事業には、幾多の功勞あり、歷史ある吉佐移民會社の同軀なる東洋移民會社にして、今日の如きとあるは、吾人の甚だ心外に堪へざる所、況んや之れ有りしが爲めに、折角勃興し初めたる移民事業に頓挫を與ふるの傾向あるに於てをや、又、布哇以外、濠洲以外、白露以外、新に天地を拓ける墨西哥移民を挫折するの憂慮あるに於てをや。

嗟呼、墨西哥移民送還事件の解決如何は、繋りて今後我國の國是たるべき移民政策の消長に影響あること甚だ大也。

五

啻に一移民會社のみ責むるを以て滿足すべからず、其の監督官廳たる外務當局者も、亦必然の結果として其の責を分つべき義務ありと謂ふべし、吾人は寧ろ移民會社を責むるよりも、寧ろ其の監督官廳を責むるを以て穩當なりと信ず。

我外務省は、露西亞と戰端を開くに、多少の勇氣を示せり、又通商貿易には、常に若干の注意と親切とあり、然れども移民政策に就ては、常に甚だ有耶無耶にして、時に甚だ干渉に過ぎ、時に甚だ冷淡にして、局外者をして、其の眞意を解するに苦ましむるは何ぞ。

墨西哥移民送還事件の如きは、甚だ其の眞相を捕捉

し難し、然れ共、今日迄の事實を以てすれば、移民はボレオ銅山附近を以て、百二十度以上の酷熱なりと稱し、會社は最高溫度華氏九十五度なりと主唱するは、爭點の第一也、知らず、最初に之を許可せる外務當局者は、單に會社の言ふ所を信じて、之に許可を與へたる乎、墨西哥には公使館あり、領事館あり、移民地の實情を知るに、十分の機關備はる、外務當局者は、能く是等の機關を盡して、移民地の情況を徴せざりし乎、今日の事あるを以て見れば、吾人は甚だ外務當局の爲に慊焉たらざるを得ざるなり。

且つ我外務省は、移民取扱業者には、常に苛酷の干涉を加へつゝあり、而して其の移民保護法は、警察主義を取れるとの名あり、移民課長倉知氏曰く「我が移民法が何れの主義に依るの意なりしやは、明かに之を知るに由なしと雖も、明治二十七年今日の移民法の元祖たる移民保護規則が制定せらるゝに當り、時の大臣が、之が制定を必要とする理由を説明したるものに依るも、又明治二十九年現行の移民保護法を制定する時に述べられたる理由に依るも、又此の法律の執行官廳が、當初內務大臣と外務大臣たりし事實に依るも、將た又該法律の各條に就て之を見るも、我輩が前に述べたる所の警察主義たるものに相應することは、疑なき樣であります」（國際法雜誌第二卷第八號）と演述したりしを見て、之を知るべし、警察主義の當否は、爰に言ふの場合にあらざれば、言はず、然かも警察主義を其向に振翳せる我國の外務省の下に、今日の如き事實の發生せるは、吾人の怪訝に堪へざる所、外務當局者は、斷じて其の責を免るゝ能はざるなり。

六

今日駸々の勢を致せる獨逸帝國は、今より三十年前なる千八百八十年代迄は、一の殖民地だも有せざりき、然るに今や殖民地を有すること十三、其の面積百〇二萬七千百二十平方里、其人口千四百六十八萬七千人の多數に出づ、然るに我國を見るに、未だ一の殖民地をだも有せざるのみならず、僅に一時出稼人たる移民の如きも、僅に十二萬人に出でず、然かも我國は年々人口

五十萬宛を加へつゝあるなり、知らず、獨逸帝國は、何に依りて、然かく殖民の盛大を致せる乎。

千八百七十九年、フリドリッヒ、ファブリーといへる一文士あり、「獨逸國は殖民を必要とせざる乎」といへる一小冊子を發行して、殖民論を唱道せり、賛する者あり、誹る者あり、甚だ紛々を極めたりと雖も、遂にファブリーの此の小冊子は社會を動かし、之に依つて、政府は探檢費を出だして、海外各地を探檢し、各地方には殖民協會組織せられ、新聞紙も亦殖民地の報告を以て、其の一欄を埋むるに至れり、我國はファブリーを出だせる當年の獨逸帝國と恰も實情相同じ、否、我國民は既に自然の必要に迫られて、海外出稼の氣風全國に普し、此時に於て、墨西哥送還事件の如き不祥事を生ぜるは、移民問題の前途に妨害あると、尋常にあらず、敢て移民問題を提起して、江湖の注意を望むと爾り。

最も多くの殖民を有する國は、世界に於て最も大なる強國なり…………………レロイ、ボリユー

國民の堅忍自重

遼陽の戰捷は國民の大に歡喜慶賀すべき筈なるに却て一般に人氣銷沈せる如き觀ありしは何ぞや。

見ずや、彼の得利寺の戰役は我陸軍の精鋭無双、天下善く及ふなきを表彰せるもの、語を更へて曰へば我將校の戰略は歐洲將校に對して卓越せるを證明したるものなり、假令遼陽に於けるが如き決戰に非ずとするも、敵將をして心膽を寒からしめしは事實なり、而かも當時我國民は常陸、佐渡二船の沈沒の事ありし爲め意氣沮喪して得利寺の大勝を知らざるが如き狀態なりしに非ずや、想ふに得利寺の戰は九連城、南山に比して我陸軍の異彩を放ち我將士の十分に信頼すべき技倆を發揮したるに拘はらず、國民が其の戰捷を重要視せざりしは眞とに遺憾とす可きなり。

遼陽の戰捷は我國をして儼然勝者の地位に確立せしめたるは最も明白なる事實なり然るに尚我陸軍の技倆に疑惧の念を懷く如きは吾人の私に慨嘆に耐へざる處

なり、云ふ迄もなく帝國陸軍は我國民を以て組織したるものにして兵士國民本より別人に非ず、然るに國民にして兵士の强弱を疑懼するに至ては其の國民を以て組織せる兵士の失敗するは火を見るより瞭かなり、戰鬪に從事せば死傷其の他の損害あるは固より免る可からずして隨て損すれば隨て補充せざる可からず、而して此の補充を供給する者は國民にあらずや、既に疑懼の心を懷ける國民より徴募せる兵士に强勇を望むは無理なる注文なり、名將モルトケの如きをして之を統率せしむるとも復奈何ともす可からず、夫れ自から疑ひ自から懼るゝの兵にして、戰ひに勝てるもの古來未だ之れ有らず、蓋し疑懼の念は人をして怯懦ならしむれば也、論者復遼陽の戰は國民の豫期に背けりと說くあるも是亦大なる誤解なり、戰鬪に從事するものは將士なり、外征の將士をして後顧の念なからしむるは國民なり、實戰に望まざる國民が戰爭の事を豫期するは畢竟之れ空想のみ、彼我の兵力を識り、戰場の地理に通じ、而して後ち勝敗を豫期す可きも、是未だ外に出てず、內に美食安坐するもの惡んぞ戰爭の勝敗を豫期するを得んや。

想ふに遼陽の戰爭にして彼れ以上の結果を博せんとせば、尙平時の六個師團以上の兵力を增加するを要すべし、而して所謂兵力の增加は國民の財產と肉體に賴らざる可からず、平和無事の日に在て財產と肉體を惜しみ、一朝事有るに臨み十二分の効果を得んと欲す、例へば、多く蒔かずして多く收穫せんと欲するに等し、若し之を得るとある乃ち僥倖のみ、僥倖を得ざる爲に失望するは實に愚者の事なり、吾人は遼陽の戰勝に不滿を愬ふる國民の甚だ雅量に乏しきを悲まざるを得ず。

次に論道すべきは旅順包圍軍の事なり、旅順の戰況は吾人不幸にして其の詳細を語る能はずと雖も、是亦其の陷落の豫期に反せるより痛く國民の疑懼心を增發せしに相違なし、然れども若し國民にして我陸軍に信賴する十分ならしめば毫も疑懼するに及ばざる可き也、試に思へ、我包圍軍にして假令幾萬の死傷者を生

ずるとも、兵器彈藥を補充し得る如くに補充し得て綽々として餘裕あるに非ずや、翻て敵の狀態に想到せよ、朝に一兵を損し、夕に一將を失ひ、而して之を補充するの期なく、一發の彈丸、一片の肉亦然り、去れば終局は降伏の外に途なきに非ずや、何を苦んで此の間に疑惧を挾むの餘地あらんや、旅順の敵兵は猶陷穽に在る虎の若きか、急に殺さんとせば却て我を害す可し、寧ろ曠日彌久、之を餓死せしむるか、然らずんば器械を利用して殺戮するを要す、是を以て其の間多少の時日を要するは勿論の事とすべし。軍事當局者は或は今より數週前に陷落せしむ可き方畧なりしやも知る可からず、然れどもそは只一の希望に過ぎざりしなる可し、假令軍事當局者の豫想の如くならざりし共常識ある國民は悠々自重し徒らに苦悶懊惱すべけんや

　由來要塞戰は野戰の如く勝敗を一擧に決し得べき性質のものに非ず、若し當局者にして一擧之を抜く可しと豫期せしならんには實に誤算と謂ふの外なし、若し要塞にして然く容易く陷落す可きものならしめば、要塞の必要なるもの安に在る、假りに我陸軍の全力を以てするも短日月の間に攻落し得べからざるや必せり。

　千八百五十四年英佛聯合軍のセバストポール城砦を攻撃するや其の陷落に到る迄十一ヶ月の日數を費し八百門の大砲間斷なく城中に發射したりと謂ふに非ずや、當時露兵の死するもの二十五萬人の多きに達し、佛將マグホンの一隊マラコッフ高塔を占領せん爲に僅々三時間にして七千三百人の兵士を失へりと傳ふ、要塞戰の困難なる想像するに餘りあり、殊に旅順の如き狹隘の地に山岳の連亘せるありて大兵を動かすに不利なるに於てをや、況んや敵の守將ステッセルは當年のゴルチヤコッフに比して、遜色なき梟雄の死守せるをや、之を要するに要塞戰は根氣の戰ひなり、精根强きもの即ち勝つ、何すれぞ死傷の多きに沮喪し、敵壘の陷落せざるに憂惧するとを爲さんや、其の陸軍を疑ふ如きは不謹愼の甚しきもの也。

　我同盟國の陸軍を見ずや、頻りに戰て頻りに敗れ、列國をして其の陸軍の無能を譏笑せしむも國民は毫

も惑ふ處なく其の自信心と耐忍力とは終に南阿の成功を遂げしめたり、大國民の度量は宜しく斯の如くならざる可からず。

夫れ戰爭の前途は尙ほ遼遠なり、遼陽を經てウラルに至るの距離は甚だ長し、此の間幾多の大小戰を爲し以て最後の勝利を博せざる可からず、國民は非常の自信と堅忍を持すると同時に當局者亦軍機の許す限りは國民をして戰況を知らしめざる可からず、軍機保持上より得たる利益は、國民の疑惧心の爲に消滅せざる可けれは也。

蓋し今回の戰爭は東洋平和の高義より大元帥陛下と　陛下の統率し給ふ忠勇なる我國民が世界公道の爲め露國を膺懲するに在るを以て、國民は飽迄堅忍自重、最後の勝利を得て宣戰の大詔に奉答せざる可らず。(九月十五日稿)

建業唯期和聖東　戰功獨願奈波翁
半宵提劍望寒月　今古興亡兩眼中

南州

武士道に就いて

子爵　渡邊國武

日本武士道の話をせよとの事てあるが、武士道の事に就ては、近來博士やら學士やらが、呶々喋々底止する所を知らぬ有樣てあるから、今更笠上に笠を戴き、床下に床を設くるの必要を見ぬ。

しかし一言して置きたいのは、元來日本武士道の本體から云ふと、かくの如く呶々喋々と多辯するのは武士道の眞面目でない、日本武士道の眞面目は、訥於言敏於行を以て本意とするので、丁度歐羅巴の中世に行はれた「リッター」「シヴァルリー」即ち紳爵士、又は騎士といふものゝ氣象であるから、議論も何もない、一例を擧げて云ふと、前年日淸戰爭の結果として、支那では遼東半島を我帝國に割讓したのに、露國が之を以て韓國の獨立を危ふし、東洋の平和に害あるものとして、所謂三國干渉を提起して、之を還附せしめて置きながら、數年を出ずして、自ら之を占領したのみならず、其撤兵の時期を世界萬國に向つて大聲喝破して置きながら、又言を左右に託して永遠に之を占領しやうとする、此の如きことは日本武士道に於て、決し

で許す事の出來ぬといふのが日本武士道の眞面目である。

日本武士道といふものは、此の如く公然明白、簡易直截、少しも擬議分別に渉らず、少しも左支右吾するとを許さぬ處に妙處がある、ソレをイヤ日本武士道は「モーラル」の範圍内であるのないの、イヤ是が經濟法律の理屈に合つて居るの、合つて居らぬのといふのは、全く問題外て、決して日本武士道の眞面目をしらぬもののいふ事てある。

前にも申した如く、露國が信義を重んぜず、孤弱を侮り、利己的專横を縱まゝにする時に當て、國民一般に袂を振つて起ち、知慮あるものは其知慮を犧牲に供し、財產あるものは其財產を犧牲に供し、勇力あるものは其勇力を犧牲に供し、辨才あるものは辨才を犧牲に供して、無二無三に打つてかゝるのが、日本武士道の眞面目である、此一片雄偉特絕の氣力が有つてこそ、國も自主自立して國步を進步させる事が出來るといふ邊から見たならば、國家經濟の大策にも協つて居るのてあらう、個人の利害を忘れて公共の爲めに粉骨碎身する邊から見たならば、「モーラル」の大意にも協つて居るのてあらう、其結果としては經濟法律の理屈にも協つて居るのであらう。

併し日本武士道を論ずるのに、種々の題目を混合して呶々喋々するのは、其眞面目を曖昧模糊の問題に歸して仕舞ふといふものである、日本が世界無比に此の如く武士道の發達したは、蓋し歷史的の關係て、我帝國が開國已來、一日隻時も他國に服從した事もなく、一日隻時も他國に侵掠せられた事もなく、萬世一系の天子を奉じて居るといふ大自負心、大自慢心てあるから、之を哲學上に於て千古未確定の「モーラル」問題や、國家存立問題などゝ混合してはならぬ、いらぬ事ながら近來博士やら學士やらが、日本武士道の理屈的解釋に呶々喋々するのが、あまり傍觀の技痒に堪へぬ處から我々は些細の言論に渉らずして、只單純に日本武士道の眞面目を「ウブ」のまゝて千古萬古一日の如く維持發揮せねばならぬといふ事を一言してお尋ねにお答するのである

本誌は武士道に關する諸大家の高見を叩き聊か思想界に資せむことを期す
時局より見たる武士道　井上哲次郎氏
武士道と今後の教育　戸水寛人氏
は既載したり更に號を追うて諸大家の卓見を紹介せむとす

非戰論と是戰論

文學士　藤井健治郎

今日は所謂武裝の世の中であつて、政治でも經濟でも、又平常では戰爭などに緣の遠い處の文學でも美術でも、又學問でも、何でも武裝しなければ俗受けのしない世の中であるから、僕も其尻馬に乘つて戰爭の話をしやうといふのではない。僕は僕の信ずる所を告白するは、むしろ僕の倫理研究者としての責任と思ふから述ぶるのである。それで題は「非戰論と是戰論」としてをきましたが、それは戰爭を非認する論や、戰爭を是認する論が色々ある。是等を一々吟味批判して見たいといふのが僕の主旨であります。そして僕自身の見解は、その批判のうちに自ら明かに表れて居ることゝ信じます。

偖我が皇軍は、開戰以來海に於いても陸に於いても、所謂戰へば勝ち、攻むれば取りて、至る所彼敵軍を打ち破り、取り挫いて居るのは、實に快心の至りであつて、御互御同慶に堪へない次第であります。それと申すも一つは建國以來三千年、我が大和民族が鍛へに鍛へ、鍊りに鍊つたる精神力の偉大なる者があるが爲めて、一つは天道終に正義に與みする天祐に依るのでありませう。戰爭は此後とても是迄と同じことで、最後の勝利の月桂冠も、亦我が皇軍の頭上に落つることも、十に十、百に百、決して疑ひのないことで御坐います。之を思へば御互渾身の血液が湧き返るほど愉快で堪まりません。さて此戰爭――否今回の日露の戰爭と限らず、凡そ一般に戰爭といふ者につきまして、一方では色々の理窟を捏ねて、之を非認する者もあり、他方では又之を是認する者もある。其非難は果して非難になるか、其辯護は果して辯護になるか、之を明かにしやうといふが、僕の只今の目的であります。

先づ非戰論の議論から吟味して參りませう。

第一戰爭は甚だ殘酷悲慘なる出來事であるから、社會人類の幸福の爲めに之を廢めてしまうがよいといふ議論があります。成る程戰爭は殘酷で悲慘なる出來事である。彼の鴨綠江、九連城の戰を見よ。味方に一千の死傷あり、敵に三千の死傷がある。南山の役には我に四千、敵には其以上の死傷者を出し、得利寺の役も略々九連城の役と同じく、遼陽の戰に至りては何うであるか、實に我に一萬七千の死傷があつて、敵には二万五千の損害があると謂ふてはないか、敵味方双方合

算すれば唯陸軍のみで、是迄の所でも、殆んど六萬といふ程の實に驚くべき多數の血氣盛りの若者が或は死し或は傷いて居る。それで未だ決戰に至らない、戰爭の終る迄には今後又幾萬の人命が犧牲に供せらるゝ事であらうか、思へば慄然として膚に粟を生せざるを得ない。彼等の或者は老父母を有つて居るであらう。彼等の或者は妻子を有つて居るであらう。而かも彼等は敵も味方も互に國家の犧牲となつて居る、凡そ戰爭のあつた後、まだ掃除の出來ぬ新戰場の光景を見て、鼻をつまらさない人はありますまい。啻に戰鬪員が悲慘なる境遇に逢ふばかりでない。その戰場となつた地方の悲絕なる光景を見よ、財產は掠奪せられたり、婦女子は辱しめられたり、其他あらゆる慘禍を蒙つて居る。戰爭の此慘憺たる事實は僕も之を承認しないではない。併し、それであるから戰爭を廢してしまうが宜いと言つた處で、廢すこと出來ないを奈何せんである。況んや斯かる慘絕なる出來事は、必ずしも戰爭に限つた現象に非らざるをやである。

此の如き考は、多くは詩人などが戰場の慘憺たる光景を見て唱へ出した說であるけれども、僕は悲慘であるから戰爭を廢すがよいといふは、むしろ大膽で早計で、而して大體に通ぜぬ議論と思ふ。成る程劍戟の戰爭も悲慘であるが、所謂平時に於ける戰爭、即ち經濟の戰爭、智力の戰爭の結果も亦、甚だ悲慘なる者である。先づ經濟の戰爭を見よ、資本家と勞働者との關係、大資本家と小資本家との關係を見よ。或は小作條例、工場法、又はストライキ等で、勞働者は常にフェボラブルなる狀態を得やうと務めて居るけれども、泣く兒と、資本家とには勝たれぬ。彼等は常に資本家の爲めに壓服せられ、衞生上適當なる居宅に住し、適當なる食物を取り、適當なる衣服を着ることさへ出來ぬ。況んや慰藉、安息の樂などは殆んど望外のことである。實に哀はれなる狀態に屈服して居る者である。假りに數百步を讓りて、斯の如き狀態は、彼等一代のことならば、暫らく堪へ忍び得べしとするも、彼等の子、彼等の孫、彼等の曾孫玄孫にさへ、寧ろ加速度を以て此慘憺たる光景が傳はり行くとすれば、それは實に慘絕の極、又悽絕の極てはあるまいか。又大資本家が小資本家を壓倒して、愈々兼併の勢をなし、社會は暴富者と極貧者とより成つて、所謂健全なる中流社會といふ者がなくなつて、甚だ不調和な社會にならうとして居るてはないか。斯の如く見來れば經濟の戰爭も實に悲慘

な結果を人生に起して居る。黒い影を此の世に遺して居る。

若し夫れ智力の戰爭の結果に至つては一層甚しい。智力の足らない人種は、智力の優勝な人種から壓倒せられて、彼等自ら生活を維持することが出來ず、その種族は日に月に死滅に近づきつゝあるではないか。遠く例證を探ぐるに及ばず、近くアイヌ土人を見よ。彼等は始め此本土にも住して勢力を振て居つたが、後天孫民族の爲めに退けられて、終に北海の邊に窘まり、而かも最初は所々に漁場など持つて、如何にか生活して居つたが、それさへ終には內地人の爲めに奪はれ、今は土人を保護する法律を設けて、之を保護しやうとして居るけれども、それでさへ彼等は月々其種族の減少を示して居るではないか。是は何の爲めでせうか。外にも其理由はありませうけれども、重なる原因は、彼等アイヌ人の智力が、我等內地人のそれに如かない爲ではないか、即ち彼等アイヌは智力の戰爭に負けて、その爲めに悲慘なる狀態に陷ゐつた者である。其他今日、白人が世界の諸所に殖民して、其威を振つて土人を壓伏し、土人をして悲慘なる最後を遂げざるを得ざらしめて居るのは、畢竟智力戰爭の結果ではありませんか。

斯やうに經濟上の戰爭、智力上の戰爭の結果も、其悲慘なること、決して干戈劍戟の戰爭に讓らない、唯干戈の戰爭の結果は、一時激烈に來るから人の眼につき易い、經濟上の戰爭や、智力上の戰爭の結果は、長い間に徐々に來るから多く注意せられないまでゝある。それで近眼者流は戰爭は殘酷である、悲慘であると騷ぎ立てますけれども、むしろ無意義と思ふのである。干戈の戰爭は食傷の如く、腹が痛むやら頭が重いやら、吐くやら、瀉すやら、一時は大騷ぎである。併し甘汞かヒマス油の頓服でスグ癒ることがある。經濟智力のそれは肺病の如しである。何時發病したといふこともなく、何時ひどく苦んだといふこともなく、笑ひながら生命を取られてしまうのである。それであるから戰爭は殘酷悲慘であるから宜しくない、全く廢すべきであるといふならば、經濟、智力の戰爭もまた全く廢すべきであらう。而かも是れ果して出來得ることであらうか。

第二戰爭で事の正邪曲直を判定せんとするは、唯暴力で事の最終の決定を與へやうといふ野蠻時代の遺風である。此の如き蠻風は早速之を撲滅して、正義の制

度をして之に代らしめねばならぬといふ議論があります。是も一應は尤な議論である。然りながら此處に注意して分析を試みねばならぬことがある。それは戰爭て事の正邪曲直を決定るといふこと、即ち正義を定めるといふことに、二つの意味があるといふことである。一つは戰爭で正義を決定るといふのは、正義といふものを實力で創り出すといふ意味で、詳しくいへば、正義などゝいふ確然たる者が本來あるにあらずして、實力者の勝手の意志から生じたものである、即ち强者の權利といふ意味で、他の一つは、正義といふものは本來客觀的に存在するものであるが、併し之を擁護し確保するには、權力、若しくは實力が必ず之に添はねばならぬといふ意味である。第一の意味については僕別に見る所があるし、又只今の論旨とは違ふから、之を別の論點(第十二點)に於いて述べやうと思ふが、第二の意味に於いて、玆に論じて見やう。今日の處、正義制度の最も發達した者は、申すまでもなく、各文明國家内に於ける裁判制度でありませう。裁判所は今日の處、正義の擁護者、確保者として認められて居る。即ち斯く所謂平和の手段によつて正義は判定せられて居るのである。併猶一歩を進めて考へねばならぬ。裁判所が正義の擁護者としての役目を果すことの出來るのは、何の爲めであるか。そは裁判所が其背後に國家の絕對的權力を背負ふて居るからではないか。裁判所が正義を判決し、擁護すといふ者、詮ずる所國家の權力がなしつゝあるのである。されば所謂平和の手段で正義を決定めるとはいふものゝ、畢竟は矢張り實力が之を決定して居るのである。

それで此の一國家内の裁判制度に倣ふて、列國の間に仲裁々判制度やら何やらを拵へて、それによつて國際間の是非曲直を判定して、戰爭を廢してしまうといふ趣旨でありませうが、其事が假りに完全に行はれたと想像しても、さて其時に正義を擁護し、確保するのは何でありませう。列國の權力其者に外なりますまい。而かも今日の處、其仲裁々判制度の完全に行はるゝことか出來ませうか、又出來る望みがありませうか。

若し又世界統一國が出來て、世界中が一國家の下に統治せらるゝことが出來たと空想しても、其際正義を決定するのは、その唯一國家の權力でありませう。而かも此世界統一國家などいふものは空想に過ぎない。されば兎に角何處まで行つても、實力が正義を擁護し、確保する者であるといふことは變りない。而かも今日

すべての方面の爭を決定する仲裁々判所なく、又統一的國家なしとせば、單獨の國家が獨力その擁護の任に膺るのは、當然の道てあるのみならず、實にせざるを得ないのてある。

第三戰爭は非常なる不道德の所業を敢てせしめて、隨て社會の道德狀態を損傷することと甚大てある。故に之を廢すべきてあるといふ議論があります。成る程戰爭は社會の道德狀態に甚大なる損傷を及ほすてあらう、僕も之を承認しないてはない。虐殺、掠奪、強壓、陵辱、強悄、無慈悲、此等は確かに戰爭が社會に與ふる損傷てある。去りながら、所謂平和といふものは、果して不道德なる影響を社會に及ぼさぬのてあらうか。非戰論者の一考を煩したい。陰險、奸黠、猜忌、嫉妬、婬亂、懦弱、利己、臆病、小膽等は、多くは是れ平和の間に醞釀せらるゝ惡德てはないか。之を我が王朝時代の歷史に徵し、又希臘のペリクレース時代、羅馬の帝政時代の歷史に稽ふるも、歷々其證據を示すことが出來る。されば戰爭も無論不道德の害毒を社會に流す者てあるが、平和も亦不道德のバチルスを社會に撒き散らすものてある。唯戰爭の不道德の慘害は男性的で、平和のそれは女性的てあるといふ相違に過ぎないのてある。而して一般に男性的の慘害は慘は慘なりといへども、狂風一過、乍ちにして青天白日を見ることを得るも、女性的の慘害は、五月雨のふりみふらずみ連月に亘りて霽れやらず、陰鬱人身に可ならざるが如してある、一は嚴にして而かも淺、一は綏にして而かも深、嚴にして淺きは寧ろ忍ぶ可し、綏にして深きは眞に堪ふ可らざる者てある。

且つ夫れ戰爭は斯く不道德なる結果を社會に致すと同時に、猶人に敢爲の精神、剛健の氣象、共同の觀念を發揮、修養するの機會を與ふるのみならず、最も注目すべきことは、戰爭は、人には此個體の生死以上更らに偉大なる或者があるといふことを自覺せしむるの契機を具へて居ることてある。是れ戰爭が文明に貢獻する處の偉大なる貢物てある。生は人の欲する所、而かも之より甚しき者あり、死は人の惡む所、而かも之れより甚しき者あるを知らしむる者は、此戰爭に如く者がない。妻は夫を勵まして戰場に送り、老嫗孫を誡めて征服を着せしむ。而して彼等は決して高尚なる教育を受たといふものでない。平常に於いては隨分如何はしき擧動をやつて居る所謂中流以下の社會の者てさへ、イザ戰爭となればすべて此通りてある。彼等は此

瞬間に於いて、實に此眇たる個體の繋縛を脱却して、個體以上國家の大と冥合したのである。否實に國家の大と冥合したのみでない、實に人道の大義、天道の精髓に醇化したものである。無論此等のすべては、皆純潔なる動機を有つて居るともいへますまいが、多數は確かに然うである。兎に角戰爭といふ者の爲めに、彼等中流以下の人々は、得度せしめらるゝのである。是れこそ、俗僧の千部萬部の御經や、下らない說教よりも、遙かに人を靈化するの効驗がある。戰爭の個人の精神力に及ぼす影響は、何と偉大なる者ではありませんか。戰爭は此の如き力を有つて居りますによつて、大戰爭のあつた後には、文學、美術、科學といふが如き精神上の產物が燦然として表はれたといふことは、歷史上明かな事實であります。

第四戰爭は文明の破壞者である、秩序的進步の仇敵である。それ故戰爭を廢すがよいといふ議論があります。成程打ち見たる處戰爭は文明の進步發展を阻礙するが如くに見えます。併し是も一を知りて二を知らざるの議論である。戰爭は他の半面より見れば、文明の製造者で、又その傳播者である。それは凡て大なる國家は戰爭によりて生れ、戰爭によつて發達し、而して其獨特なる制度、法律、學問、藝術を發達せしめ、以て世界の文明に貢献するのである。是の意味で戰爭は文明の母である。又戰爭が文明の傳播者であるとは、史上に明らかである。英國今日の大はノルマン、コンクエストに本ついたとは或る史家の說いた所である。又歐洲の中原に住んで居つた獨逸民族は、羅馬征服の爲めに夙に文明の光に浴することを得、アレキサンダーの遠征は早くも東西文明の接觸の機會を與へたではないか。戰爭が文明の製造者であり、又傳播者であることは、昭として歷史の證する所である。而して國家が其獨特なる文明の爲めに戰爭するは、むしろ人道に對する義務であり、又權利である。今日の場合、國家といふ中間物を差し措いて直接に人道の爲めに盡くすといふのは甚だ尠い場合である。故に文明の破壞者云々といふ理由で戰爭を非認することは出來ぬ。

第五所謂平和の爲めには如何なる高價をも拂ふべきものである。自分の獨立も主權も皆滅却してしまふべきである。人爾の左の頰を批たば、之れに右の頰を向けよ。苟くも基督の行者たるべきものは、決して干戈の戰爭をなすべきでない、といつて戰爭を非認する議論もある。成る程原始基督教時代に於いては西洋人士

は僅かに斯様な感想を懐いて居つたのである。然るに近代文明は如何であるか。まるで之れと背馳して居るてはないか。若し單に平等の方面に拘泥して實際の差別の方面を見逃したらば、そは通ぜざるの議論となるのである。人には固より右の類をも批たすべき氣性も必要である、併し何時でも如何なる價を拂つてまでも然かせねばならぬとは通ぜぬ議論である。そは畢竟死滅の道である。

第六今日の社會に戰爭のあるは、今日の人間の不完全で今日の社會の不圓滿なるによるものである。併し理想の社會に於いては戰爭などは毫もあるべきものでない。戰爭の社會は是れ極致の社會である、故に今日に於いては可成戰爭を避けて、出來るだけ早く無戰爭の理想的社會を現ぜねばならぬ。それが今日の國家の職責である。それ故若し他國が自國を侵略することありても、之に降參屈服して可成それに抵抗せざるを可とす、さすれば一日も早く理想的社會を實施することが出來る譯であると謂ふて飽迄無戰爭の社會を理想として、一日も早く地上に之を實現したいといふ議論もあります。

併し之も通ぜぬ議論である。じたい理想的社會は無戰爭の社會であると申されますけれど、それが甚だ疑はしいことではありませんか。凡そ物は刺激を得抵抗を得て始めて活動するものである。活動あつて始めて進歩發達がある。進歩發達あつて存在の價値始めて之れ有りてある。人生の價値は死々滅々にありませうか、將た生々活動にあるてあらうか。そは殆んど言はずして明かである。さて生々活動は抵抗なしに出來るものでない、活動といふことは畢竟抵抗を破つて己の力を表はすといふ點にあるのである。地球が太陽の周圍を廻轉して晝夜交代し、寒暑相往來して活動を表はすのも、太陽は地球の飛び去らうとするのを引き留め、地球は太陽の引き留めやうとするのに抵抗して飛び去らうとする處から生ずる結果である。撥條の彈力は之を一方に曲げることとの大小によりて定まり、動物の衝動は內面的要求の阻礙によりて發し、人間の活動は品性の或る壓迫より來たる緊張に起るのである。凡そ動かなくして反動ないのは物理上の既に確められたる大眞理である。されば人間の意識的活動に於いても同じことて、外部の壓迫、外部の抵抗が大なれば大なる程其反抗の力も亦大なる者である。而して茲に大なる進歩あり、大なる發展がある。されば飽食暖衣の徒能く大

事をなさず、貧苦艱難に處し、蟠根錯節に逢つた人が敢て偉大なる事業を成遂ぐるといふのは必しも天禀の性質の異なれるばかりでなく、飽食暖衣の徒は抵抗が少いによつて、自己の力を表現する機會に乏しい。之に反して貧苦艱難の人は之を現はすの機會の多いにもよるのである。果して然らば吾人の理想的社會は決して無戰爭無抵抗の世界にあらずして、矢張り戰爭の社會ではあるまいか。否尠くとも現代の性情を有する吾人々類は、無抵抗無戰爭の社會を以て、理想極致の社會とするといふ想像が及ばぬのである。無戰爭の社會を豫想する人は、恰も『空氣の抵抗を厭ひて空氣なき處に翔翔したいと思ふて、而も却て飛躍する事出來なくなつた鳩』の眞似をしやうと試みるものである。彼のヲセラス一篇の書物は能く此消息を漏したものである。それ故に無戰爭の社會を豫想して一日も早く其の社會を實現せんが爲めに、爲すべき戰爭をも爲さず、言ふべき抗議も言はずして屈服するといふ、所謂永久平和論者の議論も成立たぬ。(未完)

前號桑木嚴翼氏の「時局に於ける宗教家の任務」は「戰爭と宗教家」といへる原題なりしを記者の誤記せしものなり謹んで仝氏に謝す

資本勞力調和論 會社の利益分配

松井柏軒

[一]余は資本勞力を調和するため、總ての營業より生ずる利益をば、成るべく多く其の營業の局に當りて精神又は身體を勞役するものに分配せんことを主張す

明白にいへば、會社の株主は。唯だ資本を出せる者のみ、之を外にして其の營業の繁榮を幇助し斡旋するが如きことは、間接にも直接にもあること無し。即ち其の營業の繁榮して多くの利益を生ずるは、主として其の會社の役員。事務員。雇員等の力に由る。故に其利益の大部分を擧げて此等の役員。事務員。雇員に分與するの至當にして。而して唯だ資本を供給せる外。何等の功勞なく、會社に取ては一個の晏座悠樂する遊民に過ぎざる株主なるものに對して多くの利益を配當するの理由なきや明白也

[二]資本主にのみ利益の大部分を分配して。役員。事務員。雇員等には唯だ一定の俸給と多少の賞與金を與ふるは。餘りに資本を重んずるに過ぎて人力を輕視する也。語を強くしていへば。拜金主義に偏して人類の貴く、人力の重んずべき所以を知らざるもの也。人生の

事業が。最も多く人の材能と勞働とに由て繁榮するの理を知らざるもの也。此の結果は材能あり勞力ありて能く勤勉する多數人を卑みて遊惰放逸なる少數者を貴び。輕浮華奢なる富人のみを世上に跋扈せしめて。社會を不健全ならしむるに至る

〔三〕遊惰放逸なる少數の資本主のみに利益を獨占せしめ。材能あり勞力ありて勤勉し活動する多數人を貧からしめば。此の多數者は啻だに資本主に對して憤懣するに止まらず。社會組織にも不平を抱きて。竟に暴力を以て資本主を壓倒し。社會組織の改革を企つるに至ると。猶ほ四十年前に在て多くの人士が德川幕府を顚覆したるが如くなるべし。而して資本家壓倒。社會改革に至るまで。資本者と勞力者との間に多くの衝突を重ね。陰謀に次ぐに陰謀を以てし。社會をして陰險。殘忍。殺伐ならしめ。又人生をして平和。安全。怡樂ならしむると能はざるべし。多くの不平。嫉妬。不道德。竊盜。放火。詐欺。墮胎。姦婬等の罪惡の殊に貧者に多きを知るものは。人生を救濟して平和。安慰。和樂ならしむるの道。唯だ貧者を減ずるに在り。貧者を減ずるは勞力の報酬を增加し。人類の貴くして人力の重んずべき所以を明白ならしむるの外なきを悟るべし。人生の第一問題はパンの問題也。衣食足て而して後に禮節を知る。宗教。道德。文學。美術の諸問題はパンに次ぐ。是れ議論に非ずして事實也。然り。奈何ともす可らざる事實也。故に古の教祖は先づ道路を開き。池溝を穿ち。水田を拓き。桑棉を植ゆるとを教へて而して後に教化せり。今日の宗教家の如き先づ此の資本勞力調和の問題に重きを置くを要す。勞力の報酬增加して。人類の貴く人力の重んずべき所以明白なるに至らば。人始めて進んで精神の安慰を求めんとを要求すべし。宗教に入るの門は實に玆に開かる。

〔四〕余の資本勞力論は。必らずしも多く資本主を苦むるものに非ず。資本主が過度に利益を占有するを非として。勞力者の報酬の太だ低きに過ぐるを救はんとするのみ。斯くて資本主は相當の利益を得るに甘んじ。勞力者も亦適度の報酬を得て生活するに安んじ。各々其の分を樂みて人生を平和ならしめんとするのみ。而して今の資本主が過度に利益を占有するは事實也

〔五〕余は資本主が會社の株主として得べき利益は。多く普通の預金利子より超過す可らずと爲すもの也。株主が其の會社前途の安危を氣支ひ。多少冒險的に出資する場合と雖も普通の預金利子より多くも一分乃至

二分を超ゆ可らず。最も冒險的なる會社事業と雖も。余は此の主義に由て。下に日本銀行と東京電車鐵道。東京市街鐵道兩會社の最近の損益計算に於て。如何に資本勢力の關係の不調和なるかを指摘すべし。特に此の三者を擇びたるは。日本銀行が中央銀行として多く國家の保護を受け。極めて安全の地位に在り。兩電車會社は又市の繁華なる道路を獨占して收益倍々增加の目的あつて。其の事業極めて安固なるが故なり株主の利益は一割五分を下る可らずと爲すもの也。

〔六〕日本銀行明治三十七年上半季損益勘定表

一總益金	五、〇二九、九二〇圓六一五厘
內譯	
利息	一、六九七、一三〇圓八五〇厘
公債證書利息	一、三五七、五三九圓九五〇厘
手數料	七三九、〇三一圓〇一五厘
爲換打步	一四、九〇九圓七五〇厘
割引步合	七〇八、七〇二圓六六〇厘
公債證書賣買益金	七、四五四圓四六〇厘
地金銀賣買益	七三、九六〇圓二三〇厘
雜益	一九 二七四圓四九八厘
給料(戻入)	一五圓八八〇厘
旅費(戻入)	二一圓六二〇厘
營繕費(戻入)	三圓五〇〇厘
營業費(戻入)	一、四四五圓七四〇厘
前半季繰越金	四一〇、四三〇圓四六二厘
一損失金	二、四二四、〇一三圓七〇三厘
內譯	
利息	四六六圓二六〇厘
手數料	五厘
割引步合	一二〇、一七九圓一四〇厘
公債證書賣買損	二一圓九六〇厘
公債代價償却	二三、八九四圓五六〇厘
雜損	一四九、六一五圓九六六厘
諸稅	五七〇、一九一圓九〇六厘
給料	一五六、八五六圓七二〇厘
旅費	四〇、四四四圓三二〇厘
營繕費	四、〇四二圓九五一厘
營業費	一、三五八、二九九圓九一五厘

右差引純益金二百六十萬五千九百六圓九十一錢二厘の分配法は下の如し

定例割賦金(年六分)	九〇〇、〇〇〇圓〇〇〇厘
定例積立金	二五〇、〇〇〇圓〇〇〇厘
賞與金並交際費	一二九、〇〇〇圓〇〇〇厘
再割賦金(年六分)	九〇〇、〇〇〇圓〇〇〇厘
後半季繰込高	四二六、九〇六圓九一二厘

即ち株主の配當一割二分なり。若し之を五分として。他は銀行經營者に分配せば。其の金額百五萬圓にして。

給料十五萬六千八百五十六圓餘の幾んど七倍なり。即ち銀行の役員以下雇員等は現在の俸給を幾んど七倍したる分配を受くべし。若し株主配當を六分とせば。經營者の受くるもの九十萬圓にして。現在の俸給の五倍半に當るべし。

〔七〕東京電車鐵道株式會社明治三十七年上半季收支計算表

一收入金	七二八、〇二九圓七一二厘
一支出金	四〇一、一八二圓四四四厘
差引純益金	三二六、八四七圓二六八厘
內	
準備金	一六、三四二圓三七〇厘
別途積立金	六、六九七圓五〇〇厘
配當金(年七歩)	一五〇、九三七圓五〇〇厘
計	一七三、九七七圓三七〇厘
右差引	一五二、八六九圓八九八厘
內	
公納金	二〇、八八三圓七五〇厘
賞與金	二五、〇〇〇圓〇〇〇厘
準備金複利積立金	一八、二八二圓二一〇厘
外に前季繰越金	六六一圓〇〇三厘
計	八九、三六四圓九四一厘
內	
再配當金(年四歩)	八六、二五〇圓〇〇〇厘
後季繰越金	三、一一四圓九四一厘

右支出金の內。會社經營者の受くる俸給及び報酬は一萬七千九十七圓二十一錢。諸雇員給料は三千百三十九圓十五錢五厘。手當は千八百四圓に過ぎず。而して株主の受くる所は二十三萬七千百八十七圓五十錢にして。實に一割一分なり。故に株主にして五分の配當を受くるとせば十萬七千八百十二圓五十錢を得て。殘り十二萬九千三百七十五圓を役員。運轉手。車掌以下に配當して其の所得の幾んど六倍を受けしめ得べく。又株主六分の配當を受くるとせば。十萬七千八百十二圓餘を役員。運轉手。車掌等に配當して。現在所得の五倍近くを受けしめ得べし。夫れ車掌。運轉手の如き勞働者をして。俸給の外更に五倍乃至六倍の收入あらしめば。彼等始めて能く生活に窮せざるを得べき也

〔八〕東京市街鐵道株式會社明治三十七年上半季利益處分表

一利益金	一六七、六六六圓四二一厘
內	
準備積立金	八、三八三圓三二〇厘
別途積立金	八、三八三圓三二〇厘
第一配當金(年七分)	一〇五、〇〇〇圓〇〇〇厘
差引殘金	四五、八九九圓七八一厘

内	
東京市納付金	一五、二九九圓九二〇厘
役員以下賞與金	一六、七六六圓〇〇〇厘
差引殘金	一三、八三三圓八六一厘
外に前季繰越金	三、二五二圓〇一九厘
計	一七、〇八五圓八〇〇厘
内	
第二配當金(年一分)	一五、〇〇〇圓〇〇〇厘
後季繰越金	二、〇八五圓八八〇厘

此の會社の總收入は二十七萬四百六十二圓九十六錢。支出十萬二千七百九十六圓五十三錢九厘にして。支出の內。職員以下に支給する分は下の如し

職員給	一、二八三圓八八二厘
雇員給	一、三二三圓八六六厘
運轉手車掌給	九、四四五圓二一〇厘
雇夫給	四、八九五圓四三六厘
諸給	七三四圓八九六厘
計	一七、六八三圓二九〇厘

然るに株主の受くる所は年八分十二萬圓也。若し五分即ち七萬五千圓を受くるとせば。職員以下車掌運轉手等の受くる分配は四萬五千圓にして現所得の二倍餘に當り。株主若し六分の配當に甘んずとするも。車掌運轉手の受くべき配當尙ほ三萬圓にして。現在所得の二倍に近し。此の會社營業以來日淺く。上半季に在て車輛の運轉亦極めて少かりしに拘らず。職員以下運轉手車掌等尙ほ三萬圓の分配を得ば。彼等亦鼓腹して太平を謳歌すべきや必せり。況んや將來の利益分配更に甚だ多からんとするをや

〔九〕株式會社は比較的に利益の多からざるもの也。然るも其の利益分配を公平にせば。勞力者即ち其の事業經營者は。尙ほ現在の所得の少くも二三倍を得るや明か也。更に合名會社又は一個人の事業にして利益多きものに在ては。例へば三井の如き。三菱の如き。古河氏の銅山の如きに在ては。勞力者の所得尙ほ多からん。余は多くの利益を占有する富豪及び單に株主たる人にして晏座悠遊する資本主等に告ぐ。公等人類としての冥利を思はゞ。宜しく其の利を其の事業の經營に當りて功績ある多くの勞力者に分配せよ。而して又利益の內より勞力者の生命保險。負傷手當。死亡吊料。恩給及び遺族扶助等の方法を設けよ。唯だ自個の懷裡に入り來るべき利益の多きとのみを圖り。此の利益を以て單に麗室に住み。佳食に飽き。美服を飾り。婦人を汚辱するとをのみ念とせば。禍は遠からずして到るべし。公等を怒るものは何ぞ啻だ『材能あり强健にして勤勉するも常に貧なる多數の勞力者』のみならんや。

神も憤り佛も嗔らん。神人倶に怒りて誰か全きを得るものぞ。

新艦建造意見

有川貞介

緒言

日露開戰の結果として我國は正に世界第一流の强國たるを表明し得たり、是れ實に我陸海軍の精鋭にして忠勇なるに因らずんばあらず、而も今後海上の一帝國として世界列强の間に介在し、其一等國たるの威權を保持せんとせば、更に之を優勢なる海軍力に俟たざる可らず。

渺茫たる大海に堂々の陣を張りて戰ふの海軍にありては、天險を利用し奇策を施し、以つて寡よく衆を制するの陸軍に於けるよりも、數字の關係は一層重大ならざるを得ず、蓋し二月八日の海戰の如く、水雷艇の夜襲によりて絕大の成功を獲たるの例尠しとせざるも、之を近くは八月十日の大海戰の如く、彼我の艨艟舳艫相銜んで堂々の對戰をなせるに比し、其功果の大小輕重素より論ず可らざるものあり、徒らに水雷の奇功をのみ貴びて數の觀念を忘却するは、決して大局の勝利を占むる所以にあらず。

今や帝國は多大の償金を得べき運命に向へり、而して海軍を膨張すべき必要は國力の發展に伴うて迫り來れり、吾人が造艦計畫を云々するもの甚しく早計ならざるを信ず、吾人は彼の英國が數世紀の星霜を費し、數千萬の富貴を傾け、比類なき熱心によりて今日の大海軍を得るに至り、優に列强を凌駕して之に覇たるの觀あるを見る毎に、洵に羨望の念に堪へざるものあり、例令艦の數に於て直に英國を凌ぐが如きは望み得べからずとするも、少くとも其艦隊を精鋭ならしめ、歐洲に國せる列强が蘇士の運河を越えて遠く東海に浮べ得べき海軍に對し、其二强の聯合以上に抜んずる艦隊を作るは、決して至難の業にあらざるべきを信ず、彼等の孰れにありても自國の防備を空しくして、遙に其全艦隊を東洋に送る能はざれば也。

此の如き擴張をなさんには、先づ十年間三十萬噸の增加を以つて滿足せざる可らず、凡そ一年三萬噸を增加することは常に列國の唱ふる處なりと雖も、之れを實行せるものは唯一英國あるに過ぎず、造船上の遷延

國庫上の困難、將た海員補充の缺陷等は、到底之れ以上の增加を許さゞれば也。

三十萬噸の擴張は三億の費用を要すべし、此點に於ては我財政の當局者が其困難を說く處ならん、こは我國の發展が多方面に向つて甚しく急進するが爲め、財力の進步が之に並行し能はざるによる、而も十年にして三億を投ずるの擴張案は償金の換用及び增稅其他の法を以つてするも、之を斷行するに差支へざるべし、只最も困難を感ずべきは其海員補充、就中將校の養成ならん、これ宜しく米國の例に鑑みるべき也。

かくて吾人は私見として玆に新艦計畫を論ぜんとす、識者の一笑を買ふを得ば望外の幸なり。

其一　主戰艦隊

重戰艦―快戰艦―裝甲巡洋艦

一　重戰艦

こは戰闘艦（バツトルシツプ）中最大最重なるものを意味するものにして吾人は便利上之を重戰艦と稱せんとす、或種の論者は今回の戰役に於ける水雷驅逐艇の奇功を見、且は初瀨ペトロパウロスク轟沈の結果、積極的消極的に戰艦の必要を否認し、寧ろ多數の驅逐艇を建造するに如かずと說く、然れども水雷の功力は如何に偉大なるにもせよ、其奏功すべき範圍は實に僅少の場合に過ぎず、白晝遠く太洋に出でゝは水雷は殆んど其功力を有せざるもの也、二月八日の役の奏功は實に我將士の勇邁なる奮戰によると雖も、敵司令官の失計に乘じたるものにして軍艦其物の實にあらず、敵海軍を殲滅せしめんには是非とも戰闘艦以上の武器を要す、論者又說をなして、敵の艦隊を己が領海に近けて然る後水雷艇を以つて攻擊すべしといふ、而も吾人は己が領海を敵の蹂躙に委するの甚だ不利なるを知る、加之此等は寧ろ國防艦の任務たるのみ、敵の主力を殲滅せんには優勢なる主戰艦隊を以つてせざる可らざるは論なし。

今世界に於ける主戰艦型は我新艦を除きて左の三種とす。

（イ）	英	エドワード七世式	一六、三五〇噸
（ロ）	米	コンネクチカット式	一六、五〇〇噸
（ハ）	露	インペラトール、パウエル一世式	一六、六三〇噸

これが攻擊力の比較は

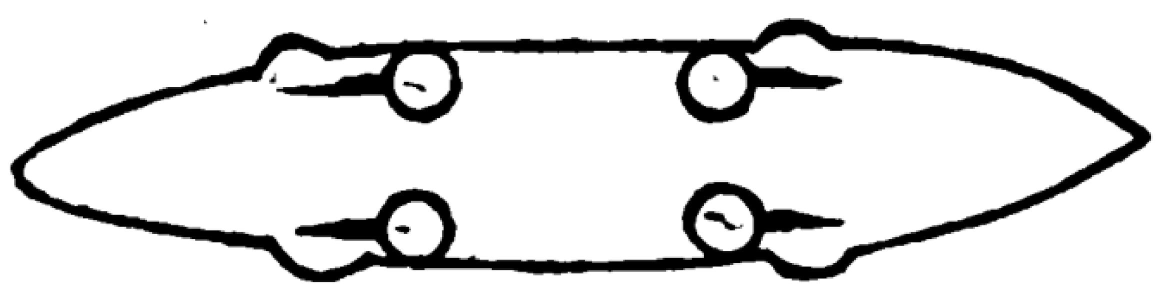
	主砲	次主砲	副砲
（イ）	四門十二吋	四門九、二吋	一〇門六吋
（ロ）	仝	八門八吋	一二門七吋

（ハ）　四門一一、八吋　——　一二門七、九吋

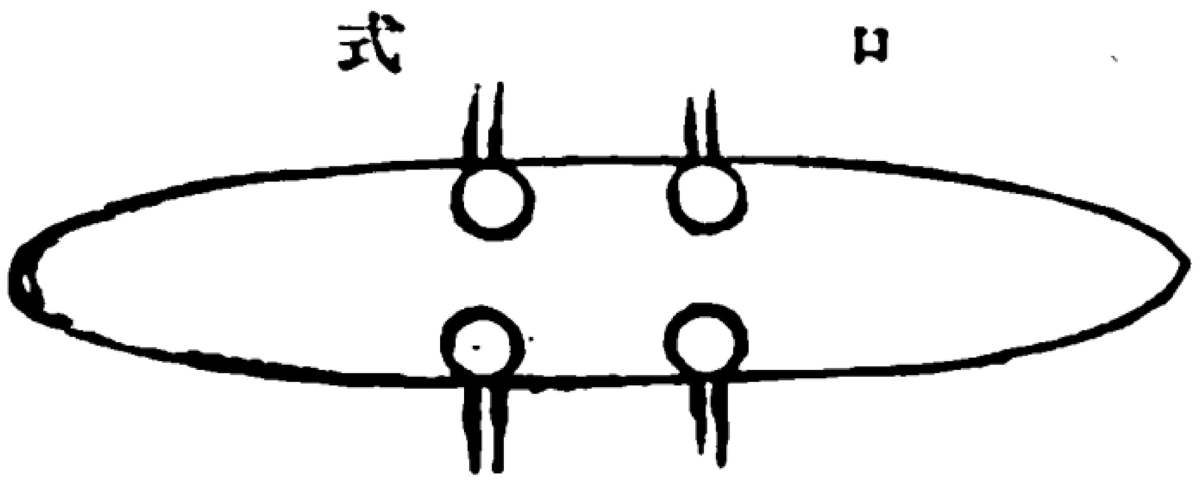
にして（イ）型に於ける次主砲に九、二吋を用ゐたるは英の新艦計畫其宜しきを得たる點なるべし、然れども副砲の六吋に就いては少しく其功力を疑ふものなり、凡そ六吋砲は三千ヤードの距離に於て六吋以上の甲鐵を貫く能はざるに對し七、五吋の砲力はよく同距離にある八吋の裝甲を破るを得、而して六吋速射砲の威力に對する恐怖は遂に世界に於ける裝甲艦の副防禦をして能く之を防ぎ得べき程度の厚さの鐵板を用ひしめたるが故に今や此等の艦型に對する六吋砲の功力は甚だ薄弱となれり、而して七、五吋砲は其使用に際し六吋砲の人力に依て左右し得べきに反し到底機械力を藉らざれば如何とも仕難き不便あり、一朝敵彈飛び來つて此機械を破壞し去らば、其砲火を繼續するには多大の人員を補充せざる可らず、此理由の下に七、五吋砲を非難する者あれどこは一に防禦裝甲の如何によるものにして旣に裝甲を破壞されたるものとせば、たとへ六吋たるも亦沈默に近き運命に遭遇すべし、加之六吋砲は其發射度數に於ては七、五吋砲に對し著しく勝ると雖も敵の裝甲に對して無効なりとすれば敵の戰艦をして致命傷を負はしむるを得ず、最近の戰役此例に乏しからず、故に吾人は此艦の六吋砲が少くとも七、五吋たらざりしを惜む。

（ロ）は次主砲に八吋を用ひ副砲に七吋を用ふ、後者は實に我意を得たるものなれども、圖に示せるが如く八門の八吋を兩舷側の中央部に於て二門づゝ並裝せるは（イ）式の九吋砲單裝の配置に劣れり、何となればロ式の裝置は發射度數イ式に劣ると甚しきを以て也、況んや八吋砲と九吋砲とは其破壞力に於て至大の等差ありて、九吋の砲火はよく敵の主防禦裝甲を貫くの力を有するをや。

イ式



ロ式



（ハ）の副砲として七、九を採用せるは其の當を得たり、而も次主砲を有せざるが故に重戰艦に對せば四門の一一、八吋砲のみを以て戰はざるべからず、これ此式の缺點なり。

次に各の防禦力を比較せば

	帶甲	甲板	上帶	主砲	副砲
（イ）	九吋	二—一吋	八吋	十二吋—六吋	五吋

(ロ)	一一二分ノ一吋	三—二分ノ一吋	八吋	一〇吋	七吋	四門十二吋	四門十吋	一〇門七、五吋	一八、五
(ハ)	—	—	—	—	—				

(ハ)式は吾人未だ知るを得ざるが故に之を措いて他の(イ)(ロ)に就いて見るに、其間大差なしと雖も(ロ)式に於ける舷側装甲の中部に於て一一二分ノ一吋を用ひしは寧ろ過重の嫌あり。

然らば吾人が重戰艦として完全なりとするものは如何、曰く(イ)式に基きて其攻撃力に於て四門の九、二吋に代ふるに四門の十吋を以つてし、十門の六吋に代ふるに十門の七、五吋を以てし、排水量は(イ)式と同一にては不可なれば其上一千噸を増大することを要す、而して装甲にありても(イ)式に從ひ、唯主砲装甲に於て其二吋を減じて防禦甲板を上層一吋、下層平面を二吋斜面を三吋に改むべきか、又速力航續力又は載炭量等にありても少くとも(イ)式のそれに匹儔せるものならでは將來重戰艦として優勢の地位を占むる能はざるべし、今之を表を以て示せば、

排水量	防禦力				攻撃力			
	帶甲	甲板	主砲	副砲	主砲	次主砲	副砲	速力
一七、〇〇〇噸	九—八吋	三—一吋	十—六吋	五吋				

二、快戰艦

所謂一等装甲巡洋艦(アーマードクルーザー)の最も優勢なるものを快戰艦と稱せんと欲す、何となれば、今日此艦型の目的は巡洋(クルーザー)艦本來の性質たる自國商船の保護及敵國船舶の捕獲撃沈をはなれて重に戰艦と戰ふにあれば也、近時列强競つて之が建設に務め米國の如きは主戰艦以上の資を投ずるに至れり。

今此種の艦型を世界に求むるに次の五種の型を得、

(イ)	英	ドレーク	一四、一〇〇噸
(ロ)	佛	エルネス、レナン	一三、三四七噸
(ハ)	米	ワシントン	一四、五〇〇噸
(ニ)	英	デユーク、チブ、エヂンバラー	一三、五〇〇噸
(ホ)	英	スイフトスユーア	一一、八〇〇噸
(ヘ)	伊	ローマ	一二、四二五噸

中に就き最顯著なる新型を最後の三艦とす、其各防禦力は次の如くにして

	防禦力			
	帶甲	甲板	主砲	副砲
(イ)	六—二吋	三—二吋	六—五吋	五吋
(ロ)	四吋	二吋	四吋	四吋
(ハ)	六—三吋	四—一、二分ノ一吋	九吋	五吋

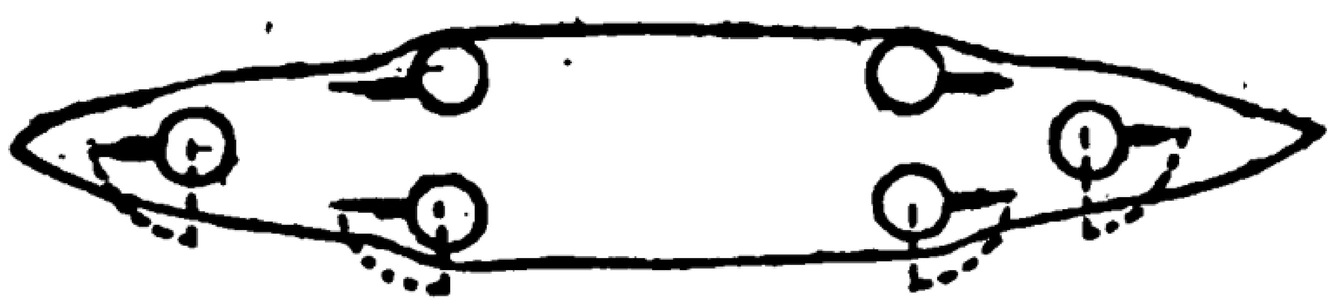
（ニ）	六吋	三—二吋	六吋	六吋
（ホ）	六—七吋	三吋	十吋	八吋
（ヘ）	九、四分ノ三—四吋	二吋	八吋	六吋

攻撃力及び速力は左の如し

	攻撃力 砲		速力
（イ）	二門九、二吋	一六門六吋	二三
（ロ）	四門七、六吋	一二門六、四吋	二三
（ハ）	四門一〇吋	一六門六吋	｜｜
（ニ）	六門九、二吋	一〇門六吋	二一、三三
（ホ）	四門一〇吋	十四門七、五吋	二一
（ヘ）	二門十二吋	一二門八吋	二二

後の三艦につき少しく比較論究せんに

ニ式



ホ式



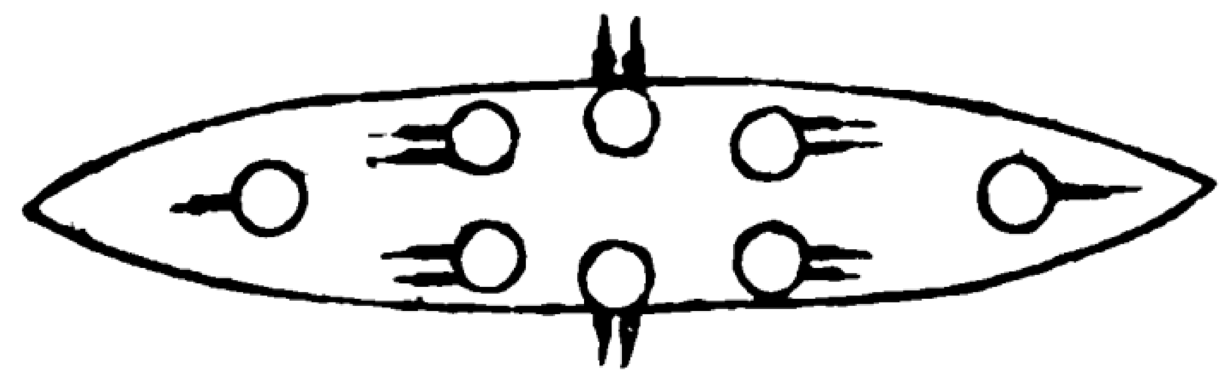
（ニ）式が主砲六門ノ九、二吋の同時に發射すべき最多數は四門なり、何となれば他の二門は他の舷側（ブロードサイド）にあればなり。

　之に反し（ホ）式にありては主砲十吋は四門共に發射し得べし、從つて其効力に於ては六門と四門との差異なし、然れども發射度數は單装と複装とは大なる相違あると同時に九、二吋と十吋とは穿甲力に於ても徑庭あり、故に兩者の功力は相平均すべし、而して戰時沈默せざるべからざる二門の九、二吋に對し相當の排水量を割きたるは全く噸數の浪費たるを免れず。

　次に副砲を見るに（ホ）は一四門の七、五吋（ニ）は十門の六吋を用ふ、されば前者の後者に勝れるは言を俟たず、此に注意すべきは（ホ）式は元戰鬪艦として建造されたるものなり、然るに此型に於けるトライアンフ號の如きは試運轉の結果、僅々一四、〇〇〇馬力を以てよく速力二〇浬以上を六時間持續し得たりき、之れ實に異數なり、吾人が快戰艦の名稱の下に之を取扱ふ故なきにあらず。

　（ヘ）も（ホ）と等しく戰鬪艦として建造されたるものなれども其二十二浬の快速力は正しく吾人の快戰艦と稱するに適す、加之其防禦に於ても砲戰艦としては到底薄弱に過ぐれば也、唯其二門の十二吋砲を有するは戰艦として適當なる點にして從つて穿甲力も甚大なるべきも發射度に於ては（ホ）式の四門の十吋砲に比して遙かに遜色あり、砲塔外に出たる十二吋の砲身が敵彈の命中によりて折られたる例あるを見ても吾人は此に

寧ろ一對として裝置せられたる四門の十吋砲をとるべし、殊に近時にありては假令戰艦と雖も其裝甲は常に



甚しく重厚なるものを用ゐざるが故に十吋たりとも運用宜しきを得ば戰艦の防禦を破ることを得ん、而して此型に於ける副砲は一二門の八吋砲にして、圖の如く舷側に裝置せられたり、こは伊太利造船家が一家の見識の下になれるものなれども、此裝置は既に說ける如く甚だ利益ならず、凡て前後の砲塔に於ては砲の複裝が單裝に優れるに反し、舷側にありては却つて反對なり、故に(ヘ)式の速力は(ホ)式に優ること二哩なるも戰鬪力が果して後者に比して優勝なるか否かは斷言する能はざる處なり。

かく論じ來れば吾人は最完全に近き快戰艦型としては、(ホ)を擇ばざる可らず、然れども若し快戰艦を新造せんと欲せば(ホ)型の基礎の上に更に二、五〇〇噸の排水量を增加して馬力を增大にし、能ふべくんば二十三哩の快速力を有せしめんこと是也、(イ)型の如きは二三哩の速力を有し、世界に於ける快戰艦中最大速力と稱せらる、普通は二二哩若しくは二二、五哩を出てず、故に精銳なる艦型の速力としては二三哩を以て滿足せざる可らず、次に其防禦力に於ては、(ホ)を以て適度となすべし、然れども若し二、五〇〇噸の增大が水線上に於ける裝甲を八吋たらしむるを得且つ舷側にある各七、五吋砲の間に於て二、五—二吋の隔壁を有するを得ば一層完全なるものとならん、而して攻擊力に於ても(ホ)の七、五吋を用ゐ他の總ての點は之を(ホ)式に傚へば可ならん、かくてなれる新艦型の噸數武力等を表示せば左の如し。

排水量	防禦力				攻擊力		速力
	帶甲	甲板	主砲	副砲	主砲	副砲	
一四、五〇〇噸	八—五吋	三—一、三分ノ一吋	十—九吋	八—六吋	四門一〇吋	一四門七、五吋	二三

此建造費は頗る高價なるものにして寧ろ重戰艦を造るに如かざるが如き觀あるも、列强の海軍が既に此程度の艦を有する以上は、其快速力に對して重戰艦の攻擊力防禦力も亦如何ともするなきなり、加之當時二万噸內外にして然も二十三哩を駛走する大商船の大洋に浮ぶもの既に數隻あり、此種の艦型の必要は今後益々多からん也。

(未完)

戰爭と思想家の責務

宮田脩

怪將ナポレオンの軍、長驅普魯西の地に入り、首都伯林の街衢彼れが喇叭手のけたゝましき聲に擾さるゝや、慷慨悲憤起つて祖國の社稷を挽回せんとせしもの、啻に戰爭に狂せる淺膚の常民のみにあらざりし也。哲學者を以て起ちしもの、其處にフヒテあり。詩人を以つて號びしもの、其處にケルネル、アルントあり。言々血あり涙ある熱烈至誠の文字を以て述べられし"Reden au die deutsche Nation"の一書は、當時路傍に立つて、獨乙國民の敵愾心を皷吹せるフヒテが愛國的情念を窺ふべく、句々血湧き肉戰く底の義憤激越なる聲調を以て詠はれし"Was ist des dentchen Vaterland"等の軍歌は、當時筆を呵して、祖國士民の大義心を誘發せるアルント、ケルネル等が愛國的情操を想ふべきにあらずや。

チヤンプレインが政略は暫く問はず。南阿に軍起つて、クルーゲルの兵愈強く英軍の死傷其算に當らざるや、さなきだに愛國の念に富める「アングロサキソン」民族は、懸軍萬里祖國の名譽の爲に死地に入るを辭せざりしもの、啻に軍人政治家のみにあらざりし也。就中小說家コナン、ドイル一流の文士の如き、帝國主義の權化を以て任じ、頻りにトランスヴールを舞臺とせる作物を出し、以て國民の注意を彼に集めしめき。

由來戰爭は、其原因に於て、其結果に於て、將たまた其當時に於て、凡てもと擾亂を性となすもの、此間に介在する士人が意こゝに牽かれて、狂熱馳走我が組みする者の爲に、其冷性を失ふはまた怪むに足らざる也。此點に於て獨乙國民たるフヒテが號び、アルント、ケルネルが起ち、英國民たるコサンドイルが奮ひ、はたまた現時我國に於ける幾多の詩人文客が一に戰爭の爲に其思想を傾注する、寧ろ當然の擧作とこそ見るべけれ。否な我が屬ずる國家の名譽を蹂躙せられ、我が親愛する友人を屠らるゝに當つて、誰か切齒腕を扼するもの莫らんや。武人は劍に倚つて立ち、文士は筆を呵して號ぶ、擧國一致の態度は、當に國步艱難の場合に處する國民の義務たる也。言ふを休めよ、戰爭の爲に國家主義を皷吹する學者は、時流に阿ねる曲學の徒にして、戰爭の爲に帝國主義を謳歌する作家は、奇利

を博せんとする際物師なりと。人誰か我が家の梁を破られて而もなほ平然たり得るものぞ。此時に際して國民の士氣を皷舞すべく各所に長廣告を振ふもよく、征者の意氣を振起せしむべく軍歌に熱血を灑ぐも可なり。但し學者文士も亦其國に生まれ其國に成長し其國に衣食する以上は、等しく是れ其國家と利害消長を同ふすれば也。

されどフヒテの行爲を以て、直ちに國家多事の時に際する哲學者の任務と速斷する勿れ。またアルント、ケルネル、コナンドイル一流の所作を以て、直ちに軍國の時代に會せる詩人文士の職責と誤る勿れ。苟も哲學を稽へ、詩歌を作し 人の思想界を開拓誘致せんとする者の任務は、しかく表面的渦流にのみ附屬するものならむや。由來世間尋常の徒は、無事平穩の時期に處してこそ其知識は以て自己を支配し、自己を指導すべけれ、若し一旦風起ち波湧き天變地妖交々至つて周圍晦塞するの時に會はんか、昨日の智者は今日の昧者と化し、今日の勇者は明日の怯者に移り、或は失望しまたは驚愕し、遂に徒らなる悲痛を覺えて其禍亂を逸脱する能はざるもの比々皆然り、此時に際して、事物の律法を示し、命運の解脫を說き、無意味なる歡喜を擲たしむると共に無用の悲哀を轉じ、以て一道の慰安を與ふべきものなかるべからず。此天職を帶ぶるものを誰とかなす。實に是れ思想家其人の任務にあらずして何ぞや。如上思想家の任務にして若し現象界以上に超越し、禍亂の間に蠢動する常人の先覺者となり、彼等の謬見を正し、彼等の錯想を矯め、以て向上醍醐の乳味を主張宣傳するにありとせば、彼等の所屬は僅に一國家の狹域にのみにあらざるべし。蓋し尋人によりて組織されし國家は、時に其の組織者が尋人たるに於て、動もすれば國家自身の行動も或は尋人の行動のそれの如く、完全無缺とは云ふべからざるあればなり。吾人は信ず、思想家の天地は廣濶にして其事業は無限なるを。從つて彼等の眼界は宇宙覆載の間にありて、倭少狹斜の上に止まらず、其意念は一時の興廢に動かずして、永劫の確立に存すべきを。

吾人はフヒテが献身的に愛國の情念を致せるを喜ぶ。されど彼が伯林の巷に立つて、大呼祖國の國粹を演說せるの行爲や、元と獨乙血族の所爲にして、必しも哲學者當然の行爲とは認め難きなり。吾人はアルント、ケルネルが義俠的に大義を唱道せるを歎ぶ。されど彼等が殘せる詩篇は、たゞ獨逸文學史を飾るべき花

たり得るも、未だ以て世界的文學の壇上を彩るべき產物にあらざるを知る。之に反し吾人は露國の爲にトルストイが常に反國家的の言論を敢てなすを悲む。而も彼が徒らに時世に媚びず、人類の平和の爲に、人道の勝利の爲に、あらゆる迫害と窘蹙とに堪え、終始一貫して覺醒の語を吐露するに憚らざるは、吾人却つて其功の偉なるを多とせざるべからず。蓋し彼れが如きは眞に其の天職を良解し得たるものと謂ふべければ也。また吾人は古代希臘の爲にソクラチースが國家の命令に反抗し、飽くまで其所論を曲げざりしを傷む。されど二なき眞理を闡明して、不朽の道を教へんとする哲學者の意氣としては、吾人大に其最後の壯美たるを鑽仰せざる能はず。蓋し彼が如きは眞に其天職を完行し得たるものと云ふべければ也。

詩人若し爰に昏昧錯誤の間に彷徨せんか。哲學者は立つて彼等の前に光明の地を拓かざるべからず。詩人若しこゝに煩惱苦悶の裏に沈吟せんか、詩人は詠つて彼等の前に解脫の地を開かざるべからず。而して世間多くは迷誤に陷り易く、克く欝憂に投じ易し。思想家たるもの丶任も亦重き哉。殊に人擾鬧の間に在らんか、一喜一憂克く其感情を紊し、一慮一考克く其思想を狂はし、十年築き來りし道義の念も一日是を毀し易く、十年培ひ來りし文華の蕋も一朝是を凋め易し、思へば擾亂の最たる戰爭の餘響ほど人の世に禍するものぞなき。思へ武事を事とせし羅馬の土壤に文明の花たる美術は榮えざりしを。啻に美術のみと云はんや、文學に哲學になべて其國民の生命に不朽の光を與ふべき思想界の產物として何等稱すべきの遺物ありや否や。彼等は武强を以て一代に榮えたりき。而も憐むべし其武强は其の挽歌と共に葬られ了しき。而して亡びたる後、果して何物か殘れる。羅馬衰亡の歷史は、只僅に彼等が暗き胎内に宿りて暗き墳墓に運ばれし經過を傳ふる而已。世間徒らに戰爭を謳歌し、戰爭に阿諛する者請ふ少しく鑑みて可也。

由來戰爭と文化、所詮同一軌路の上に在り得べくもあらず。砲煙揚つて人馬傷き、掠奪强姦慘害の極を盡す底の現象は、人をして慘忍に慣れしむるか、哀傷に耽らしむるものありと雖も、未だ以て向上至醇の生活を思はしむべくもなし。勝つ者は倨傲暴君たり易く、敗くる者は懦怯奴隷たり易し。此時に當つて盤渦更に旋風を輪する事あらんか、吾人が欣求する文化は何處に向つて求むべきぞ。思ふにフヒテが獨逸民族をして

專制ナポレオンの凌辱に對し、建國同盟の精神を鼓吹せる亦有益なりと雖も、トルストイが露廷權臣の野心暴擧に反對し、自由正義の精神を唱導する亦無益にあらざるべし、果して然らば我が思想家の任は、常に冷靜深慮以て人生當面の活路を闡明するにあるや必せりと雖も、殊に如上人の恒心を奪ふべきの際、更に一段の用意と盡力とを要すべき也。

然り而して今や我國の將卒は、陸に海に到處に勝報を齎さゞるはなく、懸軍萬里異境の地に在つて野に寐ね山に伏し、あらゆる苦心と艱難とを嘗めたるの結果、二千五百有餘年の歷史を存續せる島帝國の國運をして、更に長へに榮えしめ、多年侮辱を以て目せし彼等凶悍野心の怪物をして後に撞着たらしめつゝあるあり。また今に於て豫め期し難しと雖も、戰後の樽俎折衝亦是等の苦心を徒勞に逸せしむるが如き、昔日の恨事を還すなきに似たるあり。且つさなきだに勝誇れる國民の意氣は、殆んど個々の產を蕩盡するも猶ほ軍費の供給を否まず、個々の本務を忘却するも猶ほ祝捷の行列に出づるを拒まざるものあるが如きを思へば、最早是時に會して建國同盟の精神を鼓舞せるフヒテ、アルントの盡力を要せざるにあらずや。蓋し敎へざるも横町の走卒、一片の號外を手にして參々伍々路傍に大義を演說し、說かざる山奥の頑童も紙製の旭旗を飜して隊伍堂々到處に萬歲を狂呼する者多ければ也。

今に於て之を見る。我國民の戰爭熱は殆んど、其の極點に達し、動もすれば自覺力を失ふものあるに似たり。此時に際して我が思想家たる者、診斷克く誤まらず、以て下熱劑を施すなくんば、國民將來の危機或は不息の災なきを保せんや。若し夫れ我が愛國の精神に富める思想家たる者、帝國將來の完全なる發展を冀はゞ、啻に物質的の榮えを期待して精神的の光を忘了するなくんば幸甚。任他今や其勝報によつて熱せる帝國の裏面には、抑も如何なる問題が起らんとはするか。否な現在如何なる傾向は生じつゝあるか。其恐るべき問題は、豫め是を未然に防ぐべく、其の迎へべき傾向は、大に是を善導すべき者、但し我が思想家の刻下に於ける任務ならずや。更に極言す。人生の眞意義に對し、若し錯つて背く者あらば、時好と雖も之れを排除し、國論と雖も之を矯正する、即ち是れ思想家が思想家として大なる祖國を愛するの大なる道に非ずや。吾人今究に幾多の問題と諸種の傾向あるを認む。而も今はたゞ如上の所感を述ぶるに止め、更に三思を經て、他

日重ねて其の所見を公にせんと欲す。斯文敢て珍ならずと雖も、吾人の衷情を披攊し得たりとせば足れり矣。

以上は余が曩に六、七月の頃、某會席上に於て演說せる草稿の一片を加減し、本誌記者の需に應じて投稿せるもの也、

非禮

尊敬に過ぐるは敬せざるよりも可也、然れども人の意志に反する行爲は、如何にそれが禮にかなへりとも、そは却つて其人[redacted]に禮あるものに非ず

頃日の事なり、嚮て江田島の兵學校に御在學の某宮殿下が、暑中休暇より御歸校の時、特に一等列車に御混乘あり、而して沿道御送迎に及はずとの御內諭あり、然るに御乘列車の京都に著するや、各縣人會の會員、知名の紳士官吏は夥しく列を作りてプラットホームに並び、之れが左右翼には警部巡査が非常を警衞し、凡そ三等の列車は之が爲めに途を絕たれ、昇降客は憚りて近づくを得ず、實子の如きは遂に此中に入るを許されざりき、而して殿下はこれが爲め御心苦しく思召されしやう見受け奉りたり

吾人は皇國の民として皇室の尊崇すべきを知る、尊崇すべしと雖も、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し、度を過ぐるは既に誤也、其意に背くは非禮也、如上は其一に過ぎざるも、如此事例は甚だ乏しからず。（血生）

海外新潮

海外大勢

日本の野心と支那問題

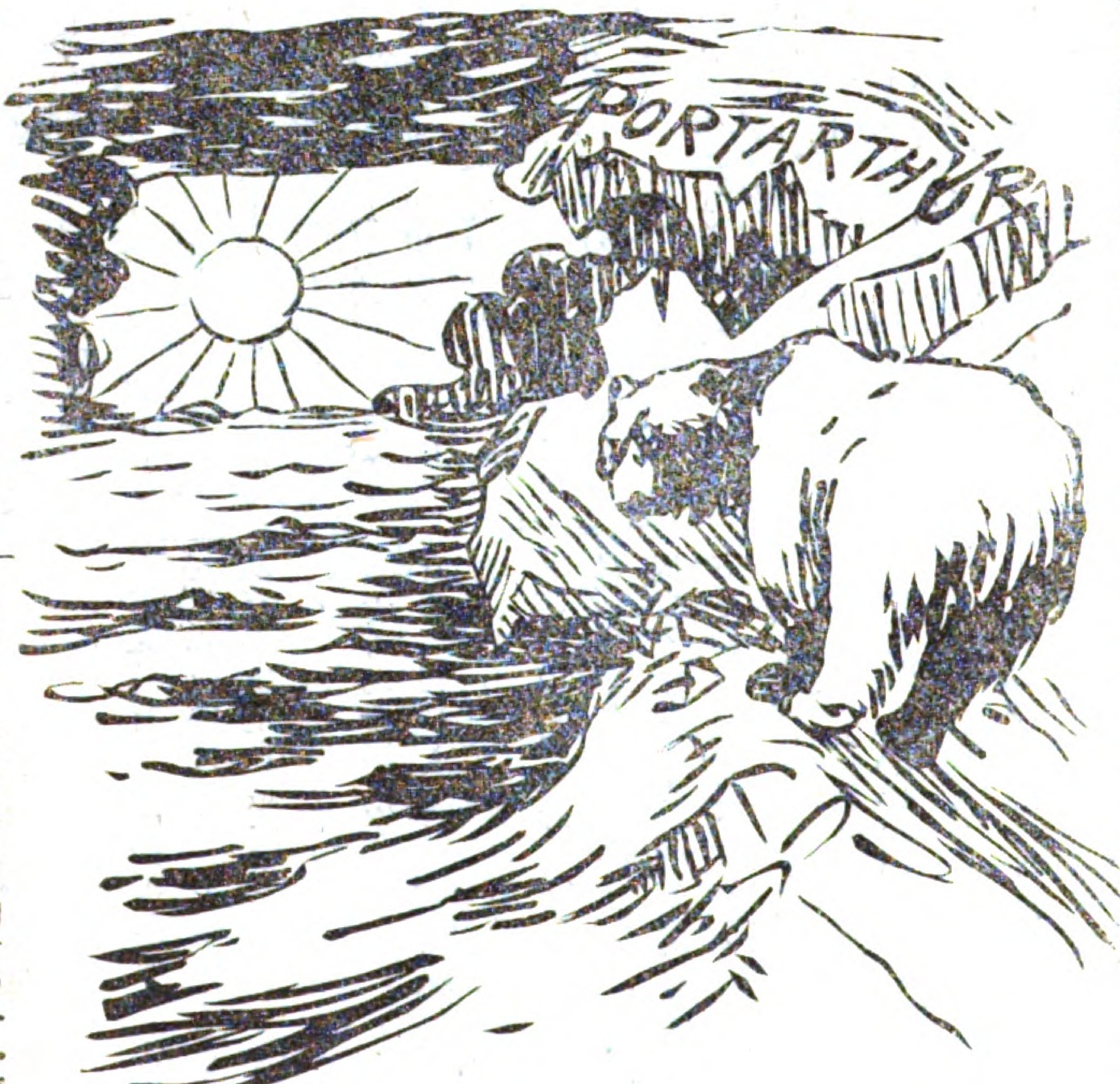
「ゼ、モーニング、ポースト」

予は日本の野心深きことに就て一毫の疑ひも存せず、ブリンクリー氏は殆ど聾盲者的なる論斷を與へて曰く「日本は今や東洋の覇冠となれり、されど彼は之を以て足れりとせず、尙東洋の牛尾とならんことを望む」と。而して日本は眞にかゝる希望を有するのみならず、又實に此希望を遂すべき方法は戰爭によりて得らるべきことを知るものなり。從來歐人の誇となせし所は實に其戰術の巧妙にありしが日本は一躍して之に劣らざるの技倆を示し、歐洲の各國をして皆舌を捲て驚嘆せしめたり。日本の野心は實に東洋に於て教導の任に當り盟主の位に即かんとするにあり。彼の直接の希望は眞に尊ぶべし、彼は滿洲を其持主に還さんとすべし、彼は朝鮮をして日本の埃及たらしむべし、彼は支那を改革せんと企つべし、最も突飛なる言論を弄して世を驚かすことを好むものと雖も此等は日本

の最初の目的にしてよし戰爭が最も善良なる結果に終るも日本は此目的を達せんとするに其力を用ふべきは拒むべからざる事實と認めざるを得ざるべし。予は此等の目的は明かに直接なる災害を歐洲に齎らすべきものと見ることを得ざるも、此れによりて間接に來るべき不幸は決して少々ならざるべしと信ず。

戰爭は日本に對して如何なる意味を有すべきかそは實に彼を其熱望したるが如く第一流の國民の間に其位置を昂めたり。彼が戰勝の數多きに從て其位置は益々昂まるべし、然れども之がために彼の損耗を招くべきもの少くとも二つあり、彼は比較的少數の國民を有す、而して此戰爭は軍人の多數の生命を犧牲とせざるべからず。彼は非常なる貧國なり、而して此戰爭は實に莫大の費用を消費せざるべからず。若し彼が償還を得るの望を達するも其經濟上の進歩は此大戰爭によりて遲滯を來すべきは明白なり。夫れ故に吾等は如何なる勝利を得るも日本が舊勢に回復するには多大の日子を要すべきを信じ、東洋の大勢に就て餘りに心配するの愚なるを思はずんばあらず。然れども若し一旦回復の期に達せんか吾等の恐れざるべからざるものは何事ぞや。浮説紛々として容易に其正確を期すべからざるも、其根底に横はるものは左の二大事件に外ならざるが如し。

「倫敦プンチ紙所掲」



日輪赫灼として輝き旅順の城郭次第に溶解せんとす

第一、あらゆるモンゴリアの國民は皆日本の管理の下に結び、其人數の多きを以て歐洲の利益を防げ又世界の平和を害すべきこと。

第二、現今歐人の配下に屬する亞細亞の諸國は日本の成効に勵まされて奮起し、以て其自由を要求するに至るべきこと

にして從來ウラルによりて分たれたる二大洲の面目は必ずや、大變化を起さずんば止まざるべし。

支那帝國の未來に就て、分割論を主張するものあり改革説を唱出するものあり。第一の論者に向ては若し支那帝國の事情を詳かにせば必ずかゝる恐怖を抱くに及ばずといはん、支那帝國な改善――世界人口の四分の一を有する國を改善するには多大の年月を要すべきも――せば彼は尚支那帝國として存在するを得べし、吾人は支那が日本の保護國となり、順良なる革命者となるべしとは思はず。彼は自

ら其手を以て痒ゆきを掻くの機運に至るべし。支那が其行政管理共に宜しきを得るに至るまでは己れの權利を行はんことは極めて難かるべし、されど若し支那が文明國と同一の地位に進みたる時に當りても從來の如き狀態を繼續せんとするは極めて不利なる事なり。殊に支那人を冷笑し、排斥するが如き傾向あるに至つては予の斷然取らざる所なり。支那が其受けたる侮辱に對して憤怒を發し、次て其の復讐を求るの時に至らば、我等は眞の利益の何處に横はれるかを見、東洋と交際するに當て、確固なる論理的基礎の上に立たざるべからざることを嚴格に感ずるに至るべきなり。而して此重大なる國際の問題は其時期に達すれば必ず英國と米國との兩國に起るべきを疑はず、然れども支那に於ける時計に手をかけ以て其時期の到來を緩うせんとするが如きは實に無用の業なりといはざるべからず、文明と進歩は實にあらゆる國民の究竟の利益なり、而して吾人は世界の利益に向て最も小なる災害を與ふべき變化の來らんことを願はざるを得ず、若し支那の分割が歐洲各國の間に行はるゝも決して世界の利益に向て加ふる所なきは論を待たざるべし。

又吾人は一方に方て支那帝國が近き將來に於て完全なる統一をなし以て一國家を作るべしとも思はず。支那は其風習傳說の同一なるに拘らず、其統一性の缺如たるが爲めに、過去に於て國民性の發達を防げ又未來に於ける改革を遲緩ならしめたり。然れども支那人は極めて實際的の國民なり、彼等の眼にして一度開かれなば直に改革を實行せんとの希望を起し、若し日本の如く速かならずもするも其れに劣らざる大改革をなさんこと必せり、而して彼等は又經濟的國民なるを以て、政治的の方面に於て世界に影響すること少かるべしとするも、經濟界の勢力は實に驚くべきものたるべく、是によりて國民の生活を高め、世界の實業界の形勢を一變せしむるものたるべしと信ず、兎に角支那問題は最も重大なることにして今後の事局を處理せんとするものゝ看過すべからざる所なりとす。

戰爭の繼續と列國の態度

「グラフキク誌」

若し今後日本の勝利が從來と少しも異なることなく、以て露國勢力を滿洲の外に驅逐することを得ば歐洲の諸國計りて仲裁の勞をとり、日本の利益を滿足し、露國の威權を失墜せず、安全なる平和の期會を與ふるを得べしとの漠たる希望が、一部の人士によりて抱かるゝ者の如くに見ゆ、然れども此希望の空しかるべきは多くの考慮を待たずして明かなるべし、日本の利益と露國の威嚴と到底兩立し得べからざる性質のものたるは白痴にあらざるよりは皆人の認むる所なり、然らば如何にして此矛盾したる事項の調和を計るべきか、露國の威嚴云々の如きを論ずれば所詮問題は決定せらるゝの期なかるべし、露國は初め日本と戰を開くや日本の强固なるを解せず、其文明の程度彼に劣らざることを知らざしなり、然れども斯く誤解したるものは獨り露國のみにあらず、日本の文明に就て喋々し、東洋に起れる新勢力に就て喃々したる日本贔負の人と雖も其内心を叩けば黃人種が歐洲列國の間に永久なる位置を得べしとは決して夢想したる所にあらざるべし、日本が歐洲に劣らざる文明と實力を有するは事實なれども然れども未だ全く之れを認許するを欲せざるが如き傾向存し、殊に露人の心には最も强大に存するを見れば、此信念にして根底より滅絕せらるゝにあらざれば平和の局を結ぶことは難かるべし、又一方より見るに日本の勝利にして繼續せば日本が果して露國の屈辱をあらはさゞる如き條件に於て其局を結ぶことを肯すべきや否や頗る疑はしきことなりといはざるを得ず、日本は國家の安全を保つべく今後久しき間今

回の如き戰爭の再びあらざるべき方途を講ずるに相違なし、此方途は如何にして見出さるべきか、曰く露國をして極東に於て其復讐をなす能はざらしむるが如くにするの外あらじ、然らば日本が露國に命じて其旗を旅順より、滿洲より、恐らくは又浦鹽より撤せしめ、且つ最も小なる要求として其他の提出をなすべきは疑を容れず、此等の事情を考ふれは戰爭の速かに終らんことを說くは實に空の空なるものといはざるを得ず、露國は其全力の潰裂する迄戰ふべし、而してこは一二又は三四度の戰爭によつて解決せらるゝものにあらず、又今回の戰爭程財政問題の不明なるものあらず、日本は若し戰爭に於て勝利を得るも經濟上の困難甚しきを以て、長き爭鬪をなさず適宜なる要求に於て局を終るべしといふは大いなる誤解なり、日本は實に用意周到にして戰爭の長久に亘るべきを覺悟し、又其長日月の間費用を節して繼續し得べき方法を研め了れり。

以上論じたる所によつて戰爭の速かに終らず長日月に亘りて繼續すべきは畧ぼ明かなるが如し、然れども之を以て世界の最大不幸の如くに論ずるに及ばず、何となれば戰爭に對する列國の對度にしてよく調和を得、列國合同して世界共同の利益を保護することに努力せば必ずしも大災害を齎らすものにはあらざるなり、列國は宜しく其態度を謹み、戰爭の區域を嚴重に限り、外交の方法によりて其中立國に禍らしむる迷惑をして少からしむべきなり。

「北米シカゴ、ニュース所掲」



陷落後の形勢

歐人の合唱"君の戰勝祝はんと、我等各々皿持ちて馳走の席に來りたり"

日露戰爭に於ける日本の軍馬

「スフヰア誌」

初め日軍が鴨綠江を渡りて露軍を擊退するや、フレデリック、パルマーは論じて曰く、

鴨綠江の行動に於て觀察するに、軍事上總て日本の優勝なるを示せりと雖もたゞ一つ之に反するものは騎兵なり、日本の軍將及び動作は總て正確にして活潑に、命令は行はれ、砲火は命中し些の非難すべき所あるなし、其勝利を得たるは當然の事にして騎兵

の外は全く優勝の實を有したればなり。

予聞は陸戰に於て軍馬の最も重要なる所以を思ひ些か黒木將軍の麾下に於ける狀態を研めて讀者に示さんとす。ブレデリツク、パルマー氏は上に引用せる文章に於ていへる如く、鴨綠江の戰勝は騎兵を除くの外總て日軍の優勝なるによれりと說けり、これ全く事實にして又其後の陸戰に於ても正しく應用し得べき理論なるが如し、然れども日本の騎兵と雖もよく其功を奏したること全くなきにあらず、又鴨綠江の役に於ても此れが爲めに幾分の力を加へたるを以て其弱點をのみ數ふるは決して公平を得たるものといふべからざるなり。

又日本の軍馬は騎兵の實際の動作に於て殊勳を樹てたるを問かずと雖も舟橋を架設するの際、板、繩等の材料を運搬し、又砲銃、彈藥等を鴨綠江岸に運搬する等所謂運搬用としては如何に之を賞するも過賞なりといふべからざるなり、而して軍事通信員の報ずる所によるに此等の運搬用の馬は長き行列を作り、重きを負ひて遠きに達し、よく秩序正しく進行するは恰かも鐵道の効能ありといへり。

又日本の軍馬の性質を論じ、或種のものは性急にして軍事の使用に不適なりといふものあり、日本の軍馬に斯の如きものあるは事實なれども日本の軍馬は決して一種に限られたるにあらず、其他種々の性質の者あり又殊に朝鮮の馬を多數に買入れたるものあるを以て一概に其性質を定むることは極めて難しとなす。

又日本の騎兵は軍馬を養成するの重要なることを充分に會得せざる如くに見ゆるなり今一二通信員の實例を以て之を證せんに本誌の讀者の熟知せらるゝダン氏は曰く

「予が今記せんとする所を一讀せば如何に日本人が馬に就て知る所なきかを知るに足るべし、予一日日本士官が足を損じたる馬に乗らんとする所に遭遇せり、彼は其傍に鞭を振り動かす一朝鮮人と脊を觸つ一日本兵とを從へたり、予は足の折れたる馬は回復するの期なく、殺すより外良策なきものなるを說きたるに、彼は下馬し、數日にして全癒すべきを言ひ、三足にして步し得るを見れば馬には別段苦痛なかるべしと考へたる如く思はれたり、予は彼が徒步にして進まざるべからざるを說きたるに彼は其從者に命じて其一足を折りたる馬を七十五哩の遠き地に持ち行かんことを命じたり」。

又ニユーヨーク、ワールドの特別通信員なるデイン、ウイデイ氏は記して曰く、

「日本の騎兵は其馬を取扱ふ所の法を知らざるなり、馬は正しき線列に繫ぎ置かず、又正しく養はず、又適當なる時間に食を與へざるなり、日本の騎兵は多くの點に於て善良なるものといふを得ず又彼等は馬に對して愛情を有せざるなり、小さくして足重げなる馬は適當なる待遇を受けざるを以て、其形汚げに其性順ならず、或は嚙み、或は蹴り、或は嘶き、又頑固にして命令を聽かざることあり、二匹の馬を接近せしむれば必ず爭ひ必ず蹴合ふ如き狀態にあるを以て見れば如何に其教養の足らざるかを見るべし」。

と。之を以て見れば最初に掲げたる彼の通信員の報告が、よく長き行列を作れりといへるも、全く馬と馬との距離に注意し、互に相蹴るが如き恐れなからしめたるものなるべし。

西藏問題に就て

「モーンニング、ポースト」

西藏人が頑然其固守する所を執り、以て文明の勢力に抗するの狀は寧ろ多少憐憫の念を起さしむるものあるなり。英國の使節がギアンチエに進

行する準備をなしてツナにあるやラッサの將軍は簡單なる規則書を送りてヤングハスバンド大佐がシキムの國境に歸り、以てダライ、ラマが此問題を論ずる代理者を遣はすを待つべきを命じたり、使節がツナに留る中は談判を開始することは不可能なりしなり、此使者に答ふるにヤングハスバンド大佐は始終同一なる主張を提出せり、即ち我等は其踵を旋らして退行する能はざること及び吾等は總ての件を友誼的に結了せんとすること等を以てしたるも、ラッサの將軍は首府よりの命令を奉ずるのみにして少しも自ら解決すること能はず、吾等は其の眞意は上述の如くなることを繰り返して論じたるも一毫も其効なく、ギアンチエに進行すべき命令を傳へて其の途に上りたるにグルに於ける戰爭は平和の使節をして終に軍事遠征の姿に變ぜしめたり。

ギアンチエに於て吾等は再びラッサ政府に向て書を與へ、以つて問題決定の商議を開くべき期を與へたり、されどもこは激烈なる戰爭の數週を經たる後まで何の音沙汰なくマクドナルド將軍が其軍隊を率ゐて到着するや西藏人は再び商議を開かんとするの意向を示せり、然れども相變らずの兒戲的信仰を以て倘一層深く內地に侵入するを禦ぎ得たしと念じたるもの丶如く、成るべく緩漫にして時日を遷延するの策略をとりたり。

「チユリンフイツチエツト紙所揭」



黒鳩公の軍略

”假令逃走一万回に上るも我に於て何かあらん
知らずや軍法の奥義は三十六計不若逃を“

英國の委員が示したる斷乎たる所置は西藏人をして西藏の平和委員は極めて無力にして又ダライラマ及びラッサの評議員は大に形勢を誤解したりしことを悟らしめたり、マクドナルド將軍の城廓を陷るに於て意外なる迅速を以したるは全くラマ等の豫想を轉覆せり、平和委員は其姿をかくし、一行は直ちにラッサの方向に進み比較的些細なる抵抗を受けたるのみにてカロラを横ぎり、水曜日に於てナガルチエの地に達せり、ナガルチエはパルチ湖の岸にある小市にして此處に西藏の委員は再び其顏を出せり、ギアンチエの城を取るを見て彼等は速かにラッサに急ぎ、以て如何に事變に處すべきかを議したるものと覺えたり、此會議の結果は彼等平和の委員が再び英國の陣中に來り以て平和の申出をなしたるにあり、タ、ラマ及び大秘書官は第三の代理者に伴はれ、ヤングハスバンド大佐と會談せり、ヤン

ヤングハスバンド大佐の發案によりて彼等はラッサにあらざれば其商議が決定する能はざるを感じたり、然れども西藏の代理者は商議を決定する迄はギアンチエに退却することを求めたり、かゝる時かゝる無法なることを求む、いかに西藏政府の非外交的なるかを見るべし、彼等はラッサを以て純粹なる宗教の市都となし、此處に於て政治の事業を議するは大に其神聖を害するものとなすを以て、決して此地に於て商議を開くまじと思ふなり、其論法は敢て議せざるも彼等の前提の誤れることは些の疑を容れず、ラッサは疑もなく大いなる宗教の中心點なり、されども亦全時に内政、外交の中心點にもあらずや、ダライラマの住所にして又各執政官及び支那皇帝を代表する二人の支那使節の住所にして形式上にもせよ西藏の首都なり、あらゆる記録は皆ラッサを以て此國政府の存在地となせり、此際に於ける答はたゞ一あるのみ、而して其唯一の答は實にヤングハスバンド大佐によりて與へられたり、其答に曰く吾等は進行の途次屢々商議を開くべき期會を申出でたり、然るに我等の與へたる期會は皆西藏政府の拒む所となりぬ、今回の條約は必ずラッサに於て開かれざるべからずと、然るに曾てクルゾン卿の指摘したるが如く現ダライラマは實に最も頑強なる惡天才にして此聖都を外人の一蹤に蹈ましむべからずとの信念を固執す。吾等は今少しの時日を經ば西藏首部の内政に就て熟知するを得べし然らばラッサに於ける吾人の滯在の長短を決定することを得べきなり。

露國の未來

「ナショナル、ニュース」

露國の大いなる危險は外國にあらずして實に内國に存することは殆んど疑なき事實なり．彼の恐るべきは外敵の侵入にあらずして内部の騷の潰裂にあり、日露の戰爭其局を結ばゞ其後に殘るものはたゞ貧財の増大と多くの不幸なる紀念に止らん、然れども波蘭人は決して露人の罪惡を忘れず、フヰン人は他日其束縛を脫せんと試むべく、露國の壓抑せられたる數百万の人は早晚一統政治の暴惡に對して革命を起さんと企つべきなり。多くの露國人は近き將來に於て日本との戰敗に於て如何に恐るべき不幸の起るべきかに戰慄せり、或人は斷言して曰く佛蘭西革命以後未だ嘗て見ざる程の革命を見るべしと、或人は推測して曰くセントペータースバルクに於ては想像も尚ほ及ばざる程の大慘劇を演ぜらるべしと、兎に角皇帝が全國民によりて激しく嫌惡せらるゝことは爭ふべからざる事實なり、我者は彼を呼ぶに臆病者なりとし、或者は暴君にして僞善者なりとし、最も多く辯護する者と雖も意志薄弱なりと評す、而して彼の國政は露國に對して最善なるものにあらずとは衆口の一致する所たり、フヰン人は彼を以て國の大敵なりとし、不倶戴天の怨を抱けり。斯の如く彼の四周は敵を以つて充されたり、若し日本との戰爭敗を取りて其局を結ばゞ、時は方さに熟しぬ、期は當さに迫りぬ、露國の大なる恐ろしき改革が其緒を繼ぐべきは疑を容れず、げに怖るべきは露國の未來なる哉。

海外雜纂

日本に於ける演劇の特質

「リテラリー、ダイゼスト誌」

カール、マントチウス氏は古來劇文學の歷史家が日本の國民劇の變遷が著しく西歐中古のそれに類似せるものあるを看過したるを憾みとし、自ら日本演劇の特質を論ずること詳かなり、其說に曰く、演劇上歷史を通觀するに恰かも普通の人類史の如く各國の間に甚しき類似の點を見出すこと決して少々にあらざるなり、然れども文明の程度同一の時に當りては假令其國民が甚だ遠隔の地にあるも人心の傾向往々同一の跡を辿ることあるを知れる吾等は、之を以て直ちに兩者の間に離るべからざる關係あるが如くに論判する輕擧に出づること能はざるなり。

日本人は外國の事物及び風習を採用して直ちに自國のものとなす如き同化性の强大なる國民なれば、支那の文明に接觸するや、又舞台上に於ける制度をも採用し、大に其勢力に動かされたり、一方に於て國民固有の劇が其存在を續けたるも殆んど半は緘默の姿となり、支那風の演劇漸く盛となりし有樣は、恰かも歐洲が中世に於て文藝復興に伴ひて入りたる古文學的演劇の勃興を視、固有の國民劇は殆んど窒息したるが如き狀態たりしに似たり、日本の演劇は今後亦歐洲演劇の感化を受け、久しからずして、其樣式を變じ、彼の佛劇を演じて短少なる人物が高き帽子を戴きつゝ行くが如き奇觀を生じ、以て現今日本劇の特質を失ふが如きことなかるべしとも限らざるなり、然れとも現今に於ては日本劇の特質依然として存在し、他國と其面目を異にしたるの點は多少の觀察を發すべき價値ありとなす。

「維也納ヒユウモリチツセ、ブラツテル所揭」



兩國の位置依舊如舊

日本は一旦支那演劇の感化を蒙りて大に舞台上の制度を採用したるも活潑にして間斷なき想像を逞うする日本人は、永く簡單にして無趣味なる形式の下に其感情と動作をあらはすを欲せざるべきは論を待たざるなり、是を以て彼等保守的なる支那人は此形式を以て滿足しつゝある間に日本人は其性格を發展し得べき演劇の特質に適する舞台を考へたり、而して其改革の或者は實に驚嘆すべき巧妙をあらはしたるものにして、取て以て歐洲劇にも應用し得べきものたり。舞台の形は其

簡單なる點に於て支那のそれに類似するものなれども又多少の異なりたる點なきにあらず。

今其最も異りたる特質を擧げんに客の坐すべき床の後部より舞台の前部に至るまでは其兩側に長き並行したる通行路あり、其高さは舞台と同一にして俳優の登場するときに多くあらはれ出づる場所なり、時として俳優は其中途に止り、以て十分位も其感懐を吐露することあり、勿論此場には些の裝飾あることなし、支那の風習に反し、日本の演劇は其背景の法に於て比較的進歩せり、道具建及必要の事物は甚だしき寫實的の正確を以て置かるゝを見るなり。

今舞台面の變化の事に就て論ぜんに支那及び日本の歴史的演劇は何れも非常なる變化を舞台面にあらはすを常とす、然れども支那の劇は一沙翁の如く一總ての飾りたる技術を輕視するに拘らず、日本は數世紀以前より屢ゝ場面の變化を行ふべく極めて容易にして秀拔なる方法を採用せり。舞台面に於ける重要なる道具建、即ち井戸、橋、門、馬、花園、山又は動物の如きは成るべき丈け自然物又たは自然物に髣髴たるものを用ひ、且つ歐洲劇に於けるが如く直ちに之を取去り又は合圖によつて之を變更するが如き仕組に成れり、然れども是れ未だ說の盡くせるものにあらず、何となれば其變化は如何にして行はるゝや又歐洲のそれと如何なる差異のあるべきかの事明かならざればなり。

今其變化の大體を說かんに舞台の殆んど全體は回轉し得る仕組にして恰かも我等が鐵道を回轉するに用ふる臺の如きものなり、此廻舞台は黑幕を以て二つに分けられ、其前半丈け觀客の眼に見え、合圖によりて其舞臺は其の上にある一切の物と共に回轉して觀客の眼を去り、後部にありし他の半面は廻りて前面にあらはれ、次いで觀客の眼前に來たるなり、日本は已に此簡單なる變化法を知れり、決して他國の劇を學ぶの要を見ざるなり、而して此等はよく一時間に十度も之を變化せしむるの自由を有するなり。

日本人は最も完備したる歐洲の舞臺にさへも用ひ得べきかゝる善良なる變化法を採用しつゝあるが玆に今一つ最も奇にして、而かも吾人の美の幻想とは決して一致し能はざるものあり、即ち影法師とも稱すべきものにして身に黑衣を纏ひ、頭に黑巾を被り、俳優の後ろに附き添ひ居るものなり、此奇妙なる人間の唯一の役目は俳優の後ろに侍して彼が要する事物を與へ、椅子を置き又は去り、或は舞臺の暗き時に俳優の顏を照らすが如きことをなすものなり、外人にして始めて此樣を見るものは實に嫌惡の情に堪へざるも、次第に之に慣るれば格別防害とも感ぜざるに至るといふ。

日本に於ける演劇の技術は一方には極めて寫實的の摸倣を見るも、又一方には甚だしき誇大なる情の發動をあらはすものあり、憤怒復讐の激越なる表情、苦痛の恐怖に對する動作の自然的、病理的摸擬、是等は日本俳優の特別なる長技にして、彼等は之によりて最も偉大なる名聲を持するが如し、而して彼等が此等の動作をなすに當りて滿身の精神を注ぐものにして彼の歐洲の誇張の言を弄するもの丶如き日本演劇の主人公が激して其言語を發するに比すれば到底死したる木石の物言ふが如くに思はるべし、其調子は或は昂揚して四壁を振はし、或は低抑して殆んど聲なきが如く、其間よく諧調をなして宛然として詩歌を吟誦するが如く、决して實在せる人間の實際の談話に似るべくもあらざるなり、時としては彼は感情の最高度に達して、言語を發せず、其默したる動作によりて其胸中をあらはす、日本の俳優は無言の動作に於ては殆んど完全の域に達したりといふものは此等の事に於てなりとす、彼は口より泡を吐き、其齒をくひしばり、其眼を廻はし、其髮をかきむしり、大に苦しみて死す

其死や實に徐々として長き時間を要することあるも觀客は一人も聲を發するものなく又幽かなる音を出すものなく皆熱心に之を見詰めつゝあり、次て如何に彼等が演劇を愛好しつゝあるかを見るべきなり。

未來の薪材

（泥炭の製法）

「リテラリー、ダイゼスト誌」

未來の薪材とはポピユラー、メカニツクス誌が泥炭の壓抑せられたる層に附與したる名稱なり、アイルランドの七分の一は實に此泥炭の澤より成立せり、そは今日に於て利なきが如くに見ゆるも、之を集め之を乾かし、之を製して立派なる薪材となすの改良したる低廉なる方法の知らるゝに至れば炭礦に等しき重要なるものとなること疑を容れざるなり。而して現今と雖も瑞典に於ては年々泥炭の二百万噸を使用しつゝあり、又シカゴの近隣五十哩の地は全く泥炭より成れる地にして未だ少しも採掘せざるを以て今后百年の間は充分此市都の薪材となる程の見込みありといふ。

今之を精製して立派なる薪材をなすの大躰を述べんに先つ器械の力を以て泥炭を澤より掘り上げ、而して日光を以て乾燥せしむるに速かなるべき植物の上に運搬するなり、而して後ち之を廻轉する壔の中に積み込み、非常なる速度を以つて廻轉せば内部の熱を送る裝置によりて泥炭は皆細かに碎かるべし、遠心力は水蒸氣を驅りて百分法の割合にて次第に壔内を去る、而して輪力器を引電器に依て連結したる電柱の方法によりて遠心力によりて乾燥したる泥炭は電氣の運行を見るに至り、泥炭の抵抗は熱を生じ以つて炭化するに至るなり、黑き小球の塊に其結果をあらはし、中に新らしき材料のあらゆる有用なる性質を殘留するものなり、而して之れを煉る所の器械にて充分に煉りたる後ち之を乾して、堅からしめ、最後に之を碎き、篩し以て扁平なるものとなすなり、

上述したるが如く此製法の手續は大いに乾かすべき時期の長短及び天氣の狀態によること極めて多し、アラスカの於て其供給を他に於て求むることは殆んど難し、而して斯の如き土地に於て精製したる泥炭を給するべく加何に大いなる天惠なるよ。又泥炭の供給は赤道を去るに從て比例的に增加するは事實なり、償還の永久なる方法に於て寒國には多量の薪材の存在せざるべからざる理あれば此泥炭の採用の如きは最も大いなる利益を世界に與ふるものなりといふべきなり、且つや電氣を應用して其普良なる分子を一毫も離散せしむることなく之を瓦斯躰に作ることを得べし、一噸の泥炭は僅かに一磅二一の信ずべからざる程の廉價を以て出來上るべし。精製したる泥炭は殆んど無煙なる薪材にして殆んど燃燒せざる分子を含まず後には清くして白き灰を殘すのみにて少しの滓をも留むることなしといふ、

日本婦人の愛國心

「デーリー、グラフイク」

日本人が禮拜怠らざる神社佛閣の多くに於て、現今最も人心を感動せし

むるに足る有様を見ること屢々あり。婦人は神前に其身を伏し、兩手を合せて一二の祈りをなしたる後、其頭髮を切り、彼等は最早や寡婦なることを示すのみならず、又實に一生再婚せざることを神に誓ふなり、此切られたる髮は白紙の脆きものに包まれて殿閣の入口にかけられ、其集まるを待て綱に編まる、而して其綱は實に驚くべき強さを有するものなりといふ。東京を去る遠からざる有名なる池上の神社の前には、髮のみを以て作りたる周圍數吋の綱のかゝれるあるが、こは日清戰爭の際無數の婦人の斷髮して捧げたるものなりといふ。以て日本婦人が如何に愛國心の强さかを推察するに足るべきなり

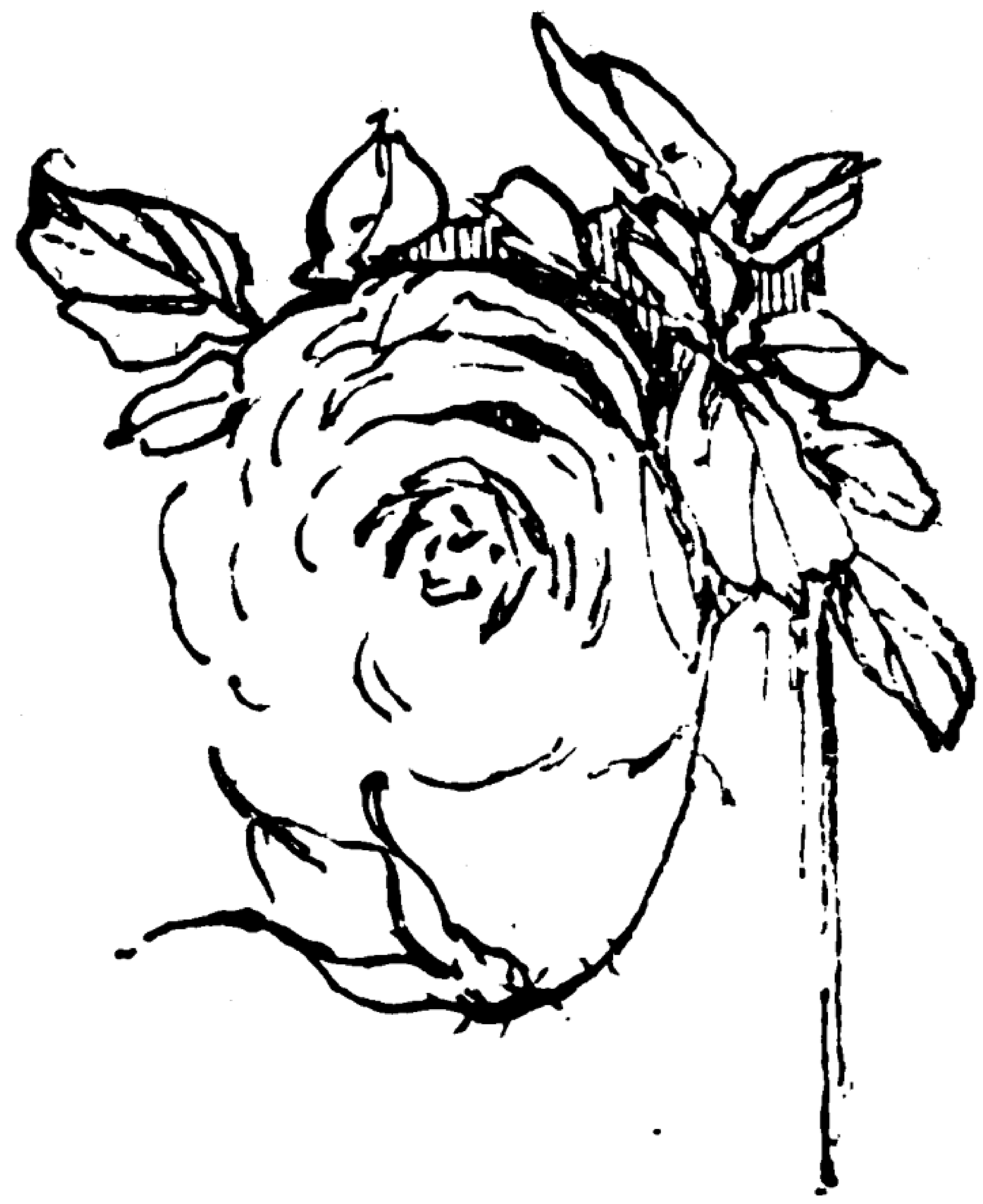
ヘンリヰ、デユーモラル氏の日本觀

（ダールニー、ヲストック新聞）

吾人は日露開戰前に善く日本の事情を知悉したる乎抑も亦開戰後既に數月を閲したれば果して之を洞觀し得たる乎戰爭前に在りては我露國の航海者にして日出國に永く滯留したるもの少なからさりしが故に吾人は此等の人の評說に據りて僅かに日本の事情を知ることを得たり然るに其の知り得たる所は乃ち日本の茶室が清楚にして漆器が深黑なりとか日出國の少女は嬌艷にして風姿娬媚なりと云ふに過ぎざりしなり、而して今は乃ち日本の事情並日本人の性情氣質宛として吾人の目前に反映せり吾露國の對外硬派に屬する新聞紙の言說する所に依れば日本人の性情は狡猾にして氣質粗暴なり彼等は他國の强弱を覗ひ他人の陰私を訐くを以て善事と見做し女子の淫を賣るを以て正業の一に數へ其の爲す所總て廉恥を外かにし常軌を逸せさるものなしと又或る一派の新聞紙は曰く日本人は概れ文字を知り工業に勤み特に摸擬の材能に富めり然れとも自己の欠乏に堪へすして他の進步を嫉視し他の富幸を憎惡せりと此の若く日本の事情と日本人の性質とに就ては毀譽褒貶區々に出て吾人は未た能く其黑白を明かにし其眞僞を辨するを得さるなり然るに今ま日本に長く游官せしヘンリヰ、デユーモラル氏の評說を觀るに最も善く日本の事情に通じ日本人の性質を洞察したる所あれば讀者に紹介すべし

同氏曰く抑日本は始め漆器の製作に獨特の妙技を有し蒔繪其の他の美術國として容貌の嬌艷なる歌妓風姿の綽約たる舞女を出たし氣骨稜々として秋霜烈日の如き武士（サムライ）あり而かして温厚質朴なる人民は善く各藩の諸侯に服從し其風俗の美にして人情の和平なりしは實に吾人の敬愛せる所なりき然るに時世の變遷と共に此等の階級漸やく衰陵し國家の組織一變したるが爲め前記の良風美俗亦靡然として消散したり蓋し從來井を掘りて飮み田を耕して食ひ熙々として太平無事を樂しめる武陵桃源的の悠優たる國民の生活は一たび歐米各國と交を訂し好みを修め港灣を開きて貿易を爲すことゝなり随て、營々衣食の供給を足し、汲々貨殖の需用を贍はさるを得さるに至りたれば日夜經濟事業に奔走し唯た錢是れ求むるの已むなき場合に際接し之が爲め實業社會は營業に忙殺せられ有司百官は施政行法に日も亦足らさるが如くなりし、是に於て在朝の政事家並在野の思想家は歐米の文明制度を斟酌して以て治國の基礎を恢興し維新の綱紀を建立し以て國民の富强を謀れり

日本の新聞雜誌の發行は近來大に增加したれど未た歐洲列國の如く多數ならず而して其記事中多く讀者の好奇心を喚起するものは紳士と愛妾との關係に非されば良家の閨婦と俳優との關係なり（以下省略）



雑録

ダンテ「新生」章第一

上田敏

一

わが物覺の本のあるくだりにして、その前には別に讀むほどの事も無きあたりに、朱字の標題を掲ぐ。即ち Incipit Vita Nova「新らしき生始まる」と物したり。此標題の下に書いつけたる言の葉を、われ今此草子に寫さむとす。凡べてにはあらずとも、せめてその大意を示さむ。

二

われ生れ落ちてよりこのかた、光の天は既に九たび自動して、またも殆ど同じ點に復へりし時、わが心の榮ある君は、まのあたり現はれ給ひぬ。人は只之をベアトリチエと呼びまつれど、終に其眞意を曉らざるなり。この君世に出てゝより、星天、東に移ること既に一度の十二分の一なれば、君は九歳の始つかた、われに現はれ給ひ、われは九歳の末つかた、君を仰ぎぬ。衣の色はいと貴なる紅染の嫺やかにふさひて、帶などの粧も童女の振にかなひぬ。その時わが心の奥の間に住む生氣はげにいと劇げしく顫ひいて、身のうちのいと微かなる脈にもわなゝきて、顫ひつゝいふやう、Ecce Deus fortior me, qui veniens dominabitur mihi「見よ、われよりも強き神は來りて、予を知ろしめさむとす」と。

その時、諸の官能の氣が、すべての知覺を傳達する上の間に住む心氣も、いとゞ奇みいて、殊更に視覺の氣に語るやう Apparuit iam beatitudo vestra「汝が福は今こそ現はれたれ」と。

その時、人間の養を受ぐる處に住む本來の氣も泣きいでゝ、泣くなく次のやうに語りぬ。Heu miser, quia frequenter impeditur ero deinceps「あはれ哀い哉、今より後、われいたく妨げられむ」と。

乃ちその時よりして「愛」はかくも速に契りしわが心を知ろして、わが想像の之に與へたる力に因り、われを領しわれを治めければ、その意のまゝに從ふほかなかりき。屢々われに命じて、かの若き天人をとめかしといへるがまゝに、幼けなきわれも幾度か、かの君のあと追ひて仰ぎまつれば、げに詩人ホメエロスの詞にて、「これは人間のものならず、神の女なり」とや稱ふべき貴に妙なる御姿にこそありけれ。かくて心に止まること絕間なき此君の形は「愛」を思あがらしめて、われを治めさせたれど、その力もとより品高きものから、徒らに「愛」のわれを虐ぐるをゆるさず、理性の忠やかなる誠に聽きて益ある折からには、必らず之に耳を假さしめたり。されど抑もかゝるうひうひしき年比の情と行とを詳らに述べむも、仇なる物語のやうなれば、今はたゞこゝに説かじ、其隱れ潜みたる原の本より、なほ引きいづべき樣々の事どもを畧きて、わが物覺のうち、更に大なる節のもとに書いつけたる言の葉を語りなむ。

三

このいと貴なる君の、前に述べる出現ありてより、こゝら久しく經て、宛も九年になりぬる其終の日、妙なるこの君は、純白の衣まとひ、年嵩の二人の淑女の間に介まりて、會々われに現はれ給ひぬ。大路すぎさせ給ふまゝ、わがもの怯ぢて佇めるあたりを眺め、今は永生にその報えたまふ譬しへもなき禮をもて、われに會釋し給ひけり。われは時に福のきはみを盡したる心地ありき。このいと樂しき禮のわれに逹せしは、正に其日の九時にして、御詞のわが耳に入りしも、この時始めてなれば、げにも嬉しく聞き入りて、われは宛がら醉へるが如く、人の群より遠ざかり、獨りわが家の寂寞にたれ籠めて、つらつらこの禮篤き君をおもひぬ。

かくて思めぐらすほどに、樂しき眠襲ひきて不思議の幻はつと起りぬ。おもへらく、火の色の雲わが居間におりたちぬと、そが中にある形を見れば、こは何人も仰ぎみて恐ろしとおもふ俤の主なれども、心に悅び給ふさま見えわたるこそ奇やしけれ。のたまふ言葉の多くはわかねど、僅かに知りえたるその中に Ego。Dominus tuus「われは汝の主なり」といふを聞きぬ。輕ろく紅染に包まれたるのみにて、ほかには衣ひとつつけぬ人ありて、其腕に眠れるを、われはひしと眺めたるに、こは畏こくも前の日に禮を施し給ひけるかの

會釋の君なるを知りぬ。主はまた雙の手の一に燃えたてる物を捧げながら Vide cor tuum「汝が心の臟を見よ」とわれに語れるやうに覺えき。斯ること暫らくにして、眠れる君を搖り醒ますやうなりしが、やがて巧に說き伏せけむ、掌に燃ゆるかの物を進めければ、かの君も恐るおそるたうべにけり。されどこれもたまゆゝにしてかの靈の悅もいとつらき悲にかはりて、泣くなく君を腕に收めて、久方の空高く走りぬれば、その時覺えたる大苦悶にえたへず、わが微かなるまどろみの夢は破れぬ。直に心づきて思ひ運らせば、折しも夜の第四時にて、即ち夜の終の九時間の第一時なりき。

かくてこのありし事どもを思ひつゝ、われは之を公にして、其頃の名ある歌人に示さむとせしが、われも既に自ら韻を聯らねて物語する技を習ひえたれば、一首のソネットォを編みて、「愛」に仕ふる諸の從者を呼びかけ、わが幻の說きわけを乞はむとて、夢の裡なる事どもを歌に語りぬ。

第一　ソネットオ

心も空に奪はれて物のあはれをしる人よ、
　今わが進ぶる言の葉の君の傍に近づかば、心に思
ひ給ふこと應へ給ひね、洩れなくと、綾に畏こき
大御神「愛」の御名もて告げまつる。
さても星影きらゝかに、更け行く夜も三つ一つ、ほ
と〱過ぎし折しもあれ、忽ち四方は照りわたり、
「愛」の御姿うつそ身に現はれいでし不思議さよ。
おしはかるだに其性の恐ろしときく荒神も
御氣色いとも麗はしくいますが如くおもほゆる御手
にはわれが心の臟御腕にはあてやかにあえかの君
の寐姿を衣うちかけてかき抱き、
やをらゆるがし、まどろみの醒めたるほどに心の臟
さゝげ進むれば、かの君も恐れながらに聞こしけ
り。愛は乃ち馳せ走りつ、馳せ走りながらうち泣
きぬ。

此ソネットォは二部に分かる。第一部には答を呼び求め、第二部にては何に答ふ可きかを明らかにす。後の部は「さても」に始まれり。

此ソネットォに返歌を寄せ來りし人はあまたありて、其說もまち〱なりしが、答へしものの中にわが一の友とも謂つ可き人は「おもふに君は、うつし世の貴きものをなべて見ぬ」といふに始まるソネットォを物しぬ。歌の贈主をわれと知りし時此人とわれとの交は、さながら、こゝに始まりぬ。

この夢の眞意は、その時、誰も曉らざりしが、今に至りては、敏からぬ人だに知りうべからむ。（禁轉載）

社交私見

其一　人間學

巖谷小波

牛馬羊豚の類でさへ、好んで群棲するものを、まして人間、萬物の靈として、寡居獨棲の天理に背いて居る事は、今更云ふにも及ばぬであらう。

まこと人間は交際の動物である。而もその交際や、牛馬羊豚の只蠢爾として群棲するのとは異り、互ひに面を合はせ、言を交へぬ間にも、その交際は相聯關して居るのであるから、隨つて複雜にも成れば、隨つて面倒にも成り、またそれに隨つて、趣味もあり快樂もあるのである。

て、その交際の巧みな者、やがて世渡りの上手な者その世渡りの上手な事、やがて成効の秘訣であると、かう云つても亦差支は無いので、苟もこの社會に出て、社交的動物たる以上は、宜しく此點に意を用ゐて、人と交際するの道を、豫め究めねば成らのである。

世間では、應接が上手で、誰でも人をそらさぬ者をあの人は交際が巧みだと云ひ、世渡りが上手だと云つて、ある場合にはこの種の人を、寧ろ聊か嘲ける樣にも見える。

が、余の所謂る交際の巧、世渡りの上手と云ふのは必しもさうした輕薄な所爲を指すのでは無い。時としては應接が下手でもよい、相手に依てはまた人をそらしてもよい。要するに交際の秘訣は、まづ人を見、時を見、場合を見るの、銳利な眼光を養ふのにある。

人の心はその面の如く、十人十色の諺の通り、會ふ人毎に異つて居る。その異つて居る相手に對して、此方は一定の性質を以て、一々これに接する間には、種々の異つた反應の呈せられるのは、蓋し免かれ得ぬ所である。

於是乎、苟も人に接する時は、まづその相手の人物を、出來得る丈深く觀察せねば成らぬ。さうかと云つて、何も賣卜者か人相見の樣に、身の上が運性まで、判斷する必要は決して無いが、兎に角その性格を察し、その長所は何所、短所は此所と、着々我が頭腦で讀んでから、徐ろに之に對する交際法を講ずれば、決して間違は無い筈である。

かくて相手の人物を知つてしまふと、交際も亦仕易いので、その相手に依つては、必しも應接を巧みにし、またそらさぬ樣にと勉める事も、決して之を要せぬので。なまじ世辭も云はず、時にはわざと之に逆ふのが却つて交誼を深くする事がある。

然るに人物の如何も究めず、相手の何者も考えずして、何時も一本調子の世辭を振りまき、相も變らぬ攝待を仕向けては、偶々甲に喜ばれても、乙には不快の感を與へ、此所では持て囃される身も。彼所では却つて輕んぜられるに至る。眞の交際上手とは、思ふにかう云ふ者ではあるまい。

かう云へばまた、それは云ふ可くして行ふ可らず。一體人の性質と云ふものが、そんな一見や二見の間に迚も解るもので無いと、かう云ふ者もあるだらうが、其所にはまた方法があるので、常から多くの人間に接し、その接する度毎に、意を此點に用ゐて居ると、別段何の理屈も入らず、所謂歸納的解釋法で、何時か人間學に精通する事に成る。

人間學? まことに人間學は、學校で學んだり、圖書館で調べたりしたつて、所詮會得の出來るものでは無い。それよりは活きた社會に出て、活きた人間に接する事、度重れば重るほど、自然と合點の行くものだ。が、それには前にも云ふ通り、平生の心掛が肝腎なので、幾人、人に接して、ぼんやり之を看過して居る樣では、とても此の秘訣は悟られまい。

序に云ふが、交際は成る丈廣いほど、之に依つて得る利益も多く、またその廣さは、一方面に廣いよりは寧ろ多方面なる方がよい。例へば文士として軍人と交際し、商家として友を學者に持つて居るなどは、兩者の職の互ひに相反して居るだけ、互ひに得る所少からず、即ち頗る趣味深く、また利益多い交際と成るのだ。

また、人に依つては毛嫌をして、氣の合はぬ者と交際ふのを、非常に嫌ふ者があるが、それも此方の氣の持ち樣で、必しも苦には成らぬのである。即ち此場合は、如何してこの相手が、乃公と性が合はぬであらうとか、またこの人間が、何故人に嫌はれるであらうかなど丶云ふ所を研究すると、趣味がまた其間に起つて萬更斥けるにも及ばぬ事に成る。

要するに、人が社交的動物で、人と交際する事が、權利でありまた義務である以上は、宜しくまたこの道を研究し、漫然人と交はる事無く、却つてその交際の間に、何等かの利益を見出す樣にと、常に心掛けねば成

るまいと思ふ。但し此所に利益と云ふのは、決して形而下の利益、物質的の利益を意味するのでは無い。

嗚呼社交學！社交學はやがて人間學である。而してその教科書は、社會である。又人間である。

其二　贈答の事

贈答は廢止すべしと云ふ議論が、一時大分行はれた様であつたが、社會は相變らず贈答を廢せず、中元の砂糖袋、歳暮の鹽鮭、依然として市場を賑はして居る。成る程贈答と云ふものが、今日の様に虚禮に流れ、貰ふ者も格別喜ばねば、遣る者は尚更面倒がるのに、浮世の義理と諦めて、餘儀なく遣り取りすると云ふ、殺風景な有様であるなら、寧ろ斷然之を廢すに、余は決して反對はしない。

が、之が爲めに此贈答と云ふ事が一切社會に跡を絕つてしまつたら如何か？　それこそ無味乾燥な、虚禮の贈答に煩殺されたよりは、更に殺風景な物に成りはすまいか。

一體人間と云ふ動物は、後には大人振つて、高慢な顏をして居ても、或る點までは、到底稚氣を脱し得ないものだ。隨つて、人に物を貰ふのを、心の中に喜ばぬ者は無く、また人に物を贈つて、それを喜ぶ顏を見るのに、決して惡い心持はせぬものである。

是は人間の弱點であると同時に、また人間の美性と云つても可からう、社交界に贈答の行はれるのも、元はと云へば、皆この美性から出た、一種の美習に過ぎないのである。

然るに世は澆季と成つて、初は自分も喜び、また他をも喜ばせやうとした、美しい考から出た美習も、遂には自分も厄介なら、他をも迷惑がらせる事と成つた馬鹿々々しい話ではあるが、是も畢竟中頃から、その精神を誤つたからで、喜ぶのも喜ばせるのも、自然形式にのみ泥んだ故だ。

されば中元の、歳暮の、年始のと、季節からまづ之を極めて、此の節に當つた場合には、何人も強いて喜び、強ひて喜ばせんとしたればこそ、やがて喜びが不自然に成り、果は厄介がり、迷惑がると云ふ、反對な結果を來たしたのである。

「遠くから屆く近所の菓子袋」とは、已に天明時代に於て、此間の消息を冷罵したものであるが、兎に角、到來のビールの氣の脱けた頃、十軒目に漸く口を切られ、進物のカステラの黴が生へてから、再び元の家に

戻るなぞは、お座の醒めたる限と云ふべく、言語同斷の沙汰である。

が、之に反して、誕生日の祝とか、結婚の賀とか、或は病氣の見舞、旅行の餞別など、凡て臨時の場合には、流石に融通の贈物は出來ず。隨つて遣る者も心を籠めれば、貰ふ者も大いに嬉しい。かくてこそ贈答の本旨は、初めて盡されたと云つて可からう。

之を西洋の例に見るのに、クリスマスの贈答などは丁度我邦の歳暮に似て居るが、それとても到來物の融通はせず、思ひ〳〵に心を籠め、乃至は自分で手間をかけて、特に作つた物を遣り取るするから、遣つた者も貰つた者も、大いに嬉しさが深くなつて來る。

また誕生や結婚の折には、成るべく永い紀念としてその人の手に殘る物をと考て、一時に消費されてしまふ物や、次第に消耗してしまふ物は、勉めて避ける樣にする風がある。これも然る可き考ではあるまいか。

尤もかう云ふ場合に、花や植木を贈る事が屢々あるが、それはよし一時の眺め、永くも一日とは續かぬにせよ、頗る詩的に感ぜられ、大いに趣味のある物であるから、日本でも段々流行せたいと思ふ。

また贈品に書籍を用ゐる事も、日本ではあまりせぬ事だが。讀書力の日に進みつゝある今日、大いに行つて然る可きでは無いか。愚にも付かぬ鰹節折や、場所ふさげの絲綿なんぞ貰ふより、珍らしい花物や面白い書物を貰つた方が、どんなに嬉しいか知れやしない。

また子供への手土産に、菓子や果物を持つて行くのは、寧ろ心無きの甚しいもので、それ等を買ふ錢があるなら、宜しく玩具か、繪本か、お伽噺の、成るべく害に成らぬ物を選んで、これに與へるが一番である。

兎にも角にも贈答は、虚禮虚式に流れぬ限り、必しも廢するには及ばぬものて。眞に人の美性から來た、美習的贈答であるならば、寧ろ之を奬勵して可なりだ。

但し此種の贈答は、決して範圍を廣くするには及ばぬ、互ひに親しく知り合つた間にのみとゞめて、無意味無理由の贈答を廢し、只之を要する場合に臨んでは十分之に心を籠めて、相手を喜ばせると同時に、我もこれを喜ぶ樣にさへすれば、またこれほど愉快に、これほど趣味あるものは無いのだ。

往時に於ける歐人の北海探險者

五　露人のアラスカ發見

文學士　烟山專太郎

スパンベルグの日本探險に向ひてより、ベーリングはオホートスクに至りて自己の乘船を造るに努め、二年にして漸く二艘の大船具成るを告げしかば、彼は探險隊の一行を伴ひ、カムチヤトカを回航してアワーチヤ灣に入り、こゝに一の殖民地を新設し、之に命ずるに二船の名を以てして聖ピオトル及聖パヴルの港と云ふ。一七四一年六月各般の準備全く成るに及びて、自らスヸァトイ・ピオトル號に乘り組み、尉官チリコフをしてスヸァトイ・パヴルに船長たらしめ、數多專門の學者を伴ひて愈々アジア、アメリカ兩大陸の關係を研めんと出帆し、行くこと二旬ならずして二船、濃霧の爲に別離し、相探求して復、再、見ること能はず。其間七月に至りてベーリングは初めて其當初の目的地たるアメリカ大陸を發見したり。これ實に北緯五十八度二十八分の所に於てなりき。同時にチリコフも亦これより南方に於てアメリカを實見しぬ。ベーリングはなほ進でアラスカ半島の南灣に碇泊せしが、船中、壞血熱流行して死するもの日に相踵ぎ、加ふるに風向甚險惡にして到底北行を繼續すること能はざりしより、一と先、カムチヤトカに到りてこゝに越年せんものと決心し、西南に進みて初めてアレウト群島を發見せり。然るに彼は此一連の群島を以て千島列島と誤認したりしより、アワーチヤ灣に向ふの方向をあやまりて已にカムチヤトカの近岸に接しながら、終に之を見出すこと能はず。而して年、次第に末に迫りて寒氣日に益々加はり、水夫の死するもの算なくしてベーリング自身もまた病に罹りけるが、船は十一月の初に至りて端なくも一大島に着し乘組員の生殘せるもの之に上陸して飢を凌ぐことを得たりしと雖、憫むべし、敢爲の大探險者は終に此島に於て長逝したり。紀念してベーリング島と稱するものは實に此大島なりとす。之より先、チリコフの一行はベーリングに劣らざる非常の艱苦を嘗めて年の末辛うじて、カムチヤトカに歸航したりしが、聖ピオトル號の生存者も、本船既に破れて沈みければ、翌年、之によりて更に小舟を組み立て、僅に聖ペオトル及聖パヴルの港に歸ることを得たりき。ベーリングが此第三回の大

探險事業はロシア政府も亦力を之に添ふるを吝まざりけるより、學者の之に隨行して學問に殉したる者亦尠からず。ノグメリンや、ルイ・ヴリスル・ヴ・ラ・クロアイエールや、ミユルレルや、ステレル、クラシエニニコフの如き、皆有益なる學問上研究結果を今日に殘せり

六　露人、北海の遺利を獲得す

（露米商會の勃興）

ベーリングがアレウト群島を發見し、スパンベルグが又千島列島を探りたりし此事實は世人に示すに北海に於ける海產物の測るべからざるを以てして大に當時に於けるロシア人の企業心を皷勵したり。さればクルーセンステルンの如きは論じて曰、一六九六年のカムチヤトカ發見と一七四一年のアレウト群島發見とはロシアに於ける大事件なり。此國の貿易上に與へたる廣大なる影響よりするも、將た之がロシア人民の貿易的精神に一轉機を與へたるよりするも、少からざるの意義を有する事件なり。カムチヤトカとアレウトとの占領はロシアを其永き商業上の惰眠よりして覺破したりと。實にこれよりしてロシアの極東經營殊に主として其漁場の擴張着々、歩を進めて、一七四五年に於てはノヴイデイスコーフなる者始めてアレウト群島の西端なるアッツー島に上陸するに至りたり。是に於て數多の商人は獸皮貿易の最も好望なるを見てロシア本部よりして爭ふて遠くカムチヤトカ、アレウト、千島に渡航し、而して此商業の發展に伴ひて一方に於てロシア政府は政廳を各地に分置して土人を撫育し、ギリシア敎會の會堂を所在に建てゝ彼等をして言語、風俗すべてロシアの俗に模せしめければ西方ヨーロッパの人士の自國の內事に忙殺せられて此の如くに遠隔なる北方寒海の收利事業に目を轉ずるの遑あらざりし間に、其經營は驚くべく進步したり。只不幸にして當時のロシア商人は各自の小我小利に固執して毫も邦家の前途を善謀するの明なかりしが爲に、彼等は小團體、小商會を組織して互に排擠これ事とし、海獸を亂獵し、土人を虐壓して暴利を貪るなど北海の貿易業は甚だ喜ばしからざるの有樣に陷り、十八世紀の末に至りては此類の小會社の數實に六十以上を以て數ふるほどなりしと云ふ。是に於て此患ふべき形勢を看破し、アラスカ南岸のカデイアク島に新に殖民地を開きて土人を撫育し、一七九九年を以て所謂露米商會の一大企業團體を組織するに至りしロシアの一豪商出てぬ。之をシエリコフ

となす。ロシアの北海經營は其過半、實に此露米商會の施設によるなり。

七　佛國探險船初めて黑龍江沿岸を探る

是より先、ベーリングの北海に航するや、遙にアジアの側面よりしてアメリカを望みたりしかど、アラスカのアメリカの一部分たるを知らずして之を一大島なりと誤認し、この後、世人はしばらく此說を信じて更に疑ふ所なかりしが、有名なるカピテン、クックの第三回の遠航を行ふに及びて、彼は一七七八年八月を以てサンドキッチ群島よりして北行、北緯七十度に至り、アジア、アメリカの二大洲はアラスカ西方の水路に由て分たるゝを斷言し、此海峽に名くるにベーリングの名を以てしたり。クックの此北海探險以來、此地方に存する遺利は漸にして西ヨーロッパ諸國の注意を牽きてロシア政府の此間に各方の地理を究めつゝありしはもとより、フランス、イギリスの二國までも亦遙に探險の船隊を之に向て派遣するに至れり。蓋し當時にありては、千島及カムチヤトカより以東の地は既に頻回の探討によりて其地理の稍〻明なるを得るに至りしかど、獨り何人も未だ知ると能はざりしはオホートスク海の西方、サハリン、北海道の沿岸、及黑龍江の河口より滿洲一帶の海岸に至るの地理にてありき。時のフランス政府はカムチヤトカ及アレウト以北の探險をば之をロシアの討ぬるに放委して、秘密の訓令をラペルーズに下し、黑龍江口に至らしめぬ。ラペルーズ即一七八五年を以てブースソール及アストロラーブの二船を率ゐて發し、南アメリカの南端を回航してカリフォルニアより北緯六十度に至るアメリカ海岸を探り、更に針路を西南に轉じてマカオに至り、一七八七年を以て支那海岸に沿ひつゝ滿洲の沿海に至り、北緯五十一度二十九分の處に於て一の良灣を發見して時のフランス海相デ・カストリの名を以て之に付し、なほ北すると八里、端艇をしてサハリンの西岸に沿ひて進ましめしに、舟は行くと六里にして沙洲の前面を閉塞するが如きに遇ひければ、之を以てサハリンは沙洲を以て大陸と連なり、其沙洲は滿潮の時には沈みて其跡を見ざるべく、要するに黑龍江口は此沙洲の存するが爲めに船舶を通ずると能はざるを憶斷して北進を停止したり。探險船隊は之より南に歸り、サハリンの南端より東向して宗谷海峽を横ぎり、千島のウルップ及シモシ

ル間を通行してこれにブスクール海峽の名を附し、以てペトロパウロウスクに至りぬ。サハリンと北海道との關係如何は從來ヨーロッパ人の詳にせざる所たりしが、ラペルーズの此海峽通過あるに及て、百七十年前ユエスイタの宣教師ジエロームの告白したりし事實はこゝに始めて證明せらるゝことを得ぬ。由てこれより以降、此水門を稱してラペルーズの海峽と云ふ。ラペルーズはこれよりしてオーストラリアに至りたりしが、幾くもなくしてオセアニア群島に於て難船し、一行盡く溺死するの慘禍に遭ひぬ。後、フランス共和政府は彼の爲に搜索船を派出し、之によりて此不幸なる事實を知るを得たりしと云ふ。

八　クルーセンステルンの世界週航

ラペルーズが探險の後、六年にして一七九三年イギリス政府はケピテン、ブロートンをしてなほ更に北海に航行せしめぬ。ブロートン、即一七九五年より七年にわたる三年の間にプロヰデンス號に搭じてサハリン及北海道の沿岸を探り、サハリンに於ては彼は吃水淺き帆前船に乘じてラペルーズの曾て碇泊せし場所よりもなほ韃靼海峽を北して五十一度四十五分七秒に至りこゝに一の灣を發見して之をチャプマンの入江と名け、なほ部下の士チャプマンをして小舟に搭じて北進沿海を測量せしめしが、又海水淺く沙洲、サハリンと大陸とを繫ぐとなしてラペルーズ以外の新發見をなすこと能はざりき。彼は北海道に於ては各地に於て接觸し、先づ松前附近のインス（江差ならん）に上陸せしが、こゝに少數の日本人ありてブロートンの住民と接するを妨げ、自らはプロヰデンスの甲板上に來りて種々の質問を發し、其中の或ものゝ如きは時にロシア語をも交へ語りて其博識に得意の色を現し、なほ又親くイギリス人と甲板上に食事さへなしたり。ブロートンは又或る場所にて日本人の漁舟に乘り來りし數多の魚を與ふるに遇へり。プロヰデンスの破損するに及んで彼は小きスクーネルに移乘して、奧州の東岸に沿ひ、南部の近海に至りしが、漁舟は數多其周圍に群り來りて、其或ものゝ如きはスクーネルに來りて陸岸に上らんことを求めたりき。ブロートンこれよりしてエンデルモ港（繪鞆の誤訓なり）に歸りしが、日本官吏、松前より來りて彼の速に出帆すべきを求めければ、彼は終に已むなくして日本近海を去りたり。

ラペルーズとブロートンとの探險に次ぎてクルーセンステルンの世界週航あり。彼は蓋しロシアの使節並に日本漂民を護送して日本に至り、又北海、殊に黑龍江口を討究せんことを其目的となせしものなり。彼、一八〇三年（享和三年）を以て此命を受け、翌年、南アメリカを回航し、カムチヤトカを經て我が長崎に至り、こゝにて互市の請、斥けらるゝに及び、一八〇五年、去て日本海を橫斷し、津輕海峽を右にして北海道の西岸に出で、往く〳〵其海岸を觀測しつゝ、サハリンの南端アニワ灣に碇泊するものしばしなほ其東岸を究めんと欲し去て東向、パーシアンス岬（我國の所謂カラフトのシンノシレトコ岬）に至りしが、氷塊の流れ來るもの多かりしより、終に途を東に轉じてペトロパウロスク港に入れり。彼は之よりして從來の航海士の曾て通過せざりし航路によりて黑龍江口を探險せんと欲し、七月又カムチヤトカを發して千島に至り、マツア島とライコケ島との間を過ぎて（彼は此海峽に命ずるにナデジユダ海峽の名を以てしたり。實に其乘船の名によりたるなり）西向、再パーシアンス岬に至り、これより飽くまて北進してサハリンの極北端、エリザウエド崎及マリア岬（共にクルーセンステルンの命名にかゝる）を回航し、終に其西岸に達しぬ彼はかくて黑龍江口に向ひ、サハリンと大陸との間、六海里なる狹き水門に到り、水深の淺きより尉官ラムベルグをして艀舟に乘じて南下せしめしが、ラムベルグはサハリンの岸北緯五十三度三十分の處に於てガロワチエフ岬を發見し、これより大陸に向ひ、同二十分の處に於てラムベルグ岬を發見せり。彼なほ、南せんとしたりしと雖、南方よりの潮流頗る急にして進むこと能はず、加ふるに此水門の極めて淺きが爲に、ラペルース及ブロートンの報告の如くに、サハリンは半島にして洲沙之を大陸に連結し、到底日本海よりして黑龍江口に達するを得ざるものなりと斷定し、終に探險を停止してカムチヤトカに歸れり。クルーセンステルンが當時既に黑龍江口を發見するの好位地にありながら、敢て進て江口の果して通航に堪ゆるや否やを究むることなかりしは、彼が這般の行爲の支那政府の怒を招き、索て以て露國の多年莫大なる利益を收め來れる恰克圖の獸皮貿易を杜絕せらるゝに至らんことを恐れたりしに由ると云ふ。

九　間宮林藏初めて樺太の半島にあらざることを表示す

ヨーロッパ諸國人の北海探險は實に此の如く、彼等は當時皆以てサハリン、半島たるの說に於て一致せざるはなかりき。然るにクルーセンステルンの遠航の後三年にして文化五年（一八〇八年）我大探險家間宮林藏は單身カラフトに渡り、小舟に乘じて其西岸を北行し、キジー湖邊に於て滿洲大陸に上陸し、これより黑龍江を溯りて當時滿洲人の定期、貿易を開きしデレンに至り、歸途、江流を下りて江口に達し、それより南向、サハリンの全く離島たると、黑龍江の通航に堪ゆるを直に表示したり。其紀行はシーボルトによりて飜譯せられて始めてヨーロッパ人に傳へられたれども、（シーボルトの日本紀卷末にあり）ロシヤ人の迂なる、永く此事實を知らずして、ムラヴィヨフの東部シベリの總督となりて其國の黑龍江經營の長足の進步を遂げ、海軍少佐ネヴェリスキーが一八四九年（嘉永二年）を以て黑龍江を下りて韃靼海峽を南下するの時に至るまでは、彼等はサハリンを以て大陸の一部なりと信じつゝありき。

而もネヴェリスキーが此新き發見の報告を彼得堡政府に上申するや、當時當路者の多くは未だ俄に之を信ずるに至らず。就中、外相ネッセリロード及露米商會長ウランゲリ提督の如きは頗る之に向て疑念を挾みつゝありき。間宮の如きも、カラフトの島嶼たるを確めしにも拘らず、其唯一の島なるとに疑問を於き、樺太は其中央に於て沙洲によりて二ケの島に分れ、潮流の干滿によりて時ありて合して一島となり、時ありて又別れて二島となるものなりと云ひたり。後此見の誤謬なるとは幕府直流する所の官吏によりて其內地旅行の實歷よりたしかめられ、終に慶應元年（一八六五年）を以て岡本文平が島の東岸より北航し、カラフト北端の地點を廻りて之を一周するの時に及べり。蓋し之を要するにロシアの南下蠶食はネヴェリスキー及ムラヴィヨフの二英雄任に極東に來りてより、サハリンは、滿洲に、千島に、非常の速度を以て行はるゝに至りたりしなり

補記　慶長五年に於ける西班牙人の日本東海岸探險

以上記し了りたる處、偶然、四五年前、オスカル、ナホット博士が公にしたる一六一一年（慶長六年）に於けるイスパニア人の日本東海岸探險の記事を發見するを得たり。記事詳密、興味少からず。殊に此事件は我國人をして西班牙人葡萄牙人を以て我國土を侵略し、異教を弘布するものたるを推せしめ、終に全く彼等の再渡を拒絕せしむるに至りし動機なるを以て最注意すべしとす。由てこゝに其概要を擧げんとす。

ノビイスパニア即墨西哥にセバスチアン　キズカイ

ノと稱する人あり。カリフォルニア地方の探險を以て顯る。一六一一年三月、此人、地の大守サリナス侯の命により日本派遣の使節としてメキシコ府を發しぬ。蓋し一には江戸なる將軍に國書方物を呈し、二には日本の東方、凡四百哩、太平洋中にある金銀島を發見し三には日本政府の許可を得て其沿海を測量し、四には過般メキシコの近海にて遭難したる日本人民二十餘人を護送せんとするなり。一行すべて五十餘名、フランシスコ派の宣教師若干名も亦之に隨行しぬ。一行の乘船はアカプルコを發して西行三ヶ月、六月の初（太陽暦）に於ては北緯三十八度の邊に於て初めて陸地に接し、月の十日を以て浦賀に入り、直に携ふる所の書を家康及秀忠の二人に呈して先づ江戸に赴き、秀忠に謁見し、出て駿府に家康に謁せり。彼等は日本海岸の測量、日本港内に於て一船を造る事、並に貨物賣捌の三件盡く許す所となりしを以て十月初旬（我が九月初）日本國内通行の旅劵を得、月の下旬を以て江戸を發し、古河、宇都宮、白河、若松、米澤各驛を經、到る處、諸侯の歡迎を被りて遂に仙臺に着せり。當時伊達政宗之が城主たり。耶蘇教を尊信したりしを以て殊は一行を厚遇し、其領土の沿岸の如きは多くの便を與へて自由に彼等の之を測量するに任せしかば、仙臺灣内の港灣は最も精密に探險せられ、キズカイノ等は之よりして北せしが、時已に冬に入りて寒威漸く加はりしより、彼等に終に南部領に入らずして歸路に就き、東岸に沿ひ中村、水戸を經て十二月末日（我十一月末）を以て江戸に歸りたり。

翌春、キズカイノは日本南海岸の測量に從事し、伊豆の海濱よりして駿府を經て京都に上り、留ると半月餘、伏見、大坂より終に堺に着し、更に沿海の測量をなし、七月中旬を以て陸路江戸に歸着し、精緻なる地圖を製作したり。當時家康、秀忠が如何に外人を優遇したりしか、之を後の鎖國主義の頑陋、殆んと敎ゆべからざりし我國狀に對比する時は、吾人は其あまりに急劇の變遷たるに驚倒ざる能はざるなり。思ふに我國の俄に南蠻人を排斥するに至りしは、其ユエスイト宣敎師の弘布すなる敎儀が、多くの信徒をして陋冥、君命を輕ずるまでに執迷せしめ、我國人をして遂に之を厭ふに至らしめたると、新敎徒たる蘭人及英人の我國に渡來したるものが、歐洲本土に於ける新舊兩派の軋轢につれて極東に於て又西班牙人葡萄牙人を排せんとせしによるなるべしと雖、キズカイノの沿岸探險の事

實の後、邦人をして恰も之が我邦土侵略の第一着手たるべきを想起せしめ、愕然として彼等の弛心を警醒せしめしに因由せざらんや。(完)

日本内地旅行記

ランドルフ、チャーチル女史

○始めて日本を見る

外人にして一度日本に旅行するの幸運を得て、而かも若し其受けたる感慨を筆にせざるものあらば、そは寧ろ異例にして又實に奇怪なることなりといはざるを得ず。予も亦正當なる常例を履まんが爲めに玆に日本内地を旅行したる感慨を記し、わが讀者の一覽に供せんと欲す。

彼の忌むべき太平洋――灰色を帶べる空と海、激しき寒さ、方向常なき風、堪へ難き單調なる太平洋――の記事は之を略せざるべからず、實に航海を終る最後まで不快極りなく恰かも太平洋は我等をして人界より拉し去らるゝが如くに感ぜしめ船中に於ける最後の夜は嫌惡の情の最高調まで達したる時なりしなり。

されども夜の明くると共に喜びは來りぬ、陸の形見え、もろ〳〵の樂しき眺めあらはるゝに至りしとき予は一刻も早く甲板に上らんといらち、衣服を着かゆるをも待ち能はざるに至れり。

○横濱埠頭

横濱港に着するや、直ちに四方を見廻すに種々の形又は大いさの船舶周圍に集り來り、其外側には日本風の小船の波に漂ふも見えぬ、予は暫し種々の異なれる服裝をなしたる水夫の有樣を眺め、大に物珍しく感じぬ、政府より遣はされし小船には二三の軍人乘り來りて我等と共に着したる日本官吏を迎へたり、多くの叩頭の禮及び歡迎の叫び起りぬ、兩側には數多の小船並びあり、其を漕ぐ水夫は單に木綿の短衫を着、頭の廻りには細き布切を巻きたるのみにして、政府より來れる軍人の華美なる制服とは好一對の對照をなせり、我等は岸に上り、旅館に着して極りなき喜悅の念を起せり。

寒氣激しき太平洋に久しく曝されたる後、横濱に着すれば蒸暑くして心苦しきこと甚だしく、僅かに二三日にして此地を去り、山地に旅行せんとの心を起したり。山地に至れば天氣は心地よく又極めて安樂なり、

四隣靜寂にして心亦自ら清閑、胸中たゞ慰安に滿ちて筆執らんとすることさへ忘れ果つるばかりなり。されど予は努めて紙に向ひ旅行中の最も愉快なりし部分の大體を記載せざるべからざるなり。

○婦人と小兒

横濱の停車場には多くの群衆あり、裸體なる人夫、寛濶にして風に飜る衣服を着たる商人、靑き木綿の短袴を穿ち其背には色を以て染め拔きたる文字にて其職業をあらはしたる工作人、其他各種の婦人もありて實に混亂を極めたり。結婚したる婦人は其眉を剃りたると其歯を黑く染めたるによりて直ちに識別せらるべく、此惡しき風習は彼等が其夫に忠實にして變心せざることの爲めに起りたるものなれども、予はむしろ夫の側に於ては却て反對の結果を生じ、其妻を厭ふの情を起すにあらざるやを恐るゝものなり。此等の人民は騷がしくし奇怪なる音を發する下駄をはきつゝあり。予は又「學校歸りの三少女」を眺めて愉快を感じたり、其黑く輝く頭髮には椿油を附け、櫛又は珊瑚珠を以て飾りとなし、其顏を眺むれば描ける人形の如き少女は莞爾として微笑す。

羽毛の如き柔かなる草を以て掩はれたる綠なる小山の間を徐ろに廻ること二時間許にして吾等は國府津に着し、其處にて馬車鐵道（バーミンガムにて作りたる）に乘り、兩側には多くの小村落ある長き街道を行くこと殆んど一時間許、天氣は次第に暑く其住民は小兒を携へ、門前に於て種々の家業に從事し、皆滿足したるが如くに見えたり。日本人は一般に小兒を愛し、其名及び住所を記したる金製の札を腰に結びて、見失ひたる時の用意に備ふ、小兒の愛すべきは論なけれども日本の小兒は決して泣かず又小兒の常に有する惡臭を放たずなどいふは甚だしき虛僞の言なりとす。我等は旅行を續けて一大長橋を渡り、橋上より遠山を銜める海洋の大觀を眺むることを得たり、暫らくにして疲れたる馬を新たなる馬に代へ、湯本に着したり。

○奇なる山、淸き流れ

湯本に於て我等は總て人力車に乘れり、車には各二人の車夫あり、一人は之を曳き、一人は之を押し、予が未だ嘗て見たることなき程の石多き道を驅けつゝ進めり、途にして我等は茶店に入れるに、茶店の女主呼吸を殺して（人の面前に呼吸せば口中の臭氣を散ずる

恐ありとし、かくの如く呼吸を殺して禮義の鄭重なるを示さんが爲めに）數多度び叩頭し、膝に手をすり、柄のなき茶碗に日本茶を注ぎ、何處にも見ゆる黄色の菓子と共に差出したり、

人力車夫は其淺黑き身體より流れ出づる汗を拭ひつヽ、白き上衣（彼等の唯一の衣服）を脱ぎ、近傍に流るヽ水を汲みて其身を洗へり、水は甚だ淸冽にして恰かも泉源の如くに見えたり、水の流れ出づる所には二本の竹を貫き、一本には美しき野花の一束を立て、他の一本には其下なる淸き水瓶に其淸き流れを導けり。予は車夫をして茶店に於て酒を飲ましめたれば、彼等は俄かに勢附きて輕快に疾走し、直ちに宮下なる富士屋旅館に着せり。此地は甚だ美しくして奇觀に富みたるも、旅館には歐洲人――其多數は香港、上海、又はシンガポールより來れる靑白にして衰弱せるものが海面を拔くこと三千尺なる宮下の新鮮なる空氣を呼吸せんとて來れる歐洲人――充ち滿ちて大に失望せり、されども吾等は此地に於て二週間の樂しき月日を送りぬ予は絕えて山地を倦厭せざりしなり、變幻極りなき天光山色、狹隘にして幽邃なる山路、急流小石を轉ずる河川、直下白霧を散ずる瀑布又所々より見ゆる遙かなる海岸、一としてわが心を喜ばしめざるものなかりき。

○田園生活と敎訓

散步と遠足は予の最も好みたる所にして決して時の經過するを覺えざる程なり、種々たる植物は又予の心を喜ばしめ、此旅行中五十餘種の新らしき植物を見たり。各所に隱見する茅屋小舍は實に日本の田園的生活の特色を發輝して趣味深き景といふべく、彼等農民の勞働して而かも其職に滿足する有樣は人世に一大敎訓を與ふるものたらずんばあらず、

一日予は函嶺の湖水に赴き、竹の枝條を以て編みたる駕籠に乘り四人の擔夫に運ばれたり、こは快き乘物にはあらざりしも其擔夫が交互に位置を代へて肩の重みを感ぜざるが如くにしたるは感ずべし。

山路の曲折する所に於て吾等は突然岩の片側に彫り附けたる大なる佛像の立るを見たり、（其傍には柱の如きものを樹てヽ多くの祈禱を書ける紙片を貼りたり）佛像は石上に踞して其足を膝の所に置き（是れ足を地上に接せざることを示すが爲めなり）其顏面にはあらゆる佛像の特質たる「永遠の平和」の相をあらはせり。予其像を瞻視するに細眼にして遠く望めば眼を閉ぢた

るが如く見え、全體靜粛にして、口元には微笑をもらし、總て忍辱の妙相を呈せり。

○寫眞と函嶺の湖水

日本の寫眞師は景色を撮影するによく中心點を捉へて全景を活躍せしむるの妙を得、立派なる一個の美術家として見るべきものなり。若し我等が彼等の足跡を追うて其撮影する現狀を見ず、たゞ其出來上りたる寫眞のみを得ば或は寫眞師の理想化せしたるものにあらずやと疑はしむ、予が函嶺の湖水の寫眞を見たりしときは正さにかゝる疑念を抱きたる程なりしが其實際を見るに及んで眞に其絕佳なる風景に醉ひ、地上又かゝる仙境のあるべきかを嘆じたり、我等は二つの小舟に乘りて湖水を橫ぎり、偉大にして崇高なるる富士山にかゝれる雲の姿を眺めたり、山は常の如く雲霧の間に姿をかくし、未だ一度びも其體を見るを得ざりしを以て、予は旅館に至り、衣服の模樣に描きたる此山の姿を見て滿足せざるを得ざりしなり、我等は歸路硫黃泉の多き地を踏み、徒歩にして旅館に着せり。英國公使トレンチ氏は此地に來り、又教授バシイ、ホール、チヤムバーレン氏とも知己となるの喜を有したり、チヤムバーレン氏の著せる「日本の事物」なる書はあらゆる英語を用ゆる人民の典據として貴ぶ所なり。

吾等は東京に行かんとして再び橫濱に歸り、ボーマーの花園を見物せり、花園には一面美はしき草木を植ゑ白又は黃なるモグサは激しけれども佳香を放ちぬ、瑞香種の植物は英國に於けるよりも五倍の生長を遂げ、枝を切りて短矮にしたる松樹及び五百年も經たる棕櫚は總て此小なる花園を飾れり。

○靈山の遠望

橫濱を去らんとして乘りたる汽車は人已に充ち乘客は多く快濶なる「左樣なら」といふ別れの言葉を聞けり、日本人の好んで誇稱する所の富士山は此時始めて其姿をあらはしたるも、そはたゞ一分の間にして、此巨人は再び雲間にかくれ了せり、其山の頂上に登らんことは極めて難儀のとならんも又極めて興味の多きことなるべし、西歐の人にして始めて此富士山に登ることを許されたるものは三十年以前バーレー、バークス夫妻なりとす、此時まで外人の足下に踏ましむるは靈山を汚すものと信ぜられたるなり。

○東京遊覽

予は東京に着して、其場所の廣大なるに一驚を喫せり、東京は實に倫敦と等しく一面の一區域を有し、或一所より一所に達せんとするには甚だ遠き距離を行かざるべからず、予は少額の報酬を以て往々數哩を疾走する所の貧しき人力車夫を憐まざるを得ず、吾等は芝の宮殿に行き、將軍家の菩提所を見たり、宮殿の內部には大なる石及び青銅作りの燈明器を飾り、以て其舊恩を謝するべく死者の靈に捧ぐるなり。其殿堂に上るべく吾等は靴を脫がざるべかりしなり、己にして無情冷淡なる僧侶出で來りぬ、其剃りたる頭腦其虛飾に流れたる「着物」は慈悲を行ふべき職に不似合なる感を起さしめたり、吾等は順次に神殿を見物し、美麗たる壁畫、黑漆を塗りたる天井、高價なる金箔附の戶板、天然の風姿を驚くべき精細を以て模し得たる花鳥の彫刻を賞し、最後に各將軍の墓上に於ける大なる石瓶—其飾としては將軍家の紋なる三ッ葵の金章を附せり—を見物せり。

次ぎに我等は四十七人の「浪人」の墳墓に行けり、其四十七人は大膽なる驚嘆すべき人士にして舊主の讐を報ずべく勢強き敵を殺し「腹切り」を行ひたるものにして、爾來人民の尊敬を受けつゝあり、其浪人の首領「大石內藏之助」の墓石は花を以て掩はれ、紙の祈禱札を貼られ、其戶には大いなる籠のかゝれるありて、其中には名札入れあり吾等も勿論各名札を其れに入れぬ。

其れより無數の街衢を通過して英國公使館に達し、間食をなせり、トレンチ氏は予を伴うて最近地震の後景を見せしめたり、(地震中家內に於て最も安全なるは戶口なり、戶口は最後に潰るゝものなりとの話を聞けり)

○川上の芝居

我等は其後「壯士俳優」川上の芝居を見物に行けり劇場は甚だしき大入にして其狂言は日本軍事通信員の冒險に關するものゝ如くに思はれたり、其狂言には多くの殺戮の場あり、又非常に騷擾を極め、直ちに倦厭の念を生ぜり、然れども他の觀客は非常に熱心にして皇帝の名の出づる毎に拍手喝采せり、予は横濱に於て見たる通常の芝居の方遙かに趣味饒かなりしを自白するものなり、予輩は床に於ける所謂「桝」に入り、他

の客の如く茶を給せられたり、他の客即ち一家族擧りて來れるもあり、母も娘も子供も父も孫も來りて皆共に其晝飯を喫したり、予は寧ろ彼等の箸を以て食ふ有様を面白しと思ひて眺めたり、先づ小なる盃を出し、米飯を入れたる小なる箱を取り、野菜、魚及び貝なる配菜を盛れる皿、小なる器物に入れたる茶勿論牛乳又は砂糖を交へざるを取揃へたり（日本人は歐人が茶に交ふるに牛乳又は砂糖を以てするを甚だしき惡趣味なりとなせり、彼等に從へば此等は其臭氣を以て眞の茶の味を害するものなりといふ）幕の間每に觀客は喫煙し、睡眠し、談話し、又頻りに團扇を使用せり、寒暖計は凡そ八十五度なりしも場所は別に惡臭をも發せざりき、予は倫敦の一劇場と雖も此れに同じきものあるや否やを考ふるを禁ずる能はざりしなり。

予は小なる「娘」を見るにピエル、ロッチの記する如く、强き「帶」を締めて美しく裝ひたる「小娘」が繻絆一枚の人夫の間又は小供を養育する齒を黑染したる保姆の間にありて奇なる對照をなすを見たり。

○女形俳優に驚く

狂言は十四五場の多きに達し、終日續き、時として二日に亘ることあり、此狂言は稍々不明瞭の所ありしも予は女優の優美、踊りの際に於ける其輕快なる動作及び其緊しき衣服を處理するの仕方を嘆美したり、豈に圖らんや、予の女優と思ひしは全く男優なりしことを知りしときの予の驚きはいかばかりなりしぞ。二三年以前迄は日本に於て男女の俳優合併して興行することを禁ぜられ、各戲場は男、又は女のみを以て嚴格に區別せられたり、されども近來に至り、大に變化し、男女相混じて演ずるもの數多あるに至れり。（未完）

無線電信之話

通信技師兼東京郵便學校教授　松代松之助

松代松之助氏は我國無線電信最初の研究者なり、氏が功蹟の偉大なるは其勳五等双光旭日章を拜受せらしによりて知るを得べし、今回本社の乞によりて之が平易懇切なる說明を聞くを得たり、由來科學的知識に缺乏せる我國民は必ず之を一讀せざる可らず（記者）

上

○電波式無線電信　元來無線電信の事は多少專門に渉り、之を平易簡明に講述するは些か困難を感ずる次第であるが、先づ大體に就いて成るべく判り易く說明

しやうと思ふ、全體無線電信には種々の方式があつて今日頻りに評判されて居るものは我々が稱して電波式無線電信と云ひ、電氣波を利用する處の電信法である。
○其電氣波とはイーザーに起る波動　　て、其又イーザーとは、我々の肉體にも周圍にも物體の間隙にも空氣の間隙にも、月の世界から日の世界から總て其中間に至るまで此宇宙に充滿して居ると想像さるゝ所のもので電氣波は即ち其のイーザー振動に由て起る所の波である、水の振動は波濤を起して人の目にも見える、空氣の振動は音波を起して鼓膜に響き之が神經を傳つて腦に達し始めて音響として聞くことが出來ると同じく、彼のイーザーの振動も其現象は大に異なつて居るが、又波動を起すので空氣が振動すれば今云つた如く音響を發する、併し其振動にも色々ある、急調なるがあり緩慢なるがありて、其緩慢なものは乙の調子を出し、急激なものは甲の調子を出す、而して通常人の聲は大概一秒間に百五十乃至五百位の空氣の振動に據つて起るものであるが、これが餘り緩慢になつてもまた急激になつても其極端になると我々の耳は之を聞くとは出來ない、其極限數は人により又空氣及び其他の狀態に依て差異はあるが先づ大概一秒間十六以下、三萬三千以上のものは聞くことが出來ぬとしてある、之と同じ道理で、イーザーの振動にも亦緩急がある、總じて
○光の波、熱の波、電氣の波は皆イーザーの波　　て只其イーザー振動の緩急より生じたる異現象であるに過ぎない、それで光の波には紫から赤まであつて、其紫は一秒間約八百萬億のイーザー振動に依つて起るもの、赤は一秒間約四百萬億のイーザー振動によつて起るものである、紫以上、赤以下の振動も矢張り一種の光の波を發して居るが、是は肉眼には映じないで只化學作用其他の手段に依て其存在を知る事が出來る、それからイーザー振動がずッと緩くなつて一秒間約百萬億乃至二百萬億位になると熱の波になつて眼耳には判らないが觸覺で感受し得るものとなる、それからずつと緩くなつて一秒間約百萬回位の振動になると之が
○即ち電氣波と稱するもの　　で先づ五萬乃至二百兆の間を占めて居る、此電氣波は眼でも耳でも感受する事が出來ないが他の方法を以て其存在を知り得るのである、而して其總ての波に感じて其存在を示す物を總稱して
○檢波器　　と名づけて置く、つまり耳は音波の檢波器、眼は光波の檢波器である、而も電氣波の檢波器に

至つては其種類頗る多く、

○之が研究も亦頗る多趣味なものである、既に述べた通り、光、熱、電氣と其波の種類は異なつて居ても畢竟はイーザー波であつて其現象に就ていつても反射屈折等の諸現象及び空間に傳播の仕方幷に其速度が總て同一である、夫故に或人は電氣波を稱して眼に見えぬ光と云つて居る、即ち前にも述べた通り電氣波と光の波とはイーザー振動の緩急に依て現はれて來るが之を感得する檢波器も大に差異があるのである、而して

○之を起す所の方法も亦大に異ならねばならぬ、其電氣波を起す所の方法と、之を感受する檢波器とは今日は幾多の研究者に依て發見されてあるから、電氣波を起す器械を以て送信機となし、其檢波器を以て受信器とすれば、之に據て無線電信を行ふ事が出來るのてある、只此上殘す所は如何なる發振方法と、如何なる檢波器を用ひたならば

○最も確實に通信することが出來るか、それを如何に改良したならば實用に適するやうになるか、又之を實用に供するには成るべく誰にでも使用され得るやうに簡明にして、且つ經濟上なるべく安價にするには如何にせば宜きかといふ點である、斯くいへば頗る譯の無い事に成るが、併し之を工夫するのは一廉の苦心てはないのである、それて其電氣波といふ假想を考へ出したり、其性質を探求したりするのは即ち物理學者の重に擔任する所で、其研究結果より出來た假想を色々の場合に當篏めて見て、何時でも甘く當篏まる時はそれが當時の

○眞理又は學理といふものになつて世に承認さるる事になるのである、故に工學者技術家といふものは斷えず實用界の需めに注意して其要求を滿足せしむる爲め、如何に學理を應用すべきかを心掛け、物理學者が研究成蹟を利用活動せしむることを擔任するものである。

○今無線電信研究の歷史を見ると、電氣波の物理的研究は最初は有名なるフワラダイ先生の理想から起つて來て、而してマックス、ウエルケルビン兩大家の數學物理學的研究となり、次て明治廿一年頃に至つて有名なる獨逸のハインリッヒ、ヘルツ先生の實驗物理學的研究となつて、電氣波に關する學問は玆に一新生面を開いた、このヘルツ先生の研究成蹟なるものは當時．

○世界の耳目を聳動　　して、これから電氣波の研究といふものが世界物理學者間の流行性になり從つて益々有益な研究も出來又重要なる發明も多く發表されたからして、電氣波の性質等は甚だ明瞭になつて來た、そこで、明治廿八年六月英國のオリヴァーロッヂ教授はヘルツ氏の遺業を公衆に紹介する目的を以つて英國のローヤルインスチチユーションで一場の演説をしたことがある、其時ロッヂ氏の示された實驗機械は

○殆んど今日の無線電信機の姿を具へて　　居つたとのことである、然るに其後明治廿九年の末に至り伊太利のマルコニー氏は遂に電氣波を應用する無線電信法といふもので英國の特許を要求し、又明治卅年の春之を當時の英國遞信總監プリース氏に示した、プリース氏は誘電式無線電信法の發明者であつたのであるが、マルコニー氏無線電信の長所を認め忽ち之を稱賛することになり、同じ六月頃ローヤルインスチチユーションに於てマルコニー氏の爲めに有力なる演説をしたと同時に、一方英國の遞信省に於て六百磅の研究費を支出すべく議會の協贊を得ることに取計つたのである、即ち英吉利海峽で其研究を開かるゝになつたのも皆此プリース氏の力であつて、流石は大國民の態度として人々の稱贊して措かざる處であるしかのみならず

○マルコニー氏の電波式無線電信機　　も未だ其頃は頗る幼稚なものであつて、殊にロッヂ氏の示されたものと大差は無かつたのであるのに、プリース氏の演説は非常に世界の耳目を惹いて、之が即ち機會の熟したとでも云ふものであらう、世界各國共に手を揃へて電波式無線電信法なるものを研究する事になり、中には發明の優劣を爭ふ人を生ずる盛況を呈して來た、其多數なる研究者のうちで

○一等大仕掛　　なのは英國の無線電信會社で、最初十萬磅の資本を以つて起つたのであるが、其半額はマルコニー氏の特許權とマルコニー氏とを合せ買收する爲めに費したのである、以後マルコニー氏は同社の技師として益〻深き研究に從事することゝなり、各國でも爭つて之が研究をすることになつたからして、其進歩は非常なる速度を以つて進み、今日の如く實用に供し得るに立至つたのである。

○我邦で始めて此研究　　をし出したのも決して各國に遲れては居らぬ、明治卅年プリース氏の演説が雜誌に載て居るのを見てから、間もないことで海軍省に無線電信調査委員會の設けられたのが卅二年の二月であ

つたが各國何れも其發達を異にしそれ〲特有の機械を發明することになつたのである、斯くの如く電波式無線電信を實用界に持出し之を世界に紹介したる、マルコニー、プリース二氏の功績は其歷史上決して忘るゝ事の出來ないものである

余が始めて無線電信の研究に着手したのは明治三十年八月で、品川海に於て第一回の實驗をしたのは同年十二月であつた、次に三十一年中研究を積んで其五月には電氣學會に於て其成蹟を發表し、十一月には月島臺場間の實驗を新聞記者、海陸軍人、諸學校教授の一覽に供へ、三十三年二月九日海軍中佐外波内藏吉氏の協議を受けて同省に無線電信調査會を設け自分は委員に囑托された、この調査會は自分の案出した機械を基礎として研究を進むべく議決し、漸次改良に改良を加へ、遂に明治三十四年には既に兵器として採用せらるゝことになりたのである

先に電氣波を起す方法と其檢波器とが判れば無線電信は出來るといつたが最初先づ

○電氣波は如何にして起すか　といふ事を說明しやう、今彼のレーデン瓶――レーデン瓶とは硝子瓶の外面と內面とへ各其半分程以下に錫箔を張つたもので、其一方の錫箔へ陽電氣を送れば反對面の錫箔へは陰電氣が吸引される、其陰陽兩電氣の相互に相吸引する結果として玆に蓄電せらるゝ仕掛のものであるが、針金を以て此兩錫箔を接續すれば、今迄兩面にあつた電氣は此針金に傳はつて陰陽結合し互に中和する、是れが即ち放電と稱するもので、此放電の際パチッといふ音響を發すると共に火花が見える、即ち

○これが空間のイーザーに電氣波を起させる　のである、其他電車線とトロリーとの間に時々火花の出て居るのは諸君の屢々實見するところであるが、此際にも同じ作用によつて電氣波は放射されて居るのである、　無線電信の場合には第一圖の如くインダクションコイル即ち醫者の用ふる感傳電氣のズット强い、少くとも一尺位の火花の飛び出す位のものを用ひて、其一方を大地に、他の一方を竿又は柱又は風船で高くぶら下げて在る電線へ接續し、此處には徑約八分位の金屬製小球を設けて其兩球の距離を約六分位にして置く(此部分を起振器或は發器と稱ふ)そこで此電鍵を押へてインダクションコイルに電氣を通ずると兩小球間に火花が連續して發出し、之と同時に電氣波が起る、此火花は電鍵の押へられて居る間連續してパチ〲と放出され、空間の電氣波は其間それからそれへと引續き波動を續けるのである、此場合に於いて起振器の一端より大地に導いたる電線と起振器の他の一端より高く

垂下してある電線即ち我々の所謂垂直線と稱する電線が頗る重要なもので、殊に此垂直線は高く長くすればする程遠方に感動する、又一本よりも二本、二本よりも三本にして感じを良くすることが出來る、此方法は送信機の原始の形であつて、通常

○百海里前後までは此方法で充分　であるが、遠距離通信は尙發信電力を增さねばならぬ、從つて此方法ては不完全たるを免れないから、五百海里千海里の遠距離通信には多くは別の方法を使用する、それは電源を交流發電機に仰ぎ、變壓器に據て之を數萬ヴォルトにし、之を起振器に送り込むで電氣振動を起させる方法を採るのである、第二圖は即ち其接續略圖である、此電鍵を抑へると交流發電機から電氣が流れて此變壓器を通り、こゝて之れが數萬ヴォルトの強い電壓の電氣となり起振器の兩端へ送り出されるのである。

○變壓器とは電壓を變化さす器械　で、よく市中に於て電灯の柱の上に鐵の函があるがあれが、即ち變壓器である、發電所から千ヴォルトとか二千ヴォルトとかの強い電壓で送り來たのを、そのまゝ屋內へ導き入れるのは危險であるから、之を變壓器に據て凡そ百ヴオルト位にするのであるが、無線電信の場合にいふ變壓器も道理はこれと同一である、勿論此場合には交流發電機から送る電氣をずつと高い電壓のものに高めるので、其構造等は多少差異があつても、大體に於ては一致して居るのである、それで此變壓器に據て數萬ヴオルトの强電壓の電氣を起振器に送り込むと、起振器には劇しい火花が出る、其際テスラコイル（圖を見よ）と蓄電器を通じて劇烈なる電氣振動が起つて、電氣波は此垂直線の絕頂より大地に至るまで全面から放射され、それが空間のイーザーに傳はつて四方八方へ

○光線の速度と同じ速度　即ち一秒間に七萬里の速さを以つて傳播して行くのである、又此テスラコイルといふのは、之は極めて簡單なもので、太き被覆線を數回捲き、其上へ別の線を又數回捲いたもので、つまり一種の變壓器で、只通常の變壓器は鐵心を持つて居るが、テスラコイルにはそれがないのである、此第二の法によれば五十馬力でも百馬力でも何程でも電力を增すことが容易に出來るから遠距離になれば此第二法に據らねばならぬ、又百海里以下の時でも同調法などの場合には矢張第二法を用ふる、併し通常は第一法で充分間に合ふのである。（未完）

挿圖は彫刻を過ちし爲め締切期日に後れ已むなく次號に掲載す



思潮

繼父母と其子女

「六合雜誌、再婚論の一節」

若し子女が極めて幼稚にして己が母と他人とを區別し能はざる場合には、後妻を迎ふるも其害比較的に少ないかも知らぬ。然れども已に五六歳以上になれる子女を有する人が後妻を迎ふるは實に子女の幸福を殘害するものである。親子の愛情は自然に發生すべきものであるに、不意に新しき人を迎へてこれを母と呼ばしめんとするのは全く不自然ではないか。殊に子女の年齡二十歳以上にも達せる時父が其子に比し僅に數歳以上なる新婦を迎へてこれを母と呼ばしむるが如き何等の不自然何等の滑稽であるぞ。吾人は繼母と其子女の間に起りたる幾多悲慘なることを知つて居る。これ決して繼母の罪にもあらず、亦繼兒の罪にもあらす、全く此悪制度の弊毒と言はればならぬ。世人は多く繼兒に同情を表して繼母を憎めども、これ實に繼母の境遇を察せざるの甚しきである。繼母は決して始より鬼の如き心を有する婦人てはない。彼は他人殊に小兒を愛すべき性情をも有し、亦斯くすべしと敎訓せられて居るのである。彼が繼母として始めて新しき家に嫁するや、彼には我子の如くに繼兒を養育せんとの抱負さへあるのだ。然るに實際我子にあらざる子女に接して見れば前の考は一の空想に過ぎぬのである。彼は偶善的に繼兒を愛するが如く見せかければならぬ。然らざれば世間は忽ち彼を悪人の如くに嘲けるのである。噫彼の憐むべき境遇は終に彼をして殘酷なる人と化せしむるのである

吾人は子女をして繼母と同棲せしむることに反對する。若し子女を親戚に托し若くは祖父母の手に托するの途あらば、先づ彼等を處分したる後再婚するは其弊害比較的に少いかも知れぬ。人は各自の幸福を謀る權利を有すれども、一たび子女を有するに至れば自己てふもの、半分は其子女の身に移りたるものと考へればならぬ。子女は我の相續者である。故に彼等の幸福を謀るは即ち間接に我の幸福を謀るに外ならぬ。子女は進歩しつゝあるに反し、我は漸く老朽の域に近づかんとして居る。故に子女を敎育して我以上の者となすは是れ自己向上心の發現であつて、併せて社會進歩の爲に貢獻する所以である。斯く考へ來れば再婚者は獨り己の便利といふよりも、寧ろ子女の幸福てふことに思ひ及ぼされればならぬ。數人の子女を有する人が妻を失ふたる場合に先づ考ふることは如何にして子女の敎育をなさんかといふことである。彼は途方に暮れたる末終に人の勸を受けて再婚するのである。然れども吾人は彼が再婚する前に先づ種々なる考案を立てゝ子女の利益を謀らんことを望む。彼には子女を托すべき親戚はなきか、友人はなきか、篤志家はなきか。或は自宅に家庭敎師の如き信用すべき婦人を招きて子女を托するの途はなきか。若し繼母と子女を同棲せしむることの甚だ不自然なるを知らばこれを避くるの途は種々あるべしと思ふ。吾人は婦人をして繼母の位置に、子女をして繼兒の位置に立たしむるに忍びない

夫を失へる妻、若くは妻を失へる夫にして飽くまでも子女の幸福を慮り

幾多の不便利と困難あるに拘はらず、自己の一手にてこれを教育し、嘗て彼等を繼父若くは繼母てふ不自然なる庇護者の下に置くことなくば、子女は生長の後如何に其恩義に感ずるであらうか。再婚したる父や母か幾多の侮蔑を以て子女に待たるゝに反し、彼等は終生慈愛ある親として其子に敬愛せらるゝであらふ

門戸開放の襟度

『太陽、勃興國民の本領の一節』

早川千吉郎氏

戰勝國民の最も戒むべきは、盖し其捷利に誇り、所謂國民的高慢(プライド)の、動もすれば極端に走らんとするを 是也。偉大なる抱負は、須臾も遺忘ある可らず。然れども勝に馴れて倨傲他を蔑如する如きは、斷じて大國民の事にあらず。露國と戰端を啓くに至りし、當初の大精神が、英米其他の先進國と共に、該地域の門戸開放を斷行し、由て以て極東貿易の繁榮を計り、世界と共に其福利を增進せんとするに在りし如く、戰勝相踵ぐの後に於ても、國民は依然として門戸開放の襟度を披き、英米列國と共に相輯穆して、世界の利益を增進するに留意せざる可らず。若し誤まつて戰勝者の權利を楯となし、列國の同情を無視して、占領地域の獨占を敢てし、露國の無謀に倣はんとする如きあらば、是れ寧ろ暴を以て暴に代ゆる者、獨り世界の同情に辜負するの大なるのみならず、其獨力の直ちに經營開發を全うし得ざる、方今の如き實情の下に、有力なる世界の助力者と分離し、自ら求めて孤立の地位に陷るを顧みざる、無謀の輕擧たるに過ぎず。たとひ旅順大連を獨占し、更に烏港を加へて、共に之を我れの所領に屬せしむるも、若し我れに友誼同情を寄せたる、世界有力の助力者と相戮力せず、獨力之が經營を大成し、以て將來に發展すべき極東貿易に對し、設備殆んど遺憾なきを得せしめんとするは、國情の許す限り、何人と雖ども、其甚だ至難の業たるを否定し得ざるべし。凡ての占領地域を開放し、其主要の諸港を自由港となし、英米諸列國と相提携して、之が經營に着手し、以て將來の開發と繁榮とを圖らんは、寔に勃興國民の大襟度に於て、當然出でざるべからざるの道也。

既に列國と共に、世界の福利を增進する、有力の一員として立つ。少なくとも極東の事に關しては、世界何れの邦國と雖ども、最早や我れを度外にして 適當の處辨をなし難し。而して我れも亦、極東の狀態を進め、宇内の大勢に適應せしめて、其施設經營を完うせんには、決して友邦の有力なる援助を度外に措き得ざるべし。我れ列國の度外にし難き地位に立ち、列國亦我れの度外に措き得ざる關係を有す。之に對して胸襟を披き、城府を撤し、肝膽相照らして、相信頼し、相協同し、以て我れの度外にし難き地位と、彼れの度外に指き得ざる關係とを固うす。是れ世界の樂利を增進すべき、共同の目的を到達し、平和、文明に於て、相獎勵し、相補拾するの責任を相頒たんとする、最も正當の進路たらずんばあらず其胸襟を披き、城府を撤して、列國と肝膽相照らすの襟度、玆に姑らく之を名けて門戸開放主義といはん。

大國民たるの襟度としては、獨り新占領地を舉げて、門戸の開放を實行せざる可らざるのみならず、中外に通じ、彼我に亘りて、凡ての方面に、此門戸開放主義を擴充し、以て肝膽相照らすの實を舉げざる可らず。國内に於ける民間諸種の事業の如きも亦、此主義に遵據し、有無相通じ福利相頒つの必要あり。唯夫れ法規の制限あり、爲めに外人をして全く我が臣民と同一の利益を享有せしむるに由なきも、法規の許す範圍に於て、出來得るだけの便益と安固とを外人に與へ、一視同仁、彼我の關隔を撤して、外人が我れに資金を放下するの極めて安全なるを覺えしむる

の必要あり。好し内國に於ては、尙ほ未だ外人に對し、全然此門戶開放主義を實行し得ざるの事情ありとするも、先づ其第一着として、新占領地を開放し、東より西より、南より北より、苟くも善意と友誼とを以て來らん者は、悉く之を包容して剩さず、玆に門戶開放主義を諸般の經營上に實行して、我が資力の足らざる所は、すべて此等の善意と友誼とを有する諸外人の助力に待ち、相戮力して、齊しく開發の任務を盡し、同じく利益の享有に預かり、一意列國と共に世界の福利を增進せんと力むる如き、最も大國民として雅量を示すべき所也。戰勝者の權利としては、各種特別の地位を占め、我が優越なる利權の根據を固うし得れば則ち足る。何んぞ必しも露國と同一の步調に出て、爲めに我が大戰を開始せる當初の大精神を沒却するの愚を學ばんや。戰勝者としての優越なる地位は、戰勝の光榮と共に期せずして、我れの頭上に落ち來らん。凡べて富源の開發に關しては、一切開放して、英米其他友邦の諸外人と共に、之を經營するに若かず。斯くて獨り此等全地域に對し、直ちに開放主義を實行すべきのみならず、諸種の事業、諸般の經營に於ても、亦固より開放主義を實行し、以て諸外國、若くは諸外人との利益關係を密接ならしむるを要す。密接なる利益關係を相結び、以て該地域の經營を俱にする以上は、該地域に關する凡ての危險は、列國の相期せずして、之が防遏に盡力せざるを得ざる所たるべし。是れ實に我が邦の世界に對する地位をして、九鼎大呂よりも重からしむる者にして、又實に列國との友誼を、確乎不拔の地に置かしむる者たり。是の時に當て、若し露國が捲土重來、滿洲を再び奪取せんと試むる如きあるも、世界の貿易に開放せられ、英米諸列國が、既に我れに信賴して、其資本を投下せし以上、彼れ亦此等諸列國に顧慮して、決して猥りに無謀の侵略を再びせざるべし。列國と共に極東の平和を安固に保障し、由て以て露國不測の禍心を禁遏し得るは、寔に門放主義實行の賜たらずんばあらず。此の如くにして善意の諸外人と相提挈し、協同して密接の利益關係を滿洲の諸要地に相結ぶあらば、從來外人と協同して、事業を經理するに慣れざる我が邦人は、漸次に自己從來の誤解を發見し、又外人をして從來我に對せし多少の不安心を除却するを得せしめ、二者翻然として其非を改め、俱に隔意なき握手を試むるに至らん。是の時に及んで、更に開放主義を遍く擴充して、之を我が內國に於ける諸般事業の上に及ぼし、由て以て外資流入の道を疏通し、內外協同して繁榮の利益を鉅大ならしむるあらば、帝國將來の盛運や、殆んど之を測度し得べからざるに至らん。

義勇艦隊建設の要旨

『海事雜報』

抑も本邦の海運事業は、日淸戰役以後頓に長足の進步をなしたりと雖も、最近の調査に依れば、總噸數千噸以上の汽船僅に百九十四艘五十二萬二千八百四十二噸にして、其內遞信省の檢査に依り航海獎勵金下附認許の資格ありと認められたる船舶は四十五艘拾九萬五千四百四十五噸に過ぎず、而かも其多數は一朝事あるの日に當りて軍國の急に適かざる可からざるを以て、貿易、通商、殖民より延て外交に至るまで一大頓挫を生ぜざるを得ず、其影響する所、國力發達の點に於て長く回復す可からざる傷害を蒙るのみならず、上に記す如き僅少の船舶にては軍事輸送すら完全に遂行すること能はざるを慮む。

而して我海軍の現勢力は如何、軍艦不足は官民共に認むる所、之れが擴張を圖るべきは夙に朝野の唱ふる所なるも、新興國の日本は新たに施設經營すべき事業尠からず、爲めに軍艦製造の事は十分に其目的を遂するに至らずして止みしが、日露の事起りて軍艦の不足を感ずること深く、

戰爭の前途を憂ふるものありしも、幸に我が將士の機敏にして勇敢なる毎に攻勢を取りて敵艦隊を長縮せしめ、數回の交戰を經て極東の海上權全く我れに歸したりと雖も、將來の日本は今日の日本にあらず、列國環視の下に行動すべき日本は、之に伴ふべき十二分の覺悟を要す、單に一國の獨立を保持する上より云ふも、東洋の永久的平和を保全する上より云ふも、列强の現勢に鑑みて、最も適當なる方法を擇び、海軍力增進の道を講ぜざる可からず。

盖し海軍の實勢力は商船の増加を待て擴充し、航路の伸張は海軍の補導に依て其効を全うするものなれば、完全なる海事の發達を計らんと欲せば、勢ひ軍艦と商船の駢進を期せざる可からず、而かも我國に於ける刻下の事情は力を双方に專らにすることを容さず、今後の海軍は國民自覺の力と當局者其人を得て大に擴張せらるゝ所あるべしと雖も、尚ほ之を助長し有効ならしむる爲め、戰時補助船舶(義勇艦隊)を建造し、一面海軍力の扶植を圖ると共に、一面商船の不足を補ふて通商貿易の増進を計るは、將來多大の希望を有する我日本が列國の大勢に後れざらんことを期する所以にあらずや。

斯の如きは普通の營利的事業と自ら其選を異にし、平時に於ける海運事業の隆盛と戰時及事變に於ける軍事行動の振作を目的とし、利害の外に超脱し、終始一貫公共的觀念を以て專心之れが經營を計らざる可からず、從つて假裝巡洋艦其他特種の船舶は之を一般普通の營業者に向つて到底其企劃を待つ可きにあらず。國民協力して之を經營するの至當なるを認め、本會自から進んで之が創業の任に當らんとす、然れども其計畫頗る遠大にして、擧國一致の協力を待つにあらざれば、之が成功を期すべからず、冀くは、大八洲の同胞擧つて、吾人の此企劃を助成せられんことを。

富家子弟の學問に就て

『新人』

子弟に學問さすること、第一に子弟に對する義務也、第二には國家に對する義務也。學問の目的は出身出世の方便たるにあらず、一は以て一身の智德を定成し、一は以て國家の文明的發展に貢獻せんが爲めなれば也。子弟の教育問題は單に一身一家の事にあらずして、實に國家社會の文明、其運命の消長に關係せること也。從來富家の子弟が多く學問させられざりし爲に受けし國家の損害は、盖し意想の外に在るものあらむ。

近時世人の眼漸く開け、富家子弟の就學追々に多くなりまさるは、誠に悦ぶべき事なれども、尚甚だ慊らざるものあるは、彼等が學問の方面也彼等の學ぶ所を見るに、商工業等の實利的方面にあらざれば、政治法律等の將來顯榮の地位を志とするものに殆んど限られたる姿也。固より父祖の家業を繼ぎ、遺傳と習慣と便宜とを利用し、且つ已に建てられたる基礎の上に自己の建造物を築かむとするは、決して非難すべきにあらざるのみか、むしろ多くの場合に於て奬勵すべきことに屬す。其職業が子弟の性向希望と合致せる際に於て、特に然りとす。然れども、其子弟の素質、性向、嗜好、希望等をも顧みず、單だ生活上の便宜の爲に、金の取れること、位のよき所のみを擇ばしむるは、啻に其子弟を精神的に殺すものたるのみならず、餘りに國家社會に於ける富者の義務を忘れたるものにあらずや。

人各其特別の職分を有する如く、一の階級もまた其特殊の職分を有す。特殊の職分とは、其特殊の人、もしくは階級にあらざれば出來ざることをいふ也。吾人が富者子弟の學問について望むところは、富者にあらざれば出來ざる、もしくは出來難き方面に向はむこと也。もし富者の子弟

にして貧者同様の道を取り、之れと何等の擇ぶ所なき學問の仕方をなさむには、そが富者の子弟たるの價値何處にかある。贅澤なる修飾をなし贅澤なる金錢を使ふのみが、富者たるの能にはあらざるべし。

今日、高等の教育をうけつゝある子弟の多くが貧なる爲めに、學藝の進まざる、事業の舉らざるもの、試に其二三を數へんか。第一に美術文藝の方面也、第二に專門學術の研究發明也、第三には商工業の獨立經營也、特に其新事業の企劃なり、日進の學術を應用し行く工業の乏しきことなり。

美術文學並に專問學術の研究は、之を國民發展史の上より見るも、生活に於ける餘裕の產物にして、時間と金錢の餘裕を要すること最も多し。生活の顧慮及び、費用の不足は、之れが障碍をなすこと大なるもの。しかして今の事に是れに從ふもの。大抵此二者の爲に苦められつゝあるにあらざるはなく、折角の大才と大望とを生活難の中に老いしむること遺憾の至とはいへ、また巳むをえざる次第といはざるべからず。若し家に餘財あつて十分の學資を供し、參考品の蒐集、書籍の購求等、やゝ意に從ひ、學校を卒うるの後、直に父母を顧み、一身一家の計に迫はるゝ等のことなく、一生の專心の研鑽に委ぬるをうるものをして、同等の天才と志とを以て此方面の事に從はしめたらば、明治の文藝學術界は更らに幾層の進步をなしたらむ。見よ明治の文藝は、商賈文藝なり、官府學術也、月給學問也、教員美術也。人は其然るを罵つて、其然る所以のものを改めんとせず、慨するに堪へむや。吾人は此方面に向つては、尤も貴族子弟の奮勵を望む。由來學藝の事は其性質貴族的のもの也。歐洲に於ても、貴族の子弟多く之れに向ふといふ。もし夫れ我が皇族の御子弟の此處に志さるゝあつて、一般紈袴子弟の模範とならせらるゝこと、今日の武事に於けるが如くならば、戰後日本の光榮に取つて如何ばかりの慶びぞや。吾人國民の切願に堪へざる所也。

或は言はむ、之れを我が今日の富者に求むるは難し、彼等は父兄子弟共に安易柔弱に慣れて、到底其勇氣なしと。嗚呼果して然るか、否吾人は未だ遽にしか信ずる能はず。今日の富者は多く自ら予が要請せる如き境遇をへて其產を造りしもの、今やよし老いたりと雖も、其壯時雄心落々たりし血液は必ずまた其子孫の中に受け繼がれたるものあらむ。而して今や邦家未曾有の大時機に際し、國民の多くは皆其子弟の血を之れが爲に獻ぐ、彼等の父母たるもの豈に其私を没して、戰後に於ける平和的戰場の苦境に其子弟を送り、彼等の子弟たるものまた自ら進んで之れに投ずるの銳と勇とを缺くものならんや。彼等が從來の謬見を破り、爾來富家の子弟をして自主自立自由の活動を遂げしむるの風を造るの機、此際に在り、實に此際に在り。

夫れ與へらるゝこと多ければ、要めらるゝことも亦多し。富者の其富を保つは善く之を用ゐんが爲め也。富者にして善く之を用ゐんか、其國家社會に貢獻する所、貧者に幾層倍せん。高尙なる學藝の研鑽、獨立事業の經營、是れ富家子弟の義務にして、又た特權也。何ぞ此特權を執つて、國家千載の大發展の爲に一大貢獻を爲すことをせざる。

實業教育をして有効ならしむべき方針

『教育實驗界』

現時の實業界の狀態は、實に今日の教育の主意と相容れざるなり、殊にその道德の方面に於て相容れざるなり。學校に於ては、どこまでも教育に關する勅語の主意によりて教育を施す。然るに實業界は道德を歡迎せ



詞藻

霧

繞石選

山鶯の垂れ洩る霧や顔を打つ　初聲

谷紅葉霧立ちこめて瀧の音　同

鳥居入りて霧の奥なる宮居かな　同

山霧や杣が通ひの裏見道　同

夜霧はれて島山に月昇りけり　同

霧ついに芭蕉の雨となりにけり　青龍

山畑や霧收まりて蕎麥の花　同

川尻の霧にジャンクの集ひけり　五還

渡場や霧はれかゝり百舌の聲　同

川尻の一本松や霧はるゝ　黄村

朝霧に繪島も松も墨繪哉　同

川霧や棹さす音の遠ざかる　浦亭

霧はれて武藏野ひろき芒かな　同

朝霧や峠を上る人の聲　名古屋　英子

城見えて霧はれかゝる城下かな　同

選者吟

竹の村鷄鳴いて霧はれぬ

朝霧や谷を眼下の峠茶屋

石山は霧にかくれて瀬田の橋

拾一月分課題　茸狩　十月十八日限

拾二月分課題　蒲團　十一月十八日限

應募俳句は東京本郷區駒込曙町十一番地大谷正信宛發送されたし

歌

尾上柴舟選

前田夕暮

默示錄讀むによろしき草堂のしゞまやぶりて夜がらす啼くも

戀愛はそれ煩悶の化身うつくしき彩衣かつき笑みてよるもの

蟷螂のいかりおそれて稻子まろ紅蓼の實をみつぎにまゐる

古寺の鐘樓に錆びしふる鐘のなかにひそめる汝れが寂寥

いつはりにけがれし魂の現じてはかたちみにくき蛙と化しぬ

草堂の燈ほそうもかゝげては閱くに興あるこほろぎの樂

女性なりさなりやさしき戀に敗れうせし女性の花月見ぐさ

知らずして慕ひしをそれ罪といふやあゝ君とはにとはに人妻

秋姬の吐息さ霧となりしよりさてこそ夕べ野逕は悲しき

猿蟹の爭ふべくもなりにたる背戸の山柿つとにとたまへ（故郷の友に）

○　佐久間霧江

魔のいつはり暗ののろひに敗れてか今宵み空の星また落つる

たかどのに兵を談ずる四十疊大佐のきみのひげましろなる

わがうたは大龍王にさゝげむと潮の鳴門に投げ入れて來し

○　久保田桂湖

身を入れて足ると地の下五分の穴すめば蟲にも歌ある秋や

砲車ひく駒の蹴上ぐる砂けぶり雲とわきたつ眞夏さびはら

○　廣末嘉市

さゝ蟹の糸にふりたる蟬がらに夏いま最終の風ゆるら

吹く

すなはらや駱駝につらき十八里雨よし雲のにしへながるゝ

○ 坂田夕星

うつくしき神旨(みむね)のまゝに吹き榮えて生命(いのち)ほこらぬ花や朝顔

はてしなき廣野のすゑにをゝしくも夏の眞晝を雲の峯たかき

○ 東薫

惜しからぬ命を今にながらへて男の子功なし讃辭に堪へぬ

くちさとく石なげうたむ京童あした御夢に入るはゑありや

河づゝみ柳につゞくわが小村濱はみなみに葦おほきみち

○ 白衣子

弱しとか弱きはおのが性(さが)なるを暗よいざなへ名のなき闘へ

○ 松井孤董

わが戀はふまれて露によみがへる名なし小草の花なきごとし

吹かれては茶毗の煙とともに靡くあゝ黄金雲死の榮(はえ)に似たり

海ゆくに海月は波をはゞからぬなまじゐ人は眼をばもてこし

○ 石黒夕雨

しばらくを小蜂に賜ひし姫神がまひの小鈴がしら藤のふさ

濃き夢の花蕋ましうそと搖りてあさ野の蝶にまた罪得つる

○ 飯田高子

をさなけれど胸にちひさき劍あり見ませ血に飽く魔の誘ふとき

むづかしの我世のさとり今さらや山蔘苦し苦くしてよし

○歌募集

別に課題を置かず寄稿者の意に隨ふ　十月十八日限

名殘の文

血來生

○

名殘の文を書かんとて
臥床に伏して得もたえず
忍ぶとすれど音に出でゝ
寢もせず起きもやらで泣く。
五月は闇き今日ひと夜
涙に曇り面瘦せて
消えも行くべき身の思ひ
長くもがなと誰かいふ。

○

『それ覺えてか此春の
花の紋日を此床で
二人ねざめの小盃
そなた、まア一ッ己一ッ』
樂しきこともありてしが
誓ひしこともありてしが
それは昨日の夢のあと
浮世の波は荒かりき。

○

浮世の波の荒きゆゑ
渡しの舟の破られて
我は東に君西に
花は咲けども鳥鳴けど
人はうたへど樂めど
儚なき幻影われは追ふ
浮世の波の辛うして
我今名殘の文をかく。

○

さらでも弱き我が心
忘れんとして忘られず
君がなげきの噺やとて
幾たび筆は捨てたれど!
今宵ひと夜の緣かと
思へば胸も血も燃えて
只一言をひと目とて
枕を蹴つて起ちしかど!
浮世の義理の辛うして
我れ今名殘の文を書く

（三十七年五月作）

『』中は近松のお嵯峨嘉平次心中よりとる

ざるなり、敢て全く歡迎せざるには非れども、唯之を他に責めて自己は之を拒むのみ、他人には損失を顧みずして道德を守ることを要求すれども、自己に於ては、利益と伴ふ場合に於てのみ、損失を來さゞる範圍に於てのみ德道の流行を許す、即ち多數實業家の第一主義は利益に在りて道德に非ず、道德をば蹂躪して顧ざる場合多くありといへども、利の在るところは、一毫といへども遺すことなし。故に實業界一體の空氣は、利益を伴ふときのみ道德に對して何等の價値を措かず、道德的人物をば融通のきかざる長物として排斥す、是に於てか學校教育は、必然に實業界の空氣と衝突し、全然その効を廢没に歸するの結果に到着せむとす。然れども學校教育は現在目前の奏功を必として、他の歡迎を悅ばむがために、曲げて實業社會の惡風習を採つて之を教育主義とは爲すべからず教育には自ら原理あり、學校には自ら方針あり、學校教育の原理は據らざるべからず、方針は貫かざるべからず、是に於てか學校教育は社會發達の法則に從ひ、將來の理想を實現せむがために、現在におこる多少の矛盾と不便とを忍びて、その旨意を徹するの努力あるを要す。

今の實業界に立ち、積極的にその効力を發揮すべき所以の、實業教育の方針に二あり、一は超越的主義とも評すべく、一は包含的主義とも稱すべきものなり。

實業界の狀態は、既に品格ある教育的人物の、自由なる活動を許さゞるものある以上は、手腕ある新人物の活動の舞臺をば、便利上勢ひ之を我が現在の實業社會の習慣的束縛の及ぶ範圍以外に於て發見せざるべからず。習慣的束縛の及ばざるところは即ち海洋及び外國なり。海洋と外國とは、新教育をうけ、品格才能兼れそなへたる新人物の活動の舞臺として最も望ましき場所なり、以て一は彼の利益第一主義の惡風習より脫して新人物の品格を發達せしむべく、一は以て外に向つて國民活動の地を擴張して、內地に欝屈充満せる腐敗を掃除することを得べく、沈滯せる青年界の刺激劑として、この向外的實業教育より可なるはあらざるべし實業教育は、固より現在社會の實狀に添はざるべからず、實情に添ふといふ以上は、勢ひ歷史的束縛を破らざるを得ず、然れども亦教育は發達なり、教育ある以上は即ち新發達なかるべからず、歷史的習慣と風俗とに反戻するものありとも、新時代に應ずる新事業は、時として缺くに可なることあるなし。今若しこゝに向外的實業教育を行はむか、或は多少實業界の平和を傷くる結果を生ずることあらむ、或は多數の失敗者を出すことあらむ、然れども唯目前の苟合を之れ事とする無主義なる形式的實業教育を以て、自覺なき實業家を製造し、舊慣俗風と、金錢萬能主義との埒内に喰嘔して、濁波の中に一生を腐らせ終らしむるには遙かに勝れり。實業とは勞働と生產とにあることを忘れ。利益の爲めに人生の一切を蹂躙して顧みざる今日の實業界は、正當の意味に於て實業界とはいふべからずして唯我利々々亡者の鬪技場といふべきのみ。新教育をうけたる新人物の活動、いかむぞ彼等に苟合し、彼等に追隨して、その後塵を拜すべけむや、宜しく廣濶なる天地にその新舞臺を開拓すべきなり、向外的實業教育、是に於てか社會道德上の大價値ある教育問題となる。

實業界の現在は、全く實業の主意を誤れるのみならず、實業上の道德は全然頽廢せり、この狀態は果して永く社會に存在せしめて可なる乎。足を濁流に洗ひて衣を淸風に振ひ、俗惡世界を措いて新に活動の舞臺を發見するは、之れ新人物の當にとるべき便利の道なりと雖も、然れども亦その社會に入りて、確然としてその品格を固持し、決然その地步を占めて進動止まず、風を化し、氣を變へ、遂に內部より溫めて以て實業界の空氣を一新するも、之れ亦新人物たる者の、當に負ふて然るべき責任の存する處ならずや。即ち實業界に入りて、模範的實業家たり、模範的勞

動者たる品格を實際活動の上に示し、自家の一身を以て實業界改良の中心材料とするもの之れなり。この事たる極めて困難にして、非常の決心を以て之に向はざるべからざること　猶旅順攻擊の難きが如くならむ、非常なる決心を以て之に向ふも、彼の惡風俗の勢の旺盛なるに厭倒せられて、犧牲となり終る者の多きことも、亦旅順に戰死する者の多きが如くなるべし。是れ實際に於て決して彼の旅順の如く、彼の遼陽の如く、區々たる敵障に非ず、茫漠殆ど攻めがたきの恐なくむばあらざる也。然れども彼の實業界の平和と發達とを害するものは、實に彼の實業家の無品格、無道德に存し、決して技能の未熟拙劣なるによらざること、徵證歷々として近く目前に在り、會社の潰散、銀行の破綻、資産家の倒覆等影響の忽ち該方面に及びて實業界を動搖せしむるものは、皆之れ道德品格の缺乏隋落に源因せざるはなし、智識の方面よりに非ずして、先づ道德方面より實業界を改良するは、之れ豈に實業發達の第一基礎に非ずや是に於てか實業教育の基礎を道德品格の教養に措きて、凡ての艱難に堪へてその道德的活動を遂行する人物を出すこと、之れ今日の大急務といふべき也。

記者一日某知識を訪ふ、曰く、演說說教の聽衆は大別して二種あり、一は小學教師等の如く己が智識を增し修養に資せんが爲めに熱心に傾聽するもの、他は學生の如く面白半分冷かし半分、熟考するなく、行はんと欲せず、只輕々に聽き流すもの、而して數年前迄は後者の聽衆多數を占めたりしが、今日にては前者益々數を增すの傾あり、これ實に喜ぶべき現象にあらずやと



慰安と追福

喜びの外に現はるゝは人の情也、吾人は彼の祝捷行列の如き、たしかに國民が戰捷に狂喜せる至情の溢るゝ一の表現として、之を非難するに忍びざるもの也、大國民の態度にあらずといふ勿れ、情を缺くといふ勿れ、若し消極的に論ずるに至らば吾人は果して何事をか爲すべき、世は擧つて悲觀に陥るべきのみ、利と害との衝突は常に免るべからざる自然の理數なりと知れ

然れども喜びは喜びにして、哀みは哀み也、吾人は此二者を混同して論ずるを欲せず、吾人は或悲哀の事情あるが爲めに、他の側に於ける慶事をも打消す能はざると共に、或慶事を祝する爲めに、或悲哀の事柄を

忘るゝ能はず

即ち國民が戰捷に狂喜し、之を慶賀すると同時に、また斃つて其哀むべき同胞の戰死の爲めに、其憐むべき遺族の爲めに、豈に一掬の涙なきを得んや、子を失ひ、夫に別れ、父を離れ、兄弟を失ひたる遺族なるものは、たとへ皇國の爲めに其尙き義務を竭せりといふを以つて滿足せりとはいへ、たとへ生計の道に差支なしとはいへ、其潸々たる哀涙は、朝に濕ひ、夕べに乾く暇なかるべく、凱歌の聲を聞く毎に、萬歲の叫びを聞く毎に、泣かじといひて眼を拭ふもの、是れ亦人の至情にあらざるなし、而して吾人は之を慰藉すべき義務を有す、否義務といふ既に語弊あり、戰捷に熱狂すると同樣の熱き同情なかるべからず、

然り慰藉せざる可らざる也、而して此國民に代つて之をなすべき任務あるものは誰ぞや、いふまでもなく宗教家之れ也

貧しきものを救ふには金錢を以つてすべし、そは別に其人あり、精神的に彼等を慰むるは宗教家ならざる可らず、單に葬式道具として形式的に之に參加するのみならず、死者の追福を祈る、これ亦其本義也

故に國民が祝捷に熱狂しつゝある裏面に於て、法會、祈禱會を催して戰死者の冥福を祈り、一面に於て其遺族をして慰安を得せしむるに努めんこと、切に吾人が宗教者に向つて望むところ也（血來）

女子敎育の將來

成川生

女子敎育の盛なる、今日の如きは、稀に見る所なり。今や全國各府縣には、必ず高等女學校の設備あるのみならず、其の他に私立の學校もあり、而して東都の如きは、官立諸學校の外に、女子大學、日本女學校等、其の他幾種の學校を見る。轉じて出版界を看るに、女子に關する雜誌書籍續々出版せられて、各相應の讀者を有す。

社會一般より看るも、女子敎育の必要は、彌よ廣く認めらるゝが如く、今日の狀況にては、一人前の婦女としては、高等女學校程度の學力を有せざるべからずと思惟せらるゝ程なり。これを七八年前の狀況と比較すれば、變化の大なるに驚かざるを得ず。

試に高等女學校の發達を看るに左の如し。

年次	校數	敎員數	生徒數
廿七年	一三	一五三	二、〇二六

廿八年	一四	一七三	二、五七五
廿九年	一九	二三七	四、一五二
三十年	二六	三一〇	六、七九九
卅一年	三四	四〇六	八、五八九
卅二年	三七	四五〇	八、八五九
卅三年	五二	六五八	一一、九八四
卅四年	七〇	九五八	一七、五四〇

八ヶ年の間に於いて、校數は五培強、敎員數は七倍餘、生徒數は二倍餘となれり。これ卅四年迄の進步にして、是れより以後今日に至る迄の發達は、此の割合よりも、遙に多かるべきは、最近の經驗に照して明白なり。女子敎育の進步實に盛大ならずや。

外形上の進步、實に斯くの如し。さらば之れに伴ふ內容上の進步ありや否や。女子敎育の實質は、其の外形の發達盛大なるが如く、亦盛大なりや。吾人は此の點に思ひ及ぶと共に、恒に疑惑なき能はず。

予輩をして曰はしむれば、今日の女子敎育は、日本女子の特色を磨滅せしめつゝあると共に、其の精神をも腐敗せしめつゝあり。今其の缺點を大別すれば、(一)智育に偏したると(二)日本固有の婦德を發達せしめざるとこれなり。

智育に偏するは、已むを得ざる結果なり。曾つて男子の敎育に、智識の增進を主としたるが如く、今日女子に向つて、只管智識の蘊蓄を計りつゝあり。これ西洋の智識的進步に一驚を喫したる結果に外ならず。げに七八年前の日本女子と、西洋婦人とを比較すれば、知識上に於いて、多大の差ありしは蔽ふべからざる事實なりき。されば當時の敎育家が、婦女子の知識增進を以つて、焦眉の急と見做したるは、よく時勢に適したりと謂ふべきなり。然るに其の方針は今日にまで傳はりて、たゞ智を增せば可なりと言ふが如き偏狹なる敎育法とはなりぬ。知識の增加、元より可なり。然れども知識のみが、完全なる人間の要素たりとの思想は、誤謬に屬す。これ論ずる迄もなく明かなるべし。

斯くの如く知識の增進を以つて、唯一の目的とせる敎育法は、自ら德育を等閑に附せり。否、これを等閑視したりと謂はむより、寧ろ知識的に道德を說けり。更に別言すれば、道德學を說明して、德性の涵養を忘却したるなり。加之、智育と共に、何時しか西洋流の婦女道德觀の浸入したるを看る。

西洋にて發達せし婦女道德たる、決して惡しきものに非ざるべく、又美なる幾多の方面をも有すべしと雖

も、そは西洋にて發達し、成長したるものなり。これを吾が國に移しても、尙同一の果實を結ぶべきや否やは、充分の研究を經るにあらずんば、遽かに答ふるよ能はざるなり。西洋の土地に生ぜる美しき草花も、日本の土地に植ゑつけては、何等の美香をも放たざる者あるは、世人の知る所なり。西洋婦女道德も亦斯くの如きものあらむ。

日本の婦德の原則は、內助なり。これが皮相を解釋すれば、極めて卑俗なりと雖ども、其の內容を分拆すれば、玆に幾多の崇高なる道德あり。順柔、溫恭、意志不動、沈靜、其の他數へ來れば、なほ多くの美德ありて存す、而して此れ等の德性は、日本の土地に相應して成立したるものなれば、此の點を充分に發達せしむることぞ、敎育家の任務なれ。試に歷史を看よ。維新の事業を會てし諸氏の母は、德川氏時代の敎育を受けたる婦人なり。其の婦人の子等、よく彼の大業を企て得たり。詎ぞ日本婦人固有の美德を無視すべけむや。

日本婦人の內部的活動に代ふるに、西洋の婦女道德を燒き直して、外部的活動を爲さしめむとするは、今の敎育法なり。吾人は必ずしも、社會に立つて、婦女が外部的活動を爲すを非難するものに非ず。然れども斯くの如きは、內部的活動の餘力を以つて、爲すべきものにして、決して婦女が活動の第一目的にあらざるを主張せむと欲す。西洋などはドウでも宜し。我が日本に於いては、婦女は一家の整理を以つて、其の最上目的となすべきなり。其の以外を婦人に望むは誤れり。又現今の婦人の、克く爲し得る所にあらざるなり。看よ、今日幾多の婦人會ありと雖も、其の黑幕內には、必ず男子の補助あるにあらずや。

今の女子敎育法は、智的にして、訓練的ならず。而して、一般婦女子の腦底よりは、着實の理想消ゑ去りて、代るに奇怪なる空想來りぬ。貞操なる文學の威儼は、全く消滅して、たゞ理窟の上の形見を殘すのみなり。

かくて一方には米國の體育主義の流れ來れるありて、道德上の訓練なき若き女子は、是れに浴すべく命令を受く、身體のみ活潑となりて、精神は恒に無氣力ならむとす、而して此の無氣力なる精神（センチメンタリズム）、意志薄弱なる心狀態を襲ふものは、所謂感情主義なり。其の結果とは何ぞや。ヒステリー性の蒼白き婦人なり。

昔日の女子敎育は、精神の健全を第一の目的とし、

今の教育は、身體の健全を其の大目的となす。維新後、西洋風の吹き荒れて、日本女子の理想破れ、さりとて未だ教育法も定められざる時代の婦女が、精神上及び身體上共に何等の訓練をも經ざりしため、心身虚弱となりしを救はむため、體育を奬勵したるは大に可なりと雖も、これが爲に、日本固有の婦女道德を顧ざるは誤謬の大なるもの也。

今回の戰爭と共に、日本婦人の美德は燦として輝けり。感情を支配する心だけの堅實なる意志は、實に本邦婦人の美德なり。この意志や。太古より訓練に訓練を經て、今日に傳はり、殆ど一の本能性となりしものなり。此の本能性は、今回の刺激を受けて、美しき光を放ちぬ。

今日の教育法は、此の長所の發展を顧ざるものなり。世界の大舞臺に出でゝ、赫々たる名聲を揚ぐる我が帝國の臣民は、國民傳來の本能性を發揮すべきなり。徒に海外を模倣して、何もかも西洋々々といふ時節は、遠き過去に屬す。吾人は今回、婦人の美德が、燦爛たる光を放ちたるを機會として、女子教育法に一大改革の行はれむことを希望す。今日のまゝにて行かば、大和民族の長所は、遂に消滅するに至るべし。

戰捷紀念建設の準備

日露の戰役は、世界史上空前の大戰爭たると共に、我が國史上亦空前の大戰役たり。吾れ等は、これが紀念を、万古に遺さゞるべからず。而も大捷の紀念なり。今日より凱旋の紀念設立を説くは、早計なるか如しと雖も、戰役の現狀より推せば、決して然らざるなり。我が軍は連戰連捷、未だ退却を知らず、其の終局の結果や、多言を用ひずして明かなり。

吾れ等は、如何にして終局の大捷を、後世に傳ふべきか。これ日本國民たる者の、今日より考慮すべき問題たりとす。

日清戰爭の紀念は、何處にて認むべき乎、彼の戰や、吾が日本を、世界に紹介したるものなりと雖も、今日一の凱旋門すらなし。日露の戰爭、また斯の如くして終らさらしめず。壯大なる紀念を貽すこと、是れ現代國民の責任なり。

紀念碑が、教育上に多大の効力あるは、喋々するの必要もなく明かなり。日露戰爭の紀念としては、啻に我が帝國が、羽翼を伸張して、世界を震駭せしめ、強大と見做されたる露國に大打擊を加へたるを現すべき

のみならず、正義人道を保護したる壯擧をも傳へざる可らず。約言すれば正義の爲に戰ふ者は、必ず勝つとの敎訓を與ふる程の紀念物こそ、吾人の望む所なれ。

ひとり美術家と言はず、國民のすべては、今日より、如何なる紀念物を建設すべきかを考究せざるべからず。

戰時雜感

▲横川氏の最後の書簡、何ぞ夫れ凄然たる。死するの前に當りてペンを取り、筆蹟毫も紊れざるは、眞に志士なるかな。

▲其の末段に遺族に五百圓を贈ると書したるを抹殺して、改めて魯國赤十字社に寄附すと書したるは、日本氣質の、最も美しく發現せられたるものならずや。

▲あれが西洋人ならば、反對に爲すべし。即ち赤十字に寄附すと書きて是れを抹殺し、更めて遺族に送ると大書すべし。

▲日本人は、最後に至るまでも、理の嚮ふ所に從ふを特色し、西洋人は個人としての情熱に從ふを當り前とす。此の兩種行爲に向つては、遽に善惡の評を下すこと勿れ。

▲最後の一刹那、遺族を思ふは個人としての情なり。されど個人としては、ロスキーに敵意なきを明にせむか爲め、遺族への形見を魯國に贈らむと欲したる横川氏の胸中、ハイカラ流の窺ひ知る所に非ざるなり。

▲帝國海事協會の發起にて、假裝巡洋艦五六千噸以上のもの十餘隻を造りて、義勇艦隊を組織せむとす。國民たるもの、大に奮勵して、一日も早く此を海上に游弋せしめざるべからず。

▲元來我が國の、軍艦不足なるは、戰術に暗き吾れ等とても知る所なり。されば義勇艦隊の如きは、餘程以前より建造組織せられて、今日に備へざるべからざりしに、其事なくして、今日漸く其の必要の唱道せらるゝを見たり。盜賊捕へて繩糾ふに異らねど、機會は最も適せり。今日これを企圖せずんば、再び其の機を得ること難からむ。

▲魯國にては十五隻の義勇艦隊あり。彼の國にてすら此の數の船艦あり。吾が邦の如く、四方海に面する國土にては、少くとも二十隻以上の此種艦隊を要す。

▲義勇艦隊建造のため、義捐金をなす人甚だ多しとは人意を強うするに足る。四千五百万餘の同胞が、一人一錢づゝ出しても、四十五万餘圓を積むべし。一人

前平均三十錢位も出せば、此の計畫の豫定額千五百萬圓を積み得べし。

▲魯國農民の或る者は、日本の何物たるを知らず。日魯戰役とは、如何なる原因によりて開かれたるかも知らず、又今回の戰爭は魯人と淸人との間に起れりと云ひ、而して日本人とは。人間にあらで、一種有害なる蟲類にして、是れが附着すれば生命も危しと信ず。

▲彼れ等の無智、何ぞ甚しき。吾が國にては、いかに邊陬の地に在る者と雖も、魯人を蟲類なりと思ふはなく、又此回の戰爭が如何なる原因ありて起れるかを、朧氣ながらも辨へざるは無し。彼れの軍、戰へば必ず敗れ、吾が軍の必ず勝つは、國民の知識上に差異あればなり。

▲愛國婦人會の京都支部が、十數名の醜業婦に入會を許し、彼れ等は盛裝して、停車場に出征軍人の見送りに加はらしめしは、啻に全會の名譽を傷くるのみならず、日本婦人の面目を傷けたるものなりとて、攻撃の聲を放つ者多し。

▲さりとは餘りに狹き量見ならずや。藝娼妓たりとも、國恩に感じて、幾分たりとも報恩の志を遂げむとて、入會を申込まば、愛國婦人會としては、之れを許すべきにあらずや。

▲藝妓、娼妓たるが故に、これを許すべからずと言はゞ、此の外に入會を拒絕すべきもの亦多かるべし。藝妓は、藝妓といふ看板を掛けて、入會を望まゞ、これを拒絕すべし。されど單に日本の一婦人として來りたる場合には、いかで是を拒み得べき。

▲かゝる事に議論するは無益なり。たゞ當局者が、入會者の心中を察して、眞に篤志あらば、これを許すべし。然らずんば、これ該會の趣旨に戻るものなり。又若し彼れ等が、入會するを以つて、一種の商略とする心ならば、斷然これを拒絕すべし。其の邊に注意するこそ當事者の責任なれ。

▲ひとり藝娼妓に對するのみならず、一般の入會者に對して、其の動機を觀察するは、當局者の任務なり。世には自己の利便、名譽などの爲に、慈善的、博愛的行爲に出づるもの、決して尠しとせざるなり。

▲畢竟ずるに動機の問題なり。たとひ娼妓なりとも、眞に博愛的、同情的精神に驅られたりとすれば、其の行爲は大に賞すべきものならずや。

▲いかに墮落したる人間なりとも、時には道德の光を放つ者なり。その光を認めて、彼れを賞するは、こ

れ其の人を救ふの第一階段なりとす。徒らに彼れを拒絕して、其の善行をも認めざるは、彼れをして、益す墮落せしむるに異らず。善は善として賞すべく、惡は惡として咎むべし。

文藝時觀

作中の田舍言葉

和軒

（一）

維新の革新が、社會の組織を根本より轉覆せる爲めに、兵子帶の書生が大臣となり、社杯を附けた旗本が車夫に零落する世の中なれば、薩長土肥が權勢を得ると同時に、薩長土肥語が流行し、次いては各地方語も流行せり。日本橋京橋などの目拔の場所に、山出の田紳が金の威光を示し、老舖の店先がハイカラ式の商店と豹變するもあれば、田舍言葉の侵入都化は免れ難き自然の趨勢なり。

殊に小說家が、德川時代と異りて、地方出身者多き今日、地方語が一瀉千里の勢もて、都會に入り、東京語と對抗するは、止み難き事情なるが上に、都門に遊學する男女の學生、並に其の地方的寄宿舍が、地方語の媒介者並に出張店なる有樣なれば、都門以外に地方語を驅逐せんこと容易の業にあらじ、小石川區には、熊本の東肥義塾、青森の修養社、福井の輔仁會。佐賀の同志社を始め、三十有餘の鄕友會又は寄宿舍あり。此の他本鄕四谷神田赤坂麻布邊のを加ふれば、地方語の出張店は頗る優勢なり。或點に於いて、山の手の幾分——官吏、書生——は地方化しつゝあるの觀あり。

（二）

かゝる形勢なるを以て、或る江戶兒は奮慨の餘り、蘆花の作をば、非美術的なりとし、さて、小說語の條件を說明すらく

（一）凡べての美術は快感を與ふる者ならざるべからず

（二）對話も聽覺に快よきものならざるべからず

（三）田舍言葉は濁音鼻音怪音ありて一般の讀者に不快感を與ふ

（四）故に田舍言葉は作中に用ふべからず

かくて論者は、紅葉の金色夜叉に及び、熱海海岸の絕景に於いて、紅葉一流の流暢なる東京式快辯を以て、

談話せしめたればこそ、熱海海岸の場が引立つなれ。田舍の若衆と娘とが、地方的怪語を以て談話しては、さしもの美景も活如たざるべしと。

(三)

論者の言の如くんば、小說又は戯曲中の世話物の語、東京語に限られ、地方には小說も戯曲もなく、從つて地方の人生は描寫されぬことゝなるべし。そも〳〵作家は人生を再現する者なれど、あらゆる人生を描寫し難し、されば東京式の作家の外に、地方式の作家ある必ずしも惡しからず。沙翁は人生の再現を、極めて巧妙に寫し出せる者なれども、近頃トルストイ翁は、沙翁が人物の上流に偏して、下等社會を描寫せざるを非難せりと云ふ。されば地方的作家ありて、田園の趣味を傳ふる必ずしもあしからず。

(四)

對話は聽覺に快よき者ならざるべからずと。此の言一理あり。ヒとシとを混合して誤用する東京語は、必ずしも快感を與へねば、地方語にも快感を與ふるあり。されば耳ざはりにならぬ地方語、美化詩化され得る地方語ならば、此れを作中に使用する、必ずしも惡しからず。第一主人公を地方人士に取りたる時は、自然に寫實の必要上、特別なる地方語を使用する事あらむ。一般の讀者は理會せぬ故、否少數の其の地方人士の外、地方的趣味を喚起せざるを以て、一般には不得策なれども、全局又は一局部の彩色調子を破壞せざる限りは、ローカル　カラリングを帶ばしむる爲めに、地方的の使用は止むを得ざるべし。トマス、ハーデーは、英文壇の大家なり。其の作テス(Tess of the D'urbervilles)は、五十年來の傑作と稱せらる。而してウエッセックス地方に舞台を取り、田園の風俗を描きたり。されば所々に俗語を點出せるも、其の主人公たるテスが、ロンドン語と地方語とを能くすること、なほ今日の青年學生紳士等が、其の地方語と東京語とを能くする如くなり。地方語の對話必ずしも惡からず、只其の作家たる者は、一般讀者の語學の程度、又は全篇(局部)の調子を考へて、美術品たる調和の美を破らざれば可なり。

(五)

落語家等の語る地方語は、何處の地方とも限らず。東北、中國、京阪、九州、關東位な極大ざつぱな地方語なれば、此は一面より云ふ時は、洗錬され美化されたる地方語ならめど、例へば會津人、房州人、熊本人と銘を打つたる人物は、會房熊の言語もて談話せしめ

ざる時は、其れにて場面の調和を破らざるか否かと云ふは問題なり。東京人の如く、地方語の智識なき者は、各種の言語を同視せんも、其の地方の人士にして、此れを讀まば直ちに感想を打破せらるゝ場所なしと云ふべからず。出來得べくんば、各地方語の中より、美化され得る者を撰擇して使用するに在り。政治上に於いては、江戸幕府は既に倒れたり。言語上に於いて、東京語が如何なる度まで變化するかは問題なり。所謂標準語の確定せざる今日、全然地方語を發止せんとするは、江戸兒の負惜なるべし。

（六）

此の地方語は、滑稽物に使用する場合は、前と反對に十充の價値あるを證明するを得べし。田夫野人、赤ゲットは、其の野卑、短見なる其の人自身滑稽なり。膝栗毛を始め、低級の滑稽物に、田舍者出て、田舍言葉の行はるゝも、其處に低級の文學的價値あればなり。

オネール孃

團菊左相次いて沒して、梨園の秋は一しほ物寂しく、桐の一葉に天下の秋を春めかさんとせる我當はあれど、伊井の外には、さしたる天才も壯士芝居に出て來ぬ折柄、吾人は海をへだてて一女優の出現を聞く。オネール（Miss. O'neil） 孃即ち是なり。

孃はサンフランシスコに生れたり。孃は全然米人の血統を傳へたり。父は「新英」の人、母は「處女國（ワルジニア）」の人なり。クリチツクの記者曰はく。

孃や人と爲り傾國の美にして、其の顏や立派に、其の丈はすらりとして高く。擧止閑雅にして美人の見本たるべしと。トランスクレプトに云ふ。「悲劇俳優」として英語國に匹敵なしと。孃はサンフランシスコ、ホノルル、エジプト等にて成功し、今やボストンに乘込み、ボストン人士はオネール狂となりつつありと。吾人はクリチツクに挿入せる圖中の、マグタに扮せる孃を見て、ブース以來の一人と呼ばれたる、故なきにあらずと思へり。

坪内博士の樂劇論

坪内博士は、近頃「浦嶋」を脫稿し、早稻田大學より出版せらるゝ由なるが、「浦嶋」は我が固有の歌舞伎の改善を目的として作爲せられたり。博士が樂劇論は左の如し。

國劇改善の方針は日本演劇固有の特質を發揮するに

あり。國劇改善の目的にて外國劇を輸入し之れを模倣し拆衷し翻案し或は日本古來の演劇の型を研究するは要するに參考の料たるに止まる者なり。さらば國劇固有の特質とは何ぞと云へば其の樂劇式なる事なり。

とて博士は國劇固有の美を以て樂劇に在りと爲し、さて其の樂劇と云へるを解して、「此處に樂劇式と云ふは、嚴密なる意味にて云ふ樂劇にあらず、兎に角樂劇に近き形式を有するが我が國劇固有の長所なるべし」と論じ、更に歌舞伎衰微の理由に及びて

今日の歌舞伎が何故に衰微したりやと云ふに其原因は此の樂劇の要素と寫實劇の要素との調和せざる所にあるなり。蓋し今日の國劇には其の特色なる樂劇の要素の外に、寫實劇の要素も多く混合せりかく寫實劇の混じれるは樂劇の要素たる音曲が時勢に後れたるが爲なり、

と云へり。博士は例證していふ

例へば竹本の淨瑠璃の如き舊日本の人を感動せしめしならんも今日にありては最早粗笨なるを免れず。此れと同じくツケ鳴物囃子合方幕明の鳴物大薩摩等亦然り。此の他白の七五調めき科の踊めくは國劇の特質が樂劇たるがためなるが若し今後日本の演劇を寫實劇たらしめんとせば勢ひ此等の樂劇の分子を除かざるべからず。

「されど余は樂劇式を以て國劇固有の長所として之れを發揮せしめんと欲す」とて、其の新作「浦嶋」の態度を示し。而して樂劇を分つて竹本劇（竹本の淨瑠璃を土臺としたる普通の狂言）振事劇（長唄淸元などを用ふる所作の狂言）ありと云ひ

此の二者の中何れか尤も將來の樂劇たるに適するかと云ふに竹本劇は餘り卑俗なるを以て振事劇を土臺とする

よしを說き進んで其の振事劇にも種々あり、常磐津ては「關戶」の如き「相馬」の如き、長唄にては「勸進帳」の如き「紅葉狩」の如き者の土臺と爲るべきを陳べ、國樂固有の通弊を數へたり。

（一）敍事詩脈の存在、例へば淨瑠璃の本文に「こそ哀れなり」など作者自身の感懷を述ふる事。

（二）脚色の支離滅裂。挿話の上に又挿話を加へ一篇の括りなき事

（三）然らざれば構想卑淺。曲調陋俗、用辭浮靡もしくは野褻、單に荒唐無稽なるか、又は草双紙ぶ

りに變化を尙び隱微の意味なし

（四）樂曲稚拙ならざれば單純。粗笨ならざれば蕪雜、全篇を通して常磐津式、又は長唄式にて一篇の中に常磐津長唄の長所を調和せるもの稀なり。而して男女情感の別なく性格の區別もなし。

（五）曲節の變轉の劇詩的ならざること、即ち曲節の變轉はありても其は人物の性格感情等によらで一に樂手の都合による。

（六）据も亦見た眼とし仕形噺又は判じ物に類する事。例へばお姬樣て船漕ぐ眞似をするなど其の人物より云へば不自然なり。要するに踊の爲の踊にして詩の爲の踊にあらず

（七）扮裝不自然にして餘りに技巧的又グロテ甚しきはヒヂヤス、一見悚然然らずんば佞靡。

（八）曲人樂人と樂人と舞臺面の關係（例へば黑ん坊が平氣で舞臺に現はれて居る類の弊）幻影誘記法の上より見たる舞臺――花道の利害――廻り舞臺――道具幕――引幕と純帳――幕明の鳴物――拍子木――前曲又は緖曲の必要――

等の缺點ありとし、此れを改善するが國劇の改善なりとて、新作「浦嶋」は萬葉は勿論德川時代の謠詞をも取入れ、ワグネル、ハウプトマン其他の詩人の作をも參照せる三幕物なりと云ふ。我が梨園にはオネール女史の如き新俳優なしとも、此の一篇の新作によりて、活氣を呈し來るべし。

文壇漫言

癸生

○秋となつた。文壇はそも如何なる錦で飾られる事であらう。國と國との戰は今酣で、其の滿州の野で流される國民の血汐は、我國の文壇に如何なる印象を殘すであらうとは、荷も文藝に携はつて居る者の等しく注意して怠らぬ所であるが、今迄の所では格別大した製作が此の間から起つて來ぬ。文藝家としてよりも、國民として其の頭腦を種々壓迫せられて、假想感よりも實感の方を强く刺激せらるゝ結果であらうか。其れよりも時日が未だ文藝家の頭腦に戰爭に就ての藝術の實を結ばさすに短いと云ふ方が適當であらうと思ふ。

文藝家に取つては苦しい夏が過ぎて、今が盛んに製作して居る時だらうと思はるゝ。世に顯はされるのは恐らく來る年の春であらう。去月の文壇は然う云ふ調子で實に寂しいものであつた。單行本として顯はれたのはウエルテルの譯位ゐ。此の譯に就いては種々世評があつたが、自分は忠實な譯品の一つと云つて置かう。ある新聞の批評家は此の書に就いて然う云ふ事を云つた。

ゲーテの若い時の傑作で、獨逸の國では之を讀んだ若い男女が情死したり、自殺したりしたもんだから、讀まん先は甚麽恐ろしいものかしらと思つて居たが、這麽惡譯では那麽風俗壞亂的のものでないから、

今のハイカラ男や海老茶式部が讀んでも格別害にもなるまい。此の批評からは二つの重大な國民性が學ばれる。其れは日本では決して感情的の作物は解せられぬ事、其れから獨逸ではあれ程青年の心を動かしたものを、日本では然うでないとすれば、獨逸國民と日本國民の性情の差違の程も解る。此の新聞紙の批評が正當であるか否やは別問題として、此ウエルテルが解せられない國民は、悲しむ可き國民であると思ふ。罵りたいのは緻密ならざる頭腦に、粗雜な感情である。

○新小說に顯はれた宙外の門田の作は思ひざめを顯はした當年の宙外が想出される。緻密な感情を細かに描き出して來て、然して讀書に少しも倦ましめない手腕。自分は其の前篇を讀まなかつたので、總ての結構に就いて評を下す事が出來ないが、女主人公咲子は、其の昔し宙外が描いた女主人公よりもひどく理性が加味して來た。之れ作者が世故を經て來た影響とでも云て置かう。一体に宙外の作に前後通じて顯はれるのは、理性の影で、理性と感情との衝突の苦悶の果が、終には老人がくど〳〵しく口小言を云ふ樣な態に陥る事がある。結局說教風に陥るのである。然して感情の惱み――語弊があるが、悲哀と云ふ方面に就いて缺けて居る。て宙外の作を讀て尤もだなあとの歸結を得るが。何と云つていゝか、まあ藝術的快感とでも云つて置かう、其れが缺けて居る。此の門田の里の主人公咲子にしても然うで、奈何も說理に陥入つて居る。何とか一工夫して貰いたい。

○文藝倶樂部に顯はれた鏡花の柳小島。依然として鏡花の作品である。定めし其處等の生若い文學者。詩と云ふ事を解した樣な顏をしたがる書生には歡迎せられた事であらう。日本の羅曼派の唯一の人、美しい景色の中に美しい心を抱いた美しい人。之が鏡花の作を通じての全体の生命である。性格が奈何の、運命が奈何のと此處で云ふのは野暮の骨頂だ。

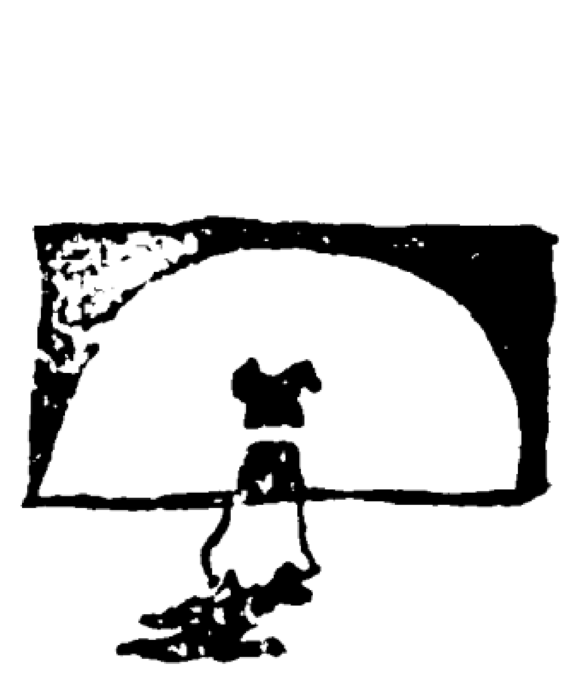
譽めたいのは其の文章で、自分に云はすれば思想は零だ。此の作家も日本在來の作家と同じく文章で世に殘る人であらう。若し進步と云ふものが此の上鏡花にあるものとすれば、其れは文章の上のみで、此の單調な傾向を續けて往く果は、神仙談や迷信談と情死せねばならぬ樣にならないであらうか、鏡花の才を惜む余りに恁うも云ひたくなる。

○前號の大陽の文藝時評の中に桂月は恁う云ふ事を云づて居る。作家の文學談程氣障なものはないと。すると自分の知つて居るある作家は恁う云ふ事を云つた、作家ならぬ者の批評程見當違ひのものは無いと。何も之が有難い言葉ではないが、確に半面の眞理はあると思ふ。角帽を着て學校を卒業し、西洋の小說の二三册も讀むともう御大層な小說批評家だ。やれゲーテが恁うの。ツルゲネーフが恁うのと、引張り出される歐羅巴の大家も氣の毒なものだが、聞かされたる作家こそ大迷惑だ。パウル、、ハイゼ――學士達は恁う吼るものださうな――ハプトマン、ズーダーマンなどゝいやはや飛んだ事が流行り出して來たものだ。運歷ものよりも、自分は作に對する苦心や、世の傾向やらを知つて云ふ作家の批評や文學談が突飛でない丈けでも要を得たものであらうと思ふ。

○近頃新詩社の連中が劇改良の目的で十一月三日を期して劇を興行するさうだ。いよ〳〵恐ろしい世の中になつて來た。一体甚麼事をするのだらうと知つた人に聞いたらマクベスを遣るとの事。熱病に取付かれたのでなからうかと聞いたら、然うぢやないさうな。一味徒黨の連判狀も取つて名けて劇の決死隊と云つて居ると之も其の人が云つた。單に改良と云ふが改良と云ふものに種々ある。之は惡い方に改良する心算であらう。過渡の時代〳〵と云つて然う無暗に暴れられて貰つては傍で迷惑する。新詩社の連中の事だから迷惑するなら傍へ退いて居よと云ふだらうが、何しろ近所迷惑の事が持上つたものだ。

○劇と云へは之も先月の大陽に旅順と云ふ小川煙村の作が掲載せられた。此の作家は過ぐる年讀賣の懸賞を取つてから名を出したのだが、其の懸賞當撰の作はゾラの翻案と云つてもいゝ位だ。其れから新聲社で發行した王羲民羲之は御自分から翻案としたからよかつたが此の旅順は何とも書いてないが其の主人公はユーゴーの九十三年の中にある人物酷似だ、いくら名譽心が高くても、氣焔が高くても、作家である以上は自己の創作を出して貰いたい。殊に其の會話が、何とか今少し爲て欲しい。之ては奈何にもお話にならない。

○時代思潮てワグナーを擔上げてローマンチズマを切に叫んで居るに對して隨分冷評的な語を放つ人がある。そんなに叫ぶよりは先づ創作を示せと云ふのてある。一應は尤もの樣に聞えるが、創作は團子や牡丹餅ぢやない。然う心易う出來るものか。我國て此の聲が盛んになつて來た丈けても、絕大な進步と云はねばならぬ。此の叫聲が今の若い作家の心を刺激して今後五年十年の後に少しても其の實か結べたならば、其れて此の派の事業は効を奏したものてある。此の派に對して自分の云ひたいのは、日本にも日本風のローマンチズムはある。其れと時代思潮て稱へるローマンチズムとの差異を先づ示して貰らひたい。羅曼派と云ふ言葉は舶來語てあるから、時代思潮一派ては、日本に過去の文壇には羅曼派は全然無いと云ふかも知れないが、自分は日本に羅曼派があると假定して慫く論ずるのてある。て、嘲風君一派は、ローマンチズマは獨逸風のものて無ければならぬ。ワグナアの樣なものを全然に根ざすと云ふのか、日本の在來のものをも容れて漸次助長さして行かうと心懸けて居るのか。空論ならば兎に角、これを日本の文壇に實行させやうと思ふなら其の邊の處を判然と聞かして貰ひたい。若し日本在來の羅曼風の作のあるのを認めて、助長さして行かうと思ふならもつと手段を取つて欲しい。



氣障錄

漫評

半可通

▲國民新聞の門外漢曰く、「日露の戰爭に最も熱心なるは、中年以上の人に多し。我が最新文明の教育を受け、且つ受けつゝある青年者流には、生嚙りのトルストイ論を唱へ、頻りに戰爭を冷評するものすらなきにあらず。人心の同じからざる面の如し。吾人は强いて彼等が戰爭に熱中せんとを望む能はずと雖も。今の國家の生存を賭するの一時に於て、我が同胞が肉を劈き血を迸らしつゝあるの一時に於て、仙人を氣取り、高人を氣取り、大先生を氣取り、漫りに此の大機を弄羅冷嘲の間に看過するが如きは、不親切と云ふ可し、又意氣地なしと云ふ可し。非戰論尙ほ恕す可し、其の空吹く風に看過する無頓着者流に至りては、恕する所以を知らず。』と。然り予は滿腔の同意を表するに躊躇せず。今日に於て戰爭を忌むと稱し、冷淡を裝うものは新らしき文藝及び哲學を學べる者流に最も多く之れを見る。露西亞人、野蠻未開人、猛獸毒蛇の類にあら

ざるよりは人誰れか敢て戰爭を好むものあらん。文明人とは決して文藝哲學を研究せる腐儒迂生に限りて專有せらるゝ名稱にあらざるなり。今日に當り「エヘン私は戰爭といふものは全體嫌ひなのです。」などゝ揚言するは實に氣障なり。社會各方面の要路に膺たれる中年以上の人が今日所謂文藝哲學の意味を解する頭腦に乏しきは慨して又慨すべきなり。然れども彼等が文藝哲學の趣味なきを慨するに先んじて文藝哲學を口にする若輩こそ一層廣濶なる人生活動の眞義を了解せざるべからざるなり。ホンの道樂に文藝哲學を弄ぶものならば、遊戲に耽りつゝ働げるものを卑む勿れ。また眞面目に人世社會の一部面として文藝哲學を修むるものならば彼等が氣取りて口にするが如きこと言へた義理にあらず。父兄から學資の給與にあづかりながら、爺見が吝だとか道理が分らぬとか贅澤をいふと一般なり。文藝哲學〳〵と有難き名號を百万遍唱ふるとても遼陽旅順の劍電彈雨に於て抑も何爲るものぞ。佛蘭西の大改革がルーソーの空想に依り成されたりとのみいふ勿れ人世は文藝哲學の士が解するよりも今少し事實なり。滿洲の平野に於て卒萬人の大鬪爭は是れ吾人が眼前に目撃する現代の事實にあらずや文藝哲學に依りて眞に人生を研究せんとの殊勝なる心掛けあるものは、此の鐵血事件こそ好個の修練を提供せずや。文藝哲學の士が東京に在りて閑氣極まる口舌に耽れる間に、砲火は事實に開き、碧血は事實に流れ、腹は事實に貫き、膓は事實に露出せるにあらずや。試みに次の文章を讀め、

「豫備陸軍步兵一等卒筒井粂藏氏は八月廿四日午前五時〇〇〇山に突擊したる際敵の機關砲の爲め我軍多大の損傷を受けたる中に氏も亦壘壘附近の鐵條網に近き所に於て左下腿に折骨を無れたる貫通銃創を受け身體の自由を失ひ自ら綳帶を施しつゝ我砲彈の爆發にて生じたる凹窩中に這ひ込み死を裝ひつゝあること兩三日に及びしが饑渴に堪へずして地隙に出て血交りの水を飮み辛うじて渴を醫し露命を繋ぎ居たるが四日目の夜に及び多數の露兵來りて僅かに動き居る我が負傷兵に對し無殘にも手當り次第に或は刺し或は蹴り或は射擊して虐殺を極めたり此際筒井一等卒は大の字形となり瞑目して呼吸を忍びつゝありしに六名の露兵其前に來り軍服の衣兜を探りたる末頭部を射擊し尙ほ右胸部を銃床にて强打し二三回蹴りたる後立去れり其後衣兜を撿したるに囊に入れありたる砲彈切手及び若干の金子は全く奪ひ去られたり爾後二日間雨を冒して忍び出て高粱畑に起臥せしが人事不省にて一兩日間の事も記憶せざりしが其後不圖我兵の聲を聞き付け眼を開けば眼前に本野大隊長來り汝を救ふべしとの事を告げられ即ち〇〇聯隊〇〇中隊河田安次郎氏の介抱を受け入院するに至りしと云ふ（時事新報）

其の他之れに類する慘話殆ど枚擧するに遑あらず。人各職分あり、文藝哲學の士が必ずしも銃劍の事に從は

ざるべからざるの理由はなけれども、彼等が壯丁の身を持ちながら幸にして國家經營上の寬典に浴し、兵役の義務を免除せられたるをも顧みず。如何に學問は獨立なればとて「我は戰爭といふものは嫌ひなのです」。などゝ澄さるべきにはあららざるなり。斯る奴輩は何の情容赦もあるべきにあらず、ドシ／＼國家の權力を行使して前に揭げたる筒井一等卒などの嘗めつゝある境遇に投入すべし。國家が平生社會の他の團隊と一樣に、文藝哲學の迂生を養ひつゝあるは、今日の如き場合に際して、「私は戰爭といふものは嫌ひなのです」などゝ空吹く風にオツな事を言うて貰はんが爲にあらず。必ずしも戰爭を謳歌せよ、とにはあらざるべけれども、彼等は今少し其の浮氣を愼まざるべからず、今少し質實ならざるべからず。

▲我國が軍事上に於て、今や世界の面前に着々成功の實を證しつゝあるに當り、文藝哲學の士は、世人兵馬の事に心を奪はれ、文明の裝飾たる自家の領分が閑却されたるを怨み、自家が最近の成功の人に知られざるを歎ち顏なるものあれども、是れ頗る愚なる業なり。文藝哲學は未だ實際に於て軍事の如く進歩改良せざるなり。何が故に然る、問ふまでもなし、軍事上には嚴重なる教育を施せばなり。文藝哲學には嚴重なる教育を施さゞればなり。現今各種官立學校の教育を概觀するに、軍事教育と文藝哲學の教育とは峻嚴寬裕との兩極端を示せるが如し。是れ兩者の性質上止むを得ざるに依るならんとはいへども、文藝哲學科の教育に膺る人は一層の檢束を與へんことを要す、鞭を用意せんことを要す。市井に在る演藝の師匠が子弟を教育する方法を見よ。まだ乳を飮む頃よりお守に負はれて師匠の許に通ひ、やう／＼三味線に縋付いて撥を執る手さへ覺束なきより育てあげて二十年三十年、一かどの名人達者といはるゝに至つても尙ほ其處が惡いの、何處が何うのと粗(あら)を見出されてビシ／＼叱付けらるゝの習。之れに比べてはさても／＼新らしき文藝哲學の士が閑氣さよ、讀書と議論とはなか／＼に人に後れねど、其のいふことの迂遠空疎なる、これでは實行界の實務に膺れる人を如何てかは動かし得んや。文藝哲學の士のいふことは疎にして容積のみ徒に大なり。須らく滿洲の野に放つて露軍の餌に供し、事實彼等の血を絞り、したゝか血交りの濁り水を呑まし、更に之れに向つて鐵鎚を加へ、其の頭腦に緊縮と堅緻とを增さゞるべからず。

秋風白露

▲坪内氏の「浦島」は三幕物であるが、其第二幕の終りで種々の魚類に扮した二十八人の踊子が四人一組のが都合七組、七色に配した衣裳で舞臺の左右から登場し龍宮の乙姫の住居なる圓殿を踊り廻ること五度其の中途に「親は子と云うて尋ねもすれど親を尋ぬる子は稀な」と云ふ船唄が聞える何時とはなしに浦島の姥と尉との姿が幻の如く此の踊子の群中に現はれると浦島は此れを瞥見して「母御前か、父、、、」と云つて階段から轉げ落る。此れが見物を泣かせる山らしい。

▲マックスミウラーの未亡人は、良人の傳記を編纂中で刻下は馬博士と東洋人と云ふやうな題目を書いてゐるので南條師其の他へ良人より送つた手紙を借りて材料にしたさうだ。

▲馬氏は極めて親切な人で學生にむだあしを運ばしてはならぬと云ふので旅行する時は一々南條師へも通知したさうだ日本の木葉天狗を氣取てゐる博士連とはちがうよ。

▲夏葉のチエホフ紅葉共譯とないだけが物さびしい。

▲手紙雜誌と云ふが麹町の有樂町有樂社から出る頗るこつた面白い且つ參考にもなる雜誌だ中に樗牛の嘲風に與へた手簡がある云はく「世は常闇に候大いに罵倒したし

▲綠園から青々園に送つたものもある「云はく天外君の氣焔當るべからず」と。

▲帝文の長江無何有の「亡き夫」まづさ加減厭惡と云ふべしだ流石に珍妙の本家はちがつたものだ。

▲男星の山の人と云ふ男むしろ山男と云ふべき人は多少語學の才があるらしいお人の惡い男と見えて其實眞摯な所もあるやうな面白さうな男だ

實際馬場孤蝶だかどうかわからぬが孤蝶ならば「燈臺守」を評してやるがよい。

如是我聞

窮岫子

○遼陽は既に占領せられたり、旅順の陷落は乃ち奈何、野戰と要塞戰爭の差別さへ辨識せざる國民は旅順陷落の遲々として捗らざるに氣を病み、良もすれば失望の嘆聲さへ洩らすものあり以ての外の沙汰と謂ふ可し、內に在て醉飽し、漫りに軍人の行動を批難するもの、須らく左の文を讀め、苟も一片同情の念あるものは悚然として戰き、惕然として襟を正すべし。

極東に露國の威嚴を觀す可く、五年の日子を閲して用意周到に築き爲した堅固の要塞、難攻不落を世界に歌はれ、露人自らも然かく自から信ずる要塞である、敵に飽迄防守の覺悟と自信が有から勸降使も謝絕した譯であらう、成る程攻めかけて見ると夫はく\手強ひ抵抗をする、猪鹿の類でも攀ち登るとの出來ない嶮崖絕壁を倚も劍の如く削り成し、其の上四方繞らす機關砲、鹿柴、鐵條網、狼穽、塹濠、ありとあらゆる防禦の備嚴しく、中にも鐵條網は電氣仕掛けで、觸るれば痺れる、壘場に取り附けば覗ひ澄して機關砲の一齊射擊、三尺高く跳ね上りて直くさま往生、此の如き難所をも命は君國に捧げたるものと思へばこそ、死骸を踏み越へ、血潮を渡りて、御指圖なくとも、吾から進んで肉彈を築きて彼の心膽を寒からしめて居るのである、本國の局

胞は提灯行列、旗行列、打上花火、歌舞囃子とお祭り騒ぎは少々痛み入る、先頭我々が某砲臺に乘り込んだ時などは顏を出せば斃れる、一足進めばコロリと往く、其中を面も振らず進んで行く我兵の勇敢は夫はく涙が溢れて只有りがたい、悸ないと腹の中では泣て居れど、マサカ敵前にソンナ顏は夢にもされず、考て見玉へ、郷國には親もあらう、いとしい者もあらう、名譽の戰死、名譽に違ひない、併し此の名譽の犧牲、噫言ふまいく、苟も軍人の口からこんな事を云ふべきでないが一步是れ血、一進是れ肉である、現に其の砲臺などは、絕壁一面唐紅いの血潮てズルくして居つた、諸君の軒の紅提灯は皆此の血て染ているのだ、夫に何ぞや旅順はナゼ遲いのだらうナド、料理の注文でも仕出屋に催促するやうに、杯片手に待て居るとは我々も皆い心持しやうか、考へても見給へ。

言々之れ涙、句々之れ血なり、誰か之の文を讀んで泣かざるものぞ、

○貧乏にも際限なく、贅澤にも際限なし、一ヶ月の菓子代貳百圓を費すと云ふ戸田氏共伯の贅にも驚かれぬる也、社會主義は富者に對する獸的嫉妬心なりとも强ち謂へさるに非すや。

○書生十人、車夫三人、馭者三人、下男五人、料理人三人、下女幾十、總計五十二人、一ヶ月の給料三千圓とは虚の如き眞なり、之が平生論語を愛讀し、質素倹約家の稱ある澁澤榮一男の暮し方なり、當年風呂敷包みを背負て雪中に泣きし素丁稚の榮達も亦素晴しからずや。

○下谷徒士町に繩暖簾をブラ下げ金蠅の群り集へる干物の親方たりしは大倉喜八郎の前身也、此の男今は富を爲すと巨萬、家族一ヶ月の食料一千三百餘圓、魚屋の拂ひのみにて月に六百圓を超ゆと云ふ豪奢も此に至て極まれりと云ふ可く、人間の浮き沈みほど面白きはなく、何が何になるやら。

鬼面魔語

醉美生

▲男女妙齡に至ればたゞチラと打見たるのみにて互に其美醜好惡を判ず。其早きこと物の譬ふべきなく、時の計るべきなし、是れ神が人間に附與したる能力の最も驚くべきものなり。

▲矛盾なき人は終に感情活動の妙味を悟ることなし。

▲所謂小說家として天才の傑あるは柳浪氏なり、讀むこと一頁ならざるに早く已に讀者を篇中のものたらしめ、事件の推移、人物の動作、一々明瞭にして耳開目睹の感あらしむる筆致、尋常作家の摸し能はざる所、只近來全く佳作なきは大に藥に蒐さみたるの致す所なるべし。

▲天外氏は小說家として人才の優なるもの、其勉めて止まず、其究めて倦まざる、筆硯益々精彩を放つて將さに柳浪氏を凌駕せんとするの概あり。殊に局部くに於ていふべからざる妙味ある、多感にして人生の機微を解する人にあらずんは描き能はざる所、益々氏の奮勵を希はざるべからず。

▲柳浪氏の妙味は全体にあり、不用意の所にあり、頗る自然的なり故に予は天才の傑ありとせり。天外氏の妙味は局部にあり、用意周到なる所にあり、極めて人工的なり、故に予は人才の優なるものとせり。然れども其作物の優劣を以てのみ論せば恐らく後者のもの遙かに前者の上にあらんか。

▲露伴氏は明治の馬琴か。

▲自らを客観視することを得ば、如何なる苦痛に遭遇するも必ず一時の解脱を得べし。

▲人に報酬せんとする時、ある特別なる事項の外は、概れ金銭を以てするをいやしみ、物品を以て之に代ふるの風習あり、贈る人、受くる人共に自他の不利を知る時に於ても尚此習慣に従ふべく餘儀なくせられつゝあり、此れ武家時代陽に金銭をいやしみし遺習にして一朝一夕に改むべくもあられど、心あるものは漸次改良するの覺悟なかるべからず。

▲物品を贈らんとすれば宜しく其代價以上の効能あるものを用ふべし例へば其土地に見るべからざる珍らしきもの、又其人の好んで而かも有せず又自ら有する能はざる如きもの。

▲俗人百人に刺らるゝも具眼者一人に賞せられんとするの覺悟なければ偉大なる事業をなすことを得ず、具眼者百人に罵らるゝも己れの良心に嘉せらるゝの決心なければ高貴なる行爲をなすことを得ず。

▲金銭は學問するものゝ大障礙なりと極端に論ずるものあり、されど金銭なくして立身するもの僅かに千人中の一、金銭なくして學問せざるもの常に千人中の九百九十九人なるを悟れ。

▲秩序正しき學術の書を讀まんと欲するものは必ず先づ其目録を一讀して其大体を了解すべし、こは長き旅行に出てんと欲するものゝ地圖を開きて豫め其行程の全体を見るが如し、然らざれば讀みつゝある部分、旅しつゝある部分が、全体の何處に當るやを知る能はざるべし。

▲悲劇を書かば宜しく笑上戸をして泣かしむべし。喜劇を作らば宜しく泣上戸をして笑はしむべし。

▲金餘りに多きも困しみ、金餘りに少きも亦苦しむ、取りて遣ひ、遣ひて又取り、以て面白く世を送る、金の用法を得たるものといふべし。

▲入り込みて紛れ易き道を問はれたるとき末の末までも教ふるは愚かなる業なり。宜しく最も分り易き所までを教へ、其後は再び問ひ得べき所を教へやるべし。

▲熱すれば過賞し、冷むれば過貶し、常に極端より極端にのみ走るは人間の弱點なり。夫れ故に青年最も放縦なる感情派の人は、老後最も厳酷なる犬儒派となるもの多し。

人の噂すべからずとは先聖の訓に候、併し賞めたり罵つたりする程、面白き話の種れあるまじく候、また又賞められたとて矢鱈に乗り氣にはなるまじく候、笑はれたればとて向腹は立てまじく候、そこで人の物ながら未亡人を評したる川柳一句、我もの顔に附け加へ可申候

切髪をお似合ですとは酷い世辭

新柳樽　久良岐撰

髪十句　水日亭

根がつると撫てゝ椿の匂ひさせ
金巾の油屋さんて梳き手かけ
氣に入らぬ髪は撫でるに事をかき
癖つ毛の一ト晩寐ると浪が打ち
髪がよく結へて歸りが遲くなり
結たての頭で換へる枕紙
新聞を折寄せてマーひどい頭垢
ふけとりのあちこち櫛て毛を分ける
元結をキリ、とゞめてペロリ甜め
根を持つた手を文殻て拭いてゐる

時局　文象

戰捷の紀念端書で産見舞
紀念端書只呉るやうに投出し
小便をしてから歩哨交代し
從卒が課長て困る豫備少尉
豫備少尉やんわりだぞと馬を撫て

秋の七草　岐陽子

(尾花) 秋の野ておいて／＼は凄い事
(女郎花) 女郎花原一番の美人なり
(撫子) 苟も大和生れと反りかへり
(葛) 愚痴ッぽい歌にいつても引出され
(藤袴) 公達に仕へた身だと襞直し
(朝顔) 照らされて天道樣へすまぬ顔
(萩) 押合ッておつかぶさるがきつい好き

歴史　芋生

能登殿はしめたと宙をひつ摑み
ヒッかいちや困ると金時熊と組み
(祝)お姫樣竹の子からヒョッコリ出

村角力　天緑

村角力大關稻妻稻の花
御ひいきより下さると有つて芋二俵
勝角力田圃をツ、リ嗅で行き

汽車　頗臺師

沿道に中將姫が並んでゐ
毛布持つ客は遠くへ乘つて行き
五分停車正宗ビールサンドイチ
箱根山汽笛合圖に窓をしめ

富士詣　呑吐坊

强力は年の寄つたを自慢する

金剛杖力のはいる弱い事
乗かけた山ぢや〳〵と元氣付け
合力をオーイ〳〵と呼かへし
下界では雨が降るさと教へられ
我々も雲の上人抔と洒落れ
砂走て按摩のやうに杖を持ち

漁村　萬ちやん

ねえ兄さん亞米利加迄はどのくらゐ
牛に似てゐるから牛島てんですね
日の出拜もうと八時頃起上り
日の出を拜んだソレは雲から出たの也
遠かは漁師の子だと感じ入り
鰹をば肥料とはテモ勿躰ない
名は湊其僻海岸岩斗
どつと來る浪ピヨイと飛上る孃さん
浪引いて岩がノコ〳〵起上り
甲羅干しや背中に壚田出來上り
砂ッ原履けば歩けず脱ぎや暑し
舟頭の奇麗な所は足の裏

出産　久良岐

産れるとスグに男女を聞きたがり
女の子兎角に雜に扱はれ
又めすか抔と旦那は御不機嫌
モスリンの山を築くが產所なり
祝物中に綿ネル混つてゐ
ミセス苦痛見るに堪へずと髯は泣き
ミルク乳母赤子の泣くをこらへてる
産れると直ぐギヤア〳〵は女なり
赤ん坊泣が唯一の日課なり
泣けば呑む呑めば直ぐぬくぬけば泣く
赤ん坊首三寸を徘徊し
赤ん坊おつかなそうに眼をあける
七夜をば逮夜と云つて笑はれる
占守島スワ鎌倉も間に合はず
關ヶ原石田は汽車へ乗つて逃げ
逃振がエライと鳩は褒められる

▲川柳募集

▲題秋季混題▲〆切十月十八日限▲東京市麴町區富士見町六の十久良岐社宛

社會

下層に於ける家庭

樋口二葉

正面から觀た家庭

家族は親子水いらずの四人、色黒々と壯健さうな爺は最う五十に近く、女房もまた天晴光澤もよく體格もよい。それも其筈、此方の人がエンサカホイと車力を引張ると、女房どもがホイサカホイと後押をするのが、鼻下喰殿建立の日課である。暑い炎天も寒い冬の日も眞黒になつて稼ぎ、乏て名代の新網へ歸るは、何時も日の入り雲が黒ずんだ增上寺の杜の上を彩つて、電車の燃火が窓より綺麗な輝きを發つ時てある。

彼の家は、薪屋と豆腐屋の薄闇い狹陰路次を突當つた長屋、お交際をするは五六軒もあるらしく、斯樣ところに特有な匂い、麝香てなく、樟腦てなく、然りとて腸樽の匂ひてもなく、また下肥の匂ひてもない、一種の臭氣が充ては居るが、感心なことには濕地てこそあれ、お長屋が相馬の古御所よろしくてこそあれ、割合に清潔て、戶々に標札がちやんと出してある。それが廐立て間口一間半に奥行二間半、入口は三尺の戶袋に二枚の上織戶といふお誂へ通り、疊數は七疊しけて何れも琉球の判官樣（琉球表の破れた疊を云ふ）は說明だけが野暮、裏には六尺の風ぬき窓があるは、此等あたりの長屋の構造には上乘なのである。流元は戶袋の蔭の三尺の處にあつて、水瓶も無いから仕合、あつたらコボリと板のメリ込むは請合、バケツ一個が百事に應用される重寶に、この流元の板張も危ふく現形を存して居るのだ。そして表の標札には「北村某」。

點燈ごろに夫婦は歸つた。暢氣さの天井は彼等の住居て、外出するからと云て、表の戶締をするてなく、長屋の處に聲かけると、ヤレコラサの掛聲てあがり框に腰をかける女房は四邊きよろ〳〵見ながら、

「お隣のお內儀さん、バケツを使用て居るの。」

「あゝ、來てるよ。バケツだツて毎日の不在番ぢやア淋しいてえから、ホヽホヽ。」

「勝手な熱ウ吹てあがらア、損料はいくら出すンだいヘン、逆さにふるツたツて鼻血も出やしめへ。」

バケツの所在は知れた。主人は一日の汗を拭ひ去つたけれど女房はまだ其日の職務を終はない、是から大責任があると云ふ意氣込、仕手も脇も夫婦で遣つてのける膏汗を、頭から釣た縞の財布に五十兩は扨て措て、其一割のまた其一割の五十何錢が今日の提錢、それを再び懐中に捻こむと、米磨桶の代用もするバケツを片手に出る先は米屋と魚屋である。

夕餉の支度も出來た。手拭を繃帶に包むホヤの曇りに仄暗い三分眞の洋燈は、是よりを極樂淨土と、終日の勞苦を忘れて冴々と光明の輝いてゐる、てゝら二布の夫婦の半面を照し、下したばかりの鍋飯は蓋の破目より盛に水蒸氣をあげ、竹の皮の儘にひろげてある鮪の刺身に、銀蠅の寄り來るを拂ひつゝ、何を待つやら足音に耳欹てゐる。

威勢のよい十三四の男の子、天秤かついで十五六の辨當箱抱へた、衛生的に發達した娘と何事をか爭論ながら歸つて來た。言ふまでもない二人とも夫婦の子寶姉は近所の工場へ通ひ、弟は蜆や淺蜊を賣つて各自獨立して居るのである。

たとへ石炭箱の上に茶碗を幷べても、隔心は微塵もなく、晝間の苦熱を夕風に吹かせ、八本の箸に刺身つッ突合つての晩餐、一家團欒の快味、山海の珍味に舌皷うたして茶屋酒に醉を貪るのと同日の論でない、其淸らかに美しいさまは、秋の野末の萩桔梗、月に語らふ虫のこゑ。あゝ彼等はいつも〳〵此樂い家庭に、幾多の苦悶と勞働とを＋－してゐるのであらうよ。

側面から觀た家庭

燦爛眼を奪ふばかりの蜀紅の錦も、くるりと回轉ればお座の醒めるもの、世の中のこと一から六まで皆これてある。正面より觀るといかにも花のやうに美しい小樂園、いつも蝶がちら〳〵と飛交ふて、愛の泉が淸く淙々と流れて居さうである。それもこれも天氣續きて夫婦も稼に出れば、息子も商業に出て、大藏兼内務大臣の財布の底を、お鳥目がチヤラ〳〵と宵越に幾等かある時のこと、二日も三日も雨降が續いて、大藏省の金庫に種錢すらなくなる、一日を二錢か三錢の殘飯て飢渇を凌ぐ場合になると、赤裸々に彼等の本性を發

展して來るのである。
全體この社會ほど下世話にいふ女日照のする處はなく、左衛門尉の權力は怖しく發達してゐる。ある意味に於ては米國のそれよりも遙に優勢を占め、安直女權の旺盛なこと意外、寧ろ奇怪に感じられる。一家の經濟は素より日用の切廻しまで總て女王の主權に屬し、主宰者主人の權力と云たら殆と零て、平易言ば則ち婦天下であるのだ。て、主人は宿六の尊稱の下に齷齪稼いて得る處の收入は、恭しく女王の御前に捧げ、一杯の濁酒に欝を散ずるにも、其裁可を得なければ逆鱗に觸れて、とんだ家庭に大波瀾の生ずることもある。畢竟するに家庭の平和も夫婦の愛情も親子の親密も、財布尻を押へて伸張る女王の御機嫌次第で、圓くもいけば尖りもするのだ。さうして見ると黄金色にさす溫かい春の日のやうなホームは、彼等の間に見出すことが出來得ないからであるが、總て天眞爛熳情の動くまゝに活動させるに、何等の牽制されるものがないから、或時は燃るが如き熱情を以て迎へ、或時は冷々淡々水のやうに冷かに遇するのである。其冷熱が何事にも應用されるので、家庭間に夫婦喧嘩親子喧嘩が絶えない原因となる。それが特にこの北村一家の家庭でない、下層に於ける家庭の何れもが、皆斯くのごとき鑄型の中に箝められてある。

お天氣でさへあれば、家はカラッポにして皆出懸るから、此家ばかりは平穩なもので、近所隣家から先ア〳〵先ア待なせえの留男留女が闖入する厄介もないが、雨降つゞきて姉娘の外は、ごろ〳〵と爲事なしの骨休めも、一日は左程の苦痛を感じないが、最う二日目となると、財布の底はチャリンとも云ず、いかに經濟の才に長じてゐる裸女王も、無ひ袖はふれぬ家根代の日掛、空腹の凌ぎ方、假令殘飯に腹の虫抑へるまでが、甘藷の切出に一時を慰めるまでが、五錢と七錢の大金を要する、其沸出すところがないから波は立ち、風は起る。

「お前さん　何うする　何うするンだい。」

「何うするッて、仕様がねえヤ。」

「男の癖に意氣地がねえぢアねえか、女房子を干乾にして見てる氣だね。面白くもねえ。」

「一ッ言ア二ッ目に尖がりあがッて、見ねえな、此雨に稼業に出られるもンか。」

「誰が稼業に出ろと言ふもンか、雨降りにア雨降りのやうに俥でも引張るとか、蜆でも賣てあるけばいゝ

ンだ、照降なしに稼いてる花公の前もあらアなっ」

「何言てあがるンだ。えゝコゥ俥を引くにやア鑑札が要らア、蜆賣だッて荷造までして、さア商業にお出なせえてえ篦棒アねえ、ざまア見あがれ!。」

「ヘン、お前さんは豪へよ。減らず口ばかしポン〳〵お叩あそばしたッて、質ることア何一ッ出來た試しがねえンだ。己等みんなお米を喰ふ虫だよ、此節ア諸式が高直て、ロハてお米をくれる米屋さんはねえとさ。フヽンちやんちやら可笑いや、お前みてえな意氣地なしア干乾になるがいゝ。オヽいやだ〳〵意氣地のない亭主を持て苦勞するは眞個に下さらねえ、向ふ裏の金ちやんの方が働きはあるし、男振は好し、とんだ深切ものよ。ホヽホヽホヽ、鰒吹見るやうな顔をして、何うするてえンだ、神明樣のお神樂にでも出れア錢になるかも知れねえ。」

「ヤイ、どた福、言して置きア附上つてとんでもねえ顛たゝきあがる。何だと、金公の男振がいゝ、笑はせあがらア、好年齡仕て男狂ひもねえもンだ、さア白狀あがれ、うぬ!。」

と主人は烈火の如く怒つて、突然ポカリ横面へ鐵拳お見舞申した。斯うなると女王の火の手はます〳〵熾んになつて罵る、譟ぐ、撲つ、泣く、イヤハヤお話にならない亂痴奇に、お長屋惣出の仲裁、女房は隣家へ退陣して吐く怪氣焔に溜飮を下し、野郎の阿魔のと叫び罵る亭主の意氣天を衝いて、出刄庖丁逆手に跳りこみさうな勢ひである。それも三四十分紛紜た後は、柿葺家根から不規則に落る雨垂の音に遮られて了ふ。

夕方になると女房は亭主の印半纏を引かけて、何やら横抱に質屋へ飛込み、姉弟の歸るまでに覺束ない夕餉の支度をする。幸ひに翌朝カラリとお天氣になるとも、車力の稼ぎに出るは亭主ばかり、戸籍調が來ても手拭を斜にかけたまゝの赤裸々、小言いつた巡査も苦笑ひに立ち去る始末、ざッと先ア此等あたりの光景はこんなものである。

夫婦間の關係

下層社會に於ける家庭の組織は、一家の主宰者則ち主人に統一の權がない。殆と各自各個で、親に親らしい處なく、子に子らしい處なく、腕節の强いものがお山の大將となつて居る。其亂脈なこと驚くばかりで、寧ろ憐れむべきである。總てがそんな光景であるから彼等の頭腦には法律もない、社會の制裁もない、恥辱

といふことも知らない、それて勝手氣儘な眞似をする何うて眞直な定規をあてがつて尺度をとるは難い。この問題に就ては單に北村某の家庭のみの觀察てない、下層社會一斑を廣く漁り盡した結果て、遠慮なく斷案を下すのてある。

彼等の夫たり妻たるものゝ間には、花のごとく美しく淸らかな愛、春の日のごとく朗かに溫かい情、この二個のものは殆ど無いやうてある。人間と生れて無限の力を持つところの愛情がないと云ふは頗る訝しい、いくら無智盲昧な彼等だッて、愛または情が夫婦の間に無い筈はない、必ずあるに違いない。いかにも愛情はあらう、あるは當然てある、けれどもそれが眞の愛てない眞の情てない、アニマル的愛情てある。最も小な利慾的愛情てある。夫婦間の連鎖は纔にこれに據つて繫いてゐるのて。斯う云ふと餘り極端に走るやうてあるが、煎じ詰めると斯うなるのてある。一昨年の秋某刑事巡査の紹介て、下層社會の狀況を取調たことがある、其時二月ばかり病床にあつて妻に逃られた四ッ谷鮫ケ橋の土方小林次郎吉は斯う言た。

「嬶に逃られて悔しいと思つたも一時さ、何うて自分等の嬶てすもの、喰なくなりやア、逃亡りますさア、今時の阿魔ア亭主一人を後生大切に守てますもンか私が寢込て口が乾あがるもンてすから隨徳寺を極たのさ、別に不思議はねえ、稼ぎに出りやア又引張つて來るまてさア。」

あゝ何たる樂天觀てあらう、惘れてロアングリの沙汰てはあるまいか。そこて女房の亭主觀は何うてある。これを兩々對照すると聽て夫婦間の關係を、略ぼ解決することが出來て、前言の徒らに奇を衒ふのてない實例が示せやうと思ふ。矢張その當時の實地調査てあるが、女は四十五六て下谷南稻荷町に住する車力吉岡某の妻て、尾澤とうと云ふものゝ話てある。

「はア、亭主てすか、わたし何かには六ケ敷ことは解りませんが、先ア斯う思つてますわ。そりやね貴下方の奧樣は喰ふことや着ることの御心配はねえンて結構てすよ。旦那樣を大切になすッて、面白くお暮しなさいませうが、わたし等のやうな我儘者になるとおッかな吃驚のそんな窮屈ア辛抱が出來ません。斯樣なよを申しちやア濟ませんがね、貴下方だッてわたしどもの宿六だッて、亭主てえものア稼いて女房子を喰して往くが、今日の義務とやらてせう、ねえ貴下。其亭主がカラ意氣地なして、碌ずつぽ喰す

ことも出來ねえ癖に、太平樂を吐しあがッて、出りやア飲酒て歸るぢやありませんか、是ぢや女房の立目がねえ。先アわたし等の亭主にならうてえ代物アこれさ。切て喰ふだけでも滿足に喰れなかつた日にやア、お揩り小法師がないてえもンだ。そりやお天氣都合て一日二日アお粥腹だッて仕方がねえ、一列一體の時ア我慢をするが今日樣への義理てえもンだ位は知ッてます、がね、毎日ノベタラぢやア遣る瀨がねえてせう。そんな亭主に何時まで連添て居たッて仕方がありませんわ、なアに、何處へ往つたッて御輿アすわりますさア。」

中には隨分眞面目で、ある意味から中流以上よりは、寧ろ溫かい美しい家庭を形づくッて居るのもある、けれど是等は異數て、放縱離合定まりなきが彼等夫婦間の恒例てある。て、無論正式の結婚などはない、警察の索引には何れも内緣の二字が冠つて居る。これ以上の事をかくは好まぬ、假令書かないでも、男女の談話を味つて見たなら、其境涯のいかに憐れてあるかを洞察する事が出來やう。

親子間の關係

夫婦間の情况が如上の通りてあるから、親子の間に蟠屈して居る光景も、亦想像し得られるてあらう。親として子を愛せざるものはない、子の愛の爲めには何事も忘れて了ふもので、どんな心配があり、どんな苦痛を感ずる時でも、無邪氣な小兒の笑ひには、心配も苦痛も消え去つて、其薔薇のごとき柔らかき美しい頰へ接吻したくなる、彼等とて此情が湧起らない筈はあるまい。が、一ッは其境涯が其愛に打勝ことが出來ないからである。けれども小兒に對する愛情の溫かさは決して高度でない、我々の眼から見ると冷かなこと氷よりつめたい、これて乳離れがすると、炎天に晒され寒風に吹かれ、他人の手に賃貸されて親を救ふて居るものすらあり、最う七歲八歲になると、三錢なり四錢なりの稼ぎはさせられる、此樣風に成長するので、十四五になれば女の子でも男の子でも、殆ど獨立して親の臑をかぢつては居ぬ、畢竟はかぢることが出來ないからでもあらうが。それて親子の關係は誠に冷淡となる、一家の内に住てゐても各自各個で、是等がまた習慣的遊惰貧民の後繼者となるのてある。乳母を雇ふて育てさへ母子の情愛が薄くなると、俗諺にいふほどであるから、親子の間が段々遠く隔ッて來るは免れない

自然の道理と思はれる。

生活の一日

又彼等の生活は一月を以て計算することが出來ない、其日々々の風次第て、雨降らば降れ風ふけば吹け、翌日の考へは更にないのが特色てある。今北村女王が經濟の取方は

一金廿餘錢	五等米一升五合	一金四錢	一日分家根代
但し姉は一月一圓二十錢		一金二錢	醬油
弟は一日三錢宛を支拂ふ		一金二錢	はかり炭
豫定なれど兎角に不馴		一金一錢	香の物
一金二錢五厘	薪（三日分の燃料）		
計金三拾弐錢五厘餘			

夫婦して得る處五十餘錢すると、殆ど二十錢近い餘裕が出る筈が、其錢を何に使用するか、これは副食物となるので、比較的美食をして居るのてある。處て雨降つゞきて無收入となると、親子四人口て四錢から五錢て一日を凌ぐのだ。猶立入つて詳細にかくと小事はまだ幾等もあるが、先づこれて概畧は盡して居ると思ふ（をはり）

號外屋旅順陷落質に置き

生活問

（中産者の生計如何）

横山天涯

前號の中央公論に於て、余輩は、都市と村落との中間なる『町』の衰頽を擧げたり、本號には、其の續稿として、寧ろ上流に近かき中産者の生計費用を掲げて、前號に缺くる所を補ふ可し、今や、社會問題の論議、年一年に多きを加ふ、然れ共、其の論ずる所、何れも歐米學者の所説を披露せる者のみにして、余輩の如き悟りの悪ろき者には、果して何れの國の社會問題を論議せる者なる乎、判別に苦しむなり、甚しきは社會主義の新福音と稱して、ルーズベルト氏の所説を崇拜し或は資本と勞働との調和を主唱する者あり、一笑に堪へたり、余輩社會主義を喜ばざる者と雖も、世間斯くの如き論議の行はるゝを思へば、寧ろ系統あり、熱誠ある平民社一派の社會主義者に與せん哉、社會問題は實地の必要に迫られて起りたる實際問題なり、一定の信念なく、勞働者を思ふの親切なくして、徒らに學問を衒ひ、博識ぶられて堪まつた者にあらず。

却說、宿場に於ける中産以上の階級者は、表通に店

を開ける上より言へば、一の商業者なり、然れ共、專ら店商賣に依りてのみ生計を立つる者、甚だ尠なし、何れも若干の田地を有して、其の生活を補ひつゝあり或地方の如きは、其の店商賣は、副業たるの觀あり、否、戶數少き町に至れば、其の中產以上の住民は、寧ろ農業者たる者多し、爰に田地二百石(石高時價百二三十圓)を有し、傍ら町民及農民に貸金せる一家の生計費用を擧ぐべし。

因に田地の收得は、概略小作米二百石、貸金は其の精確なるは知る能はざれ共、概畧一万圓內外あるべしと風聞あり、故に內場に積りて、田地の收益は、一ヶ年千三百圓、貸金は假に九千圓と積り、年一割――九百圓、合計二千二百圓の計算と爲す、是れ地方に在りては、寧ろ上流の階級者たり。

而して其の生計費用は如何、先づ衣食住の生活費を擧ぐれば

一　五百七十六圓……食費

一人の食料、一ヶ月四圓と見積り、家族、大人、十一人、幼兒三人(を一人に見る)、即ち十二人分の食料なり、肴、薪炭、油等の費用も、混入す。

一　百二十圓……被服料(一人には十圓宛)

一　四十四圓……醫藥代

十幾人の大家族、幼兒三人もあれは、一ヶ月の中、其の半ヶ月は、醫藥の必要生ず。

一　五十五圓……家屋修繕費

小計　七百九十五圓

右は、一ヶ年の衣食住費のみ、次いて擧ぐべきは、交際其の他の社會的費用たり、地方は、都市に比して娛樂の費用少なし、然れ共、親類其の他に係はる費用は、寧ろ都市に比して、大なる者あり、故に同じく二三万の資產者と言ふと雖も、都市に在りて、中產者にして、地方に於ては、大資產者の中に加へられ、常に其の家格の爲に苦しむ者、滔々皆然り、左に其の費用を擧ぐれば、

一　五十圓……春秋二季の祭典費用

地方に在りては、祭禮は、社會的娛樂の第一たり、五十圓の費用の如き、寧ろ少額に屬す

一　十圓……盂蘭盆費用

一　二十圓……寺院割當

若し是れ眞宗寺の門徒たらん歟、此の家の如きに在りては、五十圓以上の割當あるべし

一　二十圓……寄附金(寺院及神社等に對する臨時の費用)

一　四十圓……緣家に對する慶弔費用

一　二十圓…………宴會費

小計　百六十圓

一定の費用を擧ぐれば、斯くの如きに過ぎずと雖、尚、之を外にして、議員撰擧等の費用あり、蓋し地方に在りて、或階級以上に位する者は、議員に推戴せらるゝ必然的義務あり、而して國會議員、縣會議員の選擧に於ると同じく、多額の運動費を投じて、町會議員の資格を作りつゝあり、百圓乃至二百圓を要するは、普通にして、甚しきは、五百圓以上を失ふ者なり、豈驚くべきにあらずや、尚、法事、大法事、緣組費用の如き臨時の支出あり、之は最も巨額を要するが如し、小法事に、三十圓以上五十圓を要するは通例にして、外觀を飾る家に至れば、百圓内外を費やし、大法事なりせば、例令質素なる家にても、二百圓乃至三百圓を費やし、而して葬式入費の如きは、概ね二百五十圓を拂ひつゝあり、斯くの如きは尚可とすべし、結婚費に至りては最も巨額を要し、一人の娘を仕末するに、千圓乃至二千圓の巨額を投ずるを通例と爲す、故に同地方に在りては、三人の娘を有せば、其の身代は、亡ふべしと稱へらる、嗟呼、誰か田舍生活を以て、單純なり。と言ふ者ぞ、今日地方中產者の、生活難を嘆ずる者、故なしと言ふべからず。

次は、其の營業及一家生活の爲に使役する雇人に對する給料を擧ぐべき歟、即ち

一　六十圓…………番頭一人の給料

一　二十四圓…………下女一人の給料

一　十八圓…………臨時雇人の手當

小計　百二圓

の費用を示す、更に敎育費を擧ぐるを穩當とすべき歟、此家にては一人の少年は中學に出で、其の費用一ヶ年七十圓、他に二人の兒童ありて、小學に學びつつあり、其の費用、三十六圓、即ち小計百六圓、餘つて、國家に支拂ふ各種の租稅は幾何なるや、を見るに

一　二百五十圓…………地租（地價一名高五十圓と見積る）

一　十五圓…………營業稅（貸金九千圓に對し）

一　十二圓…………所得稅

一　三圓…………營業附加稅

一　二百十圓…………町稅（一戸七圓と見積り三十戸負擔）

一　六十圓…………地方稅

小計　五百五十圓

の巨額に出づ。恰かも十二人分の一ヶ年の食料と、略ぼ相等し、即ち一ヶ年二千二百圓の收入に對し、千

七百十三圓を支拂へる計算と爲す、其の剩餘、僅に四百八十七圓を見るのみ、然かも此の計算には、臨時支出なる婚姻費用、葬式入費、其他議員選擧等の費用は加はらざるなり、斯くの如き費用にして、三年乃至五年に一度宛廻り來る者とせば、例令此家の如き中産以上の階級者にても、收支相償はざらん、程度低くき中產者が、何れも其の生活に疲弊を致し、算を亂して破産の運命を示せる者、亦偶然ならずと謂ふ可し。

斯くの如きは、抑々何故ぞ、曰く、生活程度の增進曰く、納税額の膨脹は其の遠因にして、而して自由競爭の結果、其の營業の游利と爲りしも、一大原因たる可し、而して田舍の事とて、他に新事業は起らざるなり、以上は、鐵道の影響なき北國地方に於ける調査にして、生存競爭の激甚なる、東海道筋等にては、今一層甚しき現象あらん歟、尚言ふべきと多しと雖も、身邊多忙、詳細は異日に讓る。

銀簪に銀杏返　生粹の江戸肌

高山小室生

○發端

大坂のさかえ、京都のどすえ、これをしも其特色と云ふべくんば、東京將に鋸棒を推すべし、など丶云ひだす事あまりに大袈裟て、いさゝか結論にまごつくが、兎に角其處は、夫相應に住い處があつて、流石食ひ倒れの名に負かず、冬籠咲くや此の花浪華津ては、熱燗の本場を手元に控え、佳味(うまい)ものから日本一と銘うたれ、蒲團被て寢たる姿の東山から、宇治は茶所樣々の人の氣にあふ水にあふと、紅白粉て京のお方々、鼻を伸す、さて東國へ下りては雪のながめの待乳山、端唄では玉川の水にさらしたと云ひ、一本人は水道の水で産湯したと自慢がる、いづれも自分の畠の芋はよく、何人も女房は醜ひと思はぬながら、夫もよしこれもよし辻占は大吉上として、さて當るも八卦當らぬも八卦(はつけ)と逃道だけは廣々と開けて置いて、表題見出し生粹の江戸肌の研究。

○地理

東京は日本帝國の首府にしてと、小學地理書で習つたのを未だ忘れず如何樣三府の隨一にてかしこくも九重の宮を眞中に、十六區の大都だけあつて、大廈の高樓の四通の發達のと、云ふ程野暮の骨頂ながら、この

大都に有象無象と群集する老若男女、口には江戸兒らしい熱も吹けど、其實訛たつぷりの御國者が、五年十年と暮すうち、巧者の奴が澁皮をぬぎ、器用な奴が訛を去つて、所謂一寸東京ナイヅされたゞけの事で、正眞地金無垢の江戸つ兒に至つては、蓋し稀有の稀有なるものである。

斯ういふと、どうやら理窟が解らなくなつて、左樣然らば昔の江戸ッ兒は消滅したのかとの御不審もあらうが、靜かに聞召せ、これを吾人に對するアイヌの如きものでと申上ては引證の當を得たものか奈何か解らぬが、早い話がまづこんなもので、牛込麴町の山の手は更なり、處變れば品川邊から神田へかけ、書生の巢なる本郷あたりまで、男は多く髯を蓄へ、必ず帽子を戴き、女はお召の三枚重ね、ぞべらとしてはこせこの簪ぴらく、然らずんば行燈袴に靴を召し給ふ女學生樣等の蹂躪跋扈する處となり、あはれや此邊ツンとすねる生粹(きつすゐ)の氣性者一匹も影を止めず、灰吹と金持の、たまる程穢い根性となり、憚んながら宵越の金は持たねえと、顋でしやくつて、辞羽屋を氣取る哥兒や、これから研究をしやうと云ふ本尊の銀簪銀杏返しの姉さんたちは、僅に本所、深川の邊で見ることが出來るのである。

○風　俗

黒羅紗に金釦鈕の學生、インバネスにソフトハットのハイカラ、ステッキに中折の眼鏡、玉羅紗の外套に中山の髯むしや、羽衣ショールに海老茶袴の女學生、友仙の被布に髮を洋風に卷上げた姫君、意氣な處で高島田に雪駄を穿く神田邊から隅田川一つ越えて此の本所深川邊に飛込と、日月星辰がらりと變つた丸で別天地、煉瓦は稀で土藏が多く、行くもの歸るもの何となく人種が別だと思はれる樣で、殆ど飛入りの自分より外に帽子を被つた者はなく、たまに鳥打でも被つたものは、新しいのは他區から入込んだ商館の小僧か、古いのは屑屋位なもので、土地ッ兒てえと威張るものはヅボンの代に股引をはき、チヨッキの代りに腹掛をかけ、コートの代りに印絆天を着、帽子の代りに鉢卷をなし、靴の代りに草履を穿き、ステッキの代りに新を持ち、英語の代りにベランメー語を使ひ、テニスより喧嘩を好み、運動より火事を悦ぶ、高山大澤英雄を産んで、周圍すでにこんな風だから、從つて此の中に成立つ女達、又自ら別躰で、所謂當世の風を吸はず、自

然天然昔の儘を止めて、江戸ッ兒の氣性前あるは蓋し當然であらう、まづ此處の女達、お召よりは雙子を着太鼓よりは引掛に結び、袴は穿かぬが前掛をかけ、ボックリよりは日和下駄を穿き、靴よりは雪駄をはき、靴下よりは足袋をはき、足袋よりは素足が多く、イギリス卷より島田に結び、島田よりは銀杏返を好み、いづれも油を嫌つて洗髮て、リボンよりは根掛をかけ、サイドロゴムよりは花簪を、花簪よりは銀脚に八分珠を崇拜し、ショールよりはおこそ頭巾を、羽織よりは絆天を着、厚化粧よりは素顏を悅び、香水よりは留木を用ひ、學校よりはお針に、教會よりは緣日に行き、舞踏會よりは芝居を好み、琴ピヤノより三味線を稽古しトランプよりは八々に通じ、百人一首よりはいろはかるたに熱中し、ラブの講義は出來ない代りに俳優の批評に精通す、されば日常の語り草大抵推するに難らずて、洋語等は片言もいはず、別れる時にも左樣ならと云ふものより、寧ろあばよといふのが多い。

○人情

今厚化粧といふ、直に口紅を連想し　文金の高島田を連想し、もり金の丸帶を連想す、今亂髮といふ、直に血色の惡しきを連想し、双子縞を連想し、稀には涙ぐんだ眼をも連想する、されば以上の風俗を見て、江戶ッ兒の氣性人情もはゝアと見當つき玉ふべけれど、大略一通申上ぐれば、徹頭徹尾水道の水て產湯を使つたといふが彼等の最も誇る處て、宵越の金は使はぬといふのが彼等の理想である、この理想たるや遂に彼等をして、につちにもさつちにも了へぬ苦境に陷らしむること敢て珍くないが、血を吐く思ひの中にも極めて平氣の太平樂を扮ふもので、鳥渡簡短な例を引くと、或る色男が他の女から下駄の一つも買つて貰つて、之れを爪先に突掛け、やかせる心算かなんかて見ろ色男は違つたもんだサ、てな事をいはふものなら、直に飛び附いて胸倉でも取るかと思ふと、中々那樣なことはせず、假話嫉妬の火焰は地獄の火よりも盛んに燃ゆるとも、齒を喰ひしばつても顏には出さず、「よかつたねー」位で其處は輕く受けて、「那樣ものをおまいは欲しいの、賴もしく無いね」など〻愛憎盡かしの憎まれ口など鳥渡た〻いておいて、「乞食じやあるまいし、貰ひあるきは止しておくれよ」位の警句は吃度吐く可く、唯に警句の一つや二つ吐くばかりてなく、少と意地になると、自分の衣類をた〻き飛ばしても「顏を穢され

ては默つては居られない」と力威出す、されば假にも吝なことはいはず、動もすれば氣前を見せたがり、意地になつてすね出すと、云つたと一歩も讓らないが、くだける時は殊勝にも溫直にくだけて、稚憐ない女らしい處を見せ、義理を欠くは殺人よりも惡いと心得、泣かぬとなれば殺されても弱い音を吹かぬが、弱いものを見るも埒もなく涙脆く、寒さうに慄へてをる乞食を見ると、奈何してもすげなく通り過ぎることが出來ず、可愛さうにねえと最う涙ぐんで、惜げもなく巾着の底をたゝいて了ふ。（尤もたんとも持つまいが）

這樣風だから更に金をありがたがらず、金は萬能力の世の紳士、新柳の花も黄金の土に出來るからとて、世は與し易きのみと額を括くつて此の江戸娘をつかまへたら、夫こそ飛だ背負投を喰ふと受合にて、彼等は天朝樣と觀音樣程有難いものは知らねば、髙爵も巨財も屁とも思はず、氣に入れば乞食とでも路行をしやうが、いやだと思へば御氣の毒だが……とそれ此邊で例の「水道の水で產湯を使つた姉さんだよ」

○大團圓

人情薄きと吉野紙より甚だしく、吹けばぺら／＼と散つてしまつて、朝の友は夕の敵、仁義道德地を拂つて芥一つも止めず、他人に注ぐ淚半滴しも持たず、不愍なるものを見ても欠厘を出し惜み、三綱無常糸瓜の皮と陷み碎いて、山吹色の前には蛙の樣にへたばつて了ひ、主義の人格のゝ大さうらしく吹聽すれども、躬りは煙草の煙の如く、方角もなくふら／＼と立ち上る丈で、他人の鼻息でどちらへでも靡くと風に柳の夫よりも甚だしく、宗教の信念なく、活動のエネルギーなく、自由の意氣なく獨行の意氣地なし、と厭に社會の罪惡と不權式とを罵つて假に憂世家ぶるわけでもないが、事實好ましからぬ風潮は日に月に腐れを增して、濁流愈々孑子をわかす世の中に、別段取り立てゝ云ふべき主義も信念もないけれど、一種特獨の意氣地を持して容易く動すべからざるすね根性に、黄金の音をむきみやの捨つる貝殼の音とも思はず、分限者がすなる大風呂敷もなにら病む猫のおくびと一つまとめに做してせゝら笑ふ江戸ッ子あるは、聊か以て吾人の不平を滿足するに足るもので、特に意志の薄弱な最も軟化され易き女の子が、假令東京の片隅だけにもせよ猶稜々の氣を持して、飽くまでもすねて飽くまでねぢけて飽くまでも屈せざるは、大に痛快に堪へぬものである、

社會側面觀

●奇警なる觀察の投書を歡迎す●二百字以内楽書●十八日締切

△赤ん坊の妻帶

岡山 翠砂生

曾て高山血來氏の學生の妻帶といふ文を見て栗田晋作は驚いた、而も之に驚いた田晋作は其赤ん坊なして現に妻帶せしめて居る、是程不思議な現象はあるまい、あゝ赤ん坊の妻帶、今尚多く行はれて居る許嫁なるもの即ちこれてあるまいか

△滑稽と無禮の對坐

京橋 鷄鳴生

大阪紳士の藝者携帶は天下に有名也、之を要君然と装はしむるは滑稽の至り也、頃日東海道線上りの二等列車中また此紳士あり、其意氣揚々たる態度は殆んど人を侮辱せる觀あり、而も大阪には之に上越す無禮紳士ありて彼の藝者携帶紳士と對坐せるが(素より知人にあらず)徐ろに寫眞機を出し物をも言はず其藝者を撮影すべく準備せり、然れども寫さるゝ方は敢て咎めんともせず意氣益々揚る、藝者は襟を締ひ容姿を正し、かくて双方無言の中に寫眞は撮れたり、吾人は無禮とも滑稽とも其評語に苦しまざるを得ず

△肉躰の墮落と愛國心

芝大門 泡沫生

愛國心の有無といへば、それは既に精神上の問題である、それを肉躰の墮落如何を以て類推するのは少々見當違ひてはあるまいか、頃日翠南生とかゞ毎日新聞紙上に於て藝妓を愛國婦人會へ入會せしむべからずと論じたが、全じ三面の方ては懲役人の軍資献金を愛國心の發現とオダテた、貴婦人の見得的或は義理的入會を眞の愛國心のみと思惟して居る新聞記者など思ひの外暗いものだね

△電話架設中と小便無用

銀座 和氣生

電話は商人の看板てある、便利といふよりも信用を得る爲めに具面謎面しても之を架設する、けれども麗々しく看板に「電話架設中」とあるのは方今諸處で見受けるところてあるが、寧ろ金のないのを標榜したものて、猶は通り抜け無用として抜道を教へ、小便無用として小便するに都合のよき場所を敎へると一般てある

△弱きものとなりたし

本郷 牛馬生

僕は最も弱きものとならんことを望む、牛馬虎狼は獸類中强い者、而も牛馬は彼の如く酷使され、虎狼は常に人に殺さる、犬猫は最も弱い者而も遊んで可愛がられて一生を氣樂に暮せり、人間社會亦復かくの如し弱きものよ來れと神は宣へども、强きものよ來れとは誰も云つて呉れるものなし

△社會主義者大會と戰捷國

石川縣 香取生

つい此の間、和蘭のアムステルダムに社會黨大會のあつたことは社會主義者ならぬ諸君も、大槪御承知であらう、而して我國よりは、日本の社會黨を代表して、片山潜氏は其の大會に列して、副議長に選ばれたのは我國の社會黨員諸君が、名譽としてゐるのは無理もないとてある、が、片山君が、副議長に推選せられたのは、戰捷國として、世界の人氣を集めてゐる日本國の代表者だ、といふものてあつて見ると、世界の社會主義者も、戰捷といふ人氣を取るのは、一寸妙に見ゆる。

泡沫生、翠砂生、鷄鳴生諸君、住所本姓を御通知ありたし

編輯錄

輕佻淺薄、只管奇を衒うて讀者を引かんとするのは現代雜誌界の趨勢である、然れども世は漸く覺醒して來た、日露開戰の結果、世界と直接關係を生じた爲め、國民が眞摯になつたのか、或は漸く眞文明に赴くべき機會が來たのか、兎に角眞面目なるものを要求するの傾向あるは事實である、本誌發行部數の遽かに增加したのは、恐らくこれが爲めてあらう

十九年來健全なる思想を供給して來た中央公論は、於是益々精力を注がざるを得ない、問題の撰擇、評論の公平、奇拔、斬新、眞摯等、編輯上に費すところの苦心なるもの實に一通りてない、只社評を着けるばかりてない、溢るゝ如き趣味を加へねばならぬ、紙面の體裁にも骨を折られねばならぬ、紙面の體裁とは一の美術であつて人に譬ふれば容貌、風采、衣裳である、即ち其内容と外觀とが一致しなくてはならぬ、本誌は今日まで之を行つて居た、併し今後はこれ以上を爲さればならぬ

取り立てゝいふ程てもないが、先づ記者を增聘した、以前よりは一層多く名家の所說を掲載することにした、新に文藝評論を加へた、戰時彙報の如き、徒らに勞して多く効なきものは除いて、其勞力と費用と紙數とを他に加へ、其他有形無形に改善したところ尠少てない、少くとも詭を逐うて完全なものになると高言するに躊躇しない

如上の言は空想てない、讀者は宜しく之を今後に徵し、編輯者の苦心のあるところを看取されたいのてある。



讀者之文壇

與一友之書

=天下の青年之を讀め=

紅鹿子

生れながにして天道の乳房ありとは、最早余の信ずる能はざる處となれり、昨日僅かに粥をすゝり、今日少しく米の汁を吸ふを得たり、これ正しく天道の乳房なるべし、而もその乳房は容量餘りに少にして生理上余の身躰を維持するには足らざる也。

余は決して安を偷むを欲せず、能ふべくば芋も掘るべし牛も引くべし、されど細く柔き手は雇者の容るゝ處にあらず、一管の筆よく數万言を聯ね得べきも、そ

は却つて白紙に如かずとて書肆の斥くる處となる、さらばルーテルを學んで聲を市井に罵がんか、そは單に味噌を腐敗せしむるに過ぎず、費すところの勞力は徒らに消え去りて一も社會を利せざると共にこれに對する報酬は與へられざる也、而して限りある身邊の物品は日一日と剝がれ行きて今は纔かに肉躰を包むべき一枚の衣を殘すのみ、土を嚙り水を吞むも余は生きん事を思ふ、而も遂に天道の乳房なるものを見ざる也。

然り余は土を嚙り水を吞んでも生きんとを思ふ、他人の門に立つの耻は尙ほ忍び得べし、然れども翻つて沈思默考すれば、かくしてまで此世に生存すべき理由を見出すに苦まざるを得ず、向上を意味するてふ人間は、食うて寢ね、覺めて食ひ、考ふることなく思慮することなく、只虫の如く幽かに無意味に蠢々たる間に向上し得べきか、

啻に向上し得ざるのみならば可し、小人は閑居して不善をなすと同時に、窮すれば亦惡心を生ず、正當の手段によりてパンの價を得ずとすれば、勢ひ他の方法を取らざる可らず、良心の磨滅日に甚しくして奸智は刻々に增長す、孟子の所謂恒產なくして恒心なきもの也、即ち漸次に下向し行く也、人間たる資格を遠ざかり行く也。これ既に無意味なる生存にあらずや。

余は今や高き理想低き生活てふ金言を實行すべく、無意義なる生存をして意義あらしむべく、朝三暮四に湧き出づる惡念と絕大の力を揮つて戰ひつゝあり、幸にして勝利は常に余にあれども、彼れが頑强なる逆襲は遂に最後の勝利を占むるやも計るべからず、何となれば余が糧食の欠乏するに從ひ惡念の糧食は次第に增加すれば也。

君亦天道の乳房に離れたりと聞く、這般の消息を了解するに苦まざるべし、否君も既に熟知せる處ならん

然れども余は余が天道の乳房に離れたるは全く自業自得たるを思うて止まず。

祖先の業を嗣ぎて食へざるに非ず、自ら手に鍬を取つて田園に耕さば十年にして倉庫を充たし得べし、村長たるべし、縣會議員にもなれるべし、修養怠らずは國會議員たるも亦難きにあらざるべし、而も小さき村の神童はかくの如き小なる目的に滿足する能はず、燃ゆるが如き名譽心は高等なる學術修業といへる高尙なる名目、獨立獨行てふ氣燄なる名目の下に再び余を驅つて都會の眞中に投じ込めり。

半年を支ふるに足るだけの金は懷にしたり、半歲の

月日短しとせず、何事か學資を作り得べき職のあらざらんやとの茫漠たる確信は其半年の終りの日まで續きたり、されどそは全く空だのみに過ぎざりき、到處として青山はあり、而も青二歳の生臑は一歩も踏み入ることを容されざる也、飢餓は容赦なく明日に迫れり、高等なる學術修業といへるものは、明日の粥の資を案ずる工夫に外ならざりき。

小學教師の稱贊せし村の神童は、中央都會に於て鐚錢の用をなさず、家にありて暖衣飽食したりし余は今や帝都に在つて水を呑み土を嚙り居れり、向上すべく欲して下向しつゝあり、これ或意味に於て余が經驗の一大部分を作るものならん、而もこれを經驗として立つべき未來の光明は果して明かに認めらるゝや、再記す、余は退化しつゝあるにあらずや。これ自ら求めて得しところ也、天道の乳房は到る處にぶら下り居るものにあらず、働くのみか食ふの道にあらず。

余と境遇を同じうせる君は、余の此言に對し點頭する處少からざるべしと信ず。

東都幾万吾人と境を同じうする者、否地方幾十万の神童よ願はくば之を讀め、これ最も消極的言說なりと雖も、[illegible]もまた漠然たる積極論に優るものあらん也。

新刊批評

▲職分論（上）

栗原元吉氏譯
内外出版協會發行

彼の自助論、及び品性論の著者として弘く我國人に其名を知られ又實際の感化をも及ぼしたるサミユーエル、スマイルス氏の「ヂユーテイー」を譯述したるもの、譯者が此書を發行するに至りたるは、趣意其最初に附せる文章に於て詳かに述べられたり、げに我國民の現狀殊に學生の多數の如何の狀態にあるかを一考すれば此書の稗益すべき所決して少々なるざるべきを思はずんばあらず。譯文極めて穩健にして原著の面影を捉へ得たるは極めて多とすべきものあり、元來スマイル氏の所說は所謂獨立獨行的の社會的人物を製造するを目的とするにあるを以て、其說に哲學的の推論乏しく其文に文學的の趣味豐かならず、我國中學以上の學生にして少しく生意氣に流れたるものゝ間には、多少冷笑を以て迎へらるべき平凡の論議なきにあらねど、實際的の敎訓としては殆んど完全なるものといふべく、之を守りて以て人格を高め、之を服して以て行動を正しくし、所謂士君子の域に進するの方途は其書中何れの頁を讀むも殆んど見出されざることなかるべし、世の輕佻なる惡風に染まて、眞面目なる行路を進まんと欲するものは必ずや此書に於て力強き教導者を見出したるの感あるべきなり。

（定價三十錢）

▲世界お伽噺第六十一編 病魔降伏

岩谷小波氏編
博文館發行

露國のお伽噺を例の輕快なる筆によつて綴りたるもの、附錄として「窓の聲」を含めり、病魔降伏は慈悲心の爲めに意外なる大幸福を來せるを說き、窓の聲は機智によりて非常なる危險を免れたるを書けり、何れも

怪談めきて餘りに人情にかけはなれたるの嫌あれども、こゝらか所謂お伽噺の特質なるべきや。予は却て附錄をよしと思へど予の小さき妹は初めの方が面白いよといへり。

（定價八錢）

▲土地國有論

四川光二郎氏著
平民社發行

四六版を二つにした小形の本で百頁にも滿たざるものであるから長くはない、長くはないが內容は決して乏しくない。土地私有の弊害や農民救濟の方法を說き、又各國に於ける農民救濟運動などを書いて大に社會主義の實行全からんことを熱望してある、本年の一月から思ひ立つて其材料は多く旅行中の見聞又はワレース氏の土地國有論やシモンス氏の「米國の農民」から得たとある。著者は現社會主義の中心ともいふべき平民社中の人である、其論は無責任又は虛談空說などの域を去ること頗る遠く實に眞面目な熱誠なるものである、我等は謹んで著者の持說を聞いた此論が社會學上から見て如何なる程度まで正確であり、又如何なる點が間違つて居るかに就ては今少し硏究を積んだ上でなくてはいへぬから、今は斷言せずに置く。

（定價八錢）

▲東西武勇談

中學世界秋季增刊
博文館發行

日本の部、支那の部、西洋の部に分ち、大町桂月、靈野止水、上村左川三氏重に筆を執る、東西勇士の面影を最面白く描出したるものにして讀ろに古英雄と語るのおもひあり、學生は勿論、家庭の讀物としても彼の十五大戰爭と共に有益なるものなり。

▲南山の卷

巖谷小波氏著
博文館發行

少年日露戰史の第四編である、この本の趣味あつて有益なことは世に旣に定評ありて今更言はぬが、之が大成した曉には、恐らく少年の讀物に限らないで、普れく國民に讀まれべき一大戰史となるであらう。

▲間宮林藏

地學雜誌第十六年第百八十九號

今を距る六十年前樺太から滿州へかけて大膽な探險をした間宮林藏の事蹟は、日本をして樺太滿州の事情を知らしめた大功あるもので、今地學雜誌が其事蹟を詳細に編輯して其一號を之が爲めに割いたのは大に吾人の意を得たものである。

▲日本學生寶鑑

井上哲次郎氏著
大倉書店發行

十年程以前博文館あたりから出さうな本であるが、何しろ釘裝の美と、博士の名を以つて重きをなして居る、併し學生は此本を一册備くて置けば何んでも來いの氣焰を吐く事が出來る、特に女子の爲めには最適當の座右銘であらう。

（定價八十五錢）

▲淸及韓

文學士箭內亘氏著
富山房發兌

世界大觀第二編で、「露西亞」に次いで出たもの、單に一と通りの淸と韓の狀態を書いたもので少しも之れが評論らしいものではない、淸韓に關する一の參考書として備ふるに過ぎぬ。

（定價五十錢）

久良岐社中川柳清規

吾等は吾國文壇に缺乏せる滑稽趣味の普及を圖り、先づ韻文の上に古川柳の遺響を繼ぐべき、明治の新川柳を起さんとし、爰に同好の士を募る

(1) 入社せんと欲する者は、雅號氏名宿所(可成は年齡、職業、原籍等附記せられたし)を明記し文藝上の新川柳創作に從事し、阪井久良岐先生の教示を仰ぎ度旨を半紙に認め、社中宛にて差出さるべし

(2) 社費は添削の有無に關せず、毎月貳拾錢を納むべし、但數ヶ月分前納するも妨げず

(3) 遠隔の地に在る社中は、小爲替を以つて東京市麹町區富士見町二丁目郵便受取所宛振にて送付せらるべし、小爲替の便宜なき地方は郵券代用を妨げず

(4) 社中は其創作に就いて先生の添削を乞ふを得、但新聞課題の外、特に撰評を乞ふ時は、一ヶ月五十句内外たるべし

(5) 添削懇切に、批評は極めて嚴正なるべし、これ吾社の標準が他の無責任者の濫撰と殊なる所以なり

(6) 郵書にて添削を乞ふ者は、必す返稿税三錢を添へらるべし

(7) 社中以外の士にして、一時の添削を乞ふ者は謝義隨意(郵券代用不苦にて)納めらるべし

(8) 社費は毎月事務所宛にて屆けらるべし、都合にて附近の幹事に委托するも可なり

(9) 第一日曜を除き毎日曜日中午前川柳質疑添削等の需めに應ず(但夏期を除き春秋冬の三期中、第一日曜を除き毎日曜午前九時より研究の爲め小集會を催す、會費十錢辨當持參の事)

(10) 毎月一回川柳會を事務所に開く、時日は第一日曜を以つて例會日と定む、但時日會場變更の節は電報新聞紙上に豫告す、但出席者は會費金十五錢を納むべし

(11) 年一回乃至二回社中の懇親を圖る爲め大會を開くことあるべし

(12) 發會(會費三十錢以上)納會(二十錢)を納むべし(但辨當持參に及ばず)

(13) 添削を經たる佳句は當分の中、電報新聞、横濱貿易新報、雜誌中央公論等に掲載せらるべし

(14) 地方の社中十名以上に及ぶ時は、支部を設くることを得

(15) 社中二百名に及ぶを待つて、雜誌を發行すべし(但雜誌代は別に實費を支拂ふべき事)

(16) 社費及び會費等は社友の收入程度に依り、事情酌量の上隨意に納めしむる事あるべし

(17) 事務所は東京市麹町區富士見町六丁目十番地阪井方に置く

(18) 幹事主任副主任等は一年を以つて一期と定む。

右條項明治卅七年七月十六日第二川柳會の決議に基き、更に先生の刪正を經たる者とす

東京市麹町區富士見町六丁目十番地
久良岐社

當期幹事主任 東京 宮崎水日亭
同副主任 同 金子天縁
幹事 同 富田呑吐坊
同 同 關口文象
同 同 山道啞蟬坊
同 同 下山岐陽子
同 同 田村頴臺師
同横濱(中村町弘誓院)久良岐社支部主任 安藤幻怪坊

明治三十七年九月三十日印刷

明治三十七年十月一日發行

發行兼編輯人　武田福松

印刷人　清水金右衛門

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　反省社（電話下谷九一九）

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

前號目次

明治三十年一月廿九日 第三種郵便物認可

發行所（電話下谷九一九）東京市本郷區西片町十番地 反省社